ENLIGHTENASIA IN JAPAN 2013

Seminar "Asisn Sense of Light"

Lighting Design International Symposium

Lighting Design Session

Ariake Akali Stud

Bus Tour "Tokyo Light Cruise with Lighting Designers"

Excursion "Trip to enjoy the traditional Japanese culture & lights in KYOTO" $\,$

Farewell Party "Light is Wonderful!!"



Enlighten Asia in Japan 2013 Activity Report エンライテン・アジア・イン・ジャパン2013 | 活動報告

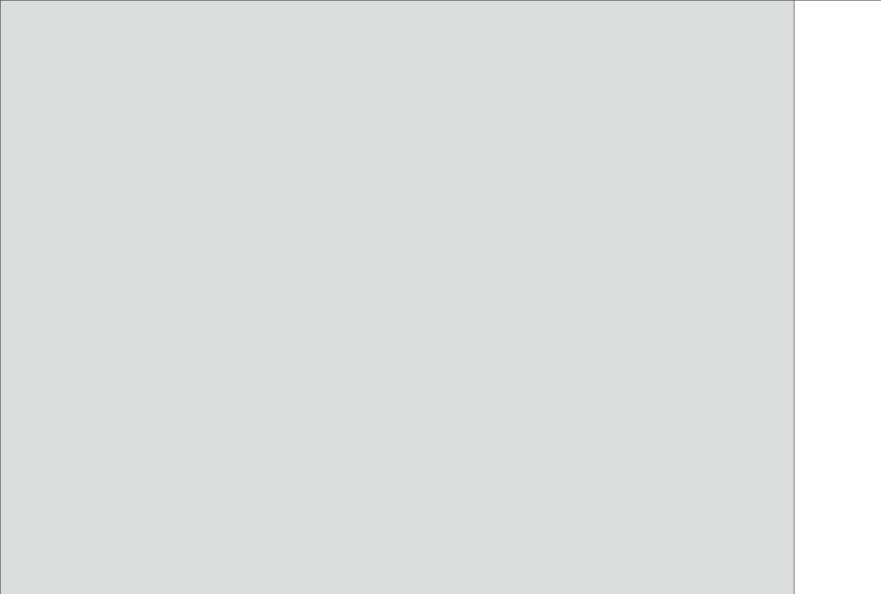


MAINSITE: TOKYO BIG SIGHT

13.03.05 TUE ► 03.08 FRI











目次 Contents	ENLIGHTENASIA IN JAPAN 2013		
	02	IALD Japanの役割とENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013の成果	
Symposium	04	照明デザイン 軌跡と展望 Lighting Design-Yesterday, Today, and Tomorrow アジアの照明デザインショーケース/6人のデザイナーが語るアジア感覚の光 Asia Lighting Design Showcase — Six Designers Discuss Asian Lighting Style	
From OUTSIDE	14	照明は心の問題とどう向き合えるのか How Can Lighting Face the Issues in People's Hearts	
Seminar	18	Asian Cool & Hot!! Asian Cool & Hot!!	
	20	デザイン日本、開発ルポタージュ Design Japan, Development Reportage	
	22	アジアProjectにおける照明デザイナーの役割 Roles of Lighting Designers in the Asia Project	
	24	光を伝える技術・光を構築する手法	
	26	Technologies to Convey Light and Methods to Construct It 光の生理と心理 ~記憶をつくれるか、照明デザイン~	
	28	Physiology and Psychology of Light – Whether Lighting Design Can Create Memories 若手デザイナーが語る世界における照明デザインの時流とこれから	
	30	Current Trends and the Future of Worldwide Lighting Design, as Told by Young Designers 照明デザイン教育に何を求めるか	
	32	What We Ask of Lighting Design Education 岐路に立つ照明デザイン	
	34	Lighting Design Standing at a Crossroads Louis Clair in Europe and Asia	
	36	Louis Clair in Europe and Asia Charles Stone in USA and Asia	
	30	Charles Stone in USA and Asia	
Akali Studio	38	有明あかりスタジオ Ariake Akali Studio	
Bus Tour	40	照明デザイナーとめぐるTokyo Light Cruise Tokyo Light Cruise with Lighting Designers	
Excursion	42	日本の伝統文化とあかりを楽しむ京都の旅 "Trip to Enjoy the Traditional Japanese Culture & Lights in KYOTO"	
Farewell Party	46	フェアウェルパーティ Light is Wonderful!! Farewell Party "Light is Wonderful!!"	
Lighting Design Session	48	どんな照明デザイナーになる? What Kind of Lighting Designer, Do You Want to Be?	
	49	暮らしの未来 Future living	
	50	日本古来のひかり Lights from the Ancient Times in Japan	
	51	インテリアでランドスケープで照明デザインは何をする? How does Lighting Design Work with Interiors and Landscapes?	
	52	照明デザイン界 ふしぎ発見! ~クイズで知る照明最前線~ World Wonders in Lighting Design	
Round Table	53	ENLIGHTEN ASIA IN JAPANを通して伝えたかったこと What We Wanted to Convey Through ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN	

What We Wanted to Convey Through ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN

IALD JAPAN 会員名簿 IALD JAPAN 会員アンケート

IALD Japan の役割と ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013の成果

国際照明デザイナー協会(IALD)

国際照明デザイナー協会(IALD=International Association of Lighting Designers)は、 米国シカゴに本部を持つ世界最大のプロの照明デザイナーを中心とした職能集団です。1969 年に設立された歴史を持つ組織で、北米、南米、欧州、オーストラリア、アジアを中心に、現在世界 中に950名ほどの会員が登録されています。職能としての照明デザイナーの有益性や社会的役 割を啓蒙しつつ、学生や若い照明デザイナーの教育育成にも努めています。また、毎年米国で行 われるLight Fair Internationalにおけるセミナー・プログラムの企画、さらに照明デザインと照 明業界を結び付けるENLIGHTEN AMERICASやENLIGHTEN EUROPEという国際会議 を毎年開催するなど、多角的なイベントや事業を展開し広く照明業界に貢献しています。

IALD Japanは、そのIALDに加盟する日本の代表的な照明デザイナーの集団で、セミナーや研 修会を通じて照明デザインの啓蒙や職能の研鑽に取り組んでいます。2010年当時には16名だ った日本の登録会員は、相互の連携を求めて集い徐々に会員数を増やして、現在では70名を超 える認定会員数となりました。もちろんIALDという国際的な組織の中で日本支部としての役割も ありますが、私たちは主に日本固有の照明デザインの課題を取り上げて、広範に照明や建設業界 の諸兄と連携していく所存です。これまで日本には、多くの優れた照明デザイナーが活躍している にもかかわらず、職能を連携する団体がありませんでした。IALD Japanは独立したプロの照明 デザイナーを中心とした組織ではありますが、照明関連の企業に所属するデザイナーや技術者、ま た教育関係者や学生など、幅広い関係者を新会員に加え、業界の健全な進化発展に寄与してい きたいと考えています。

ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013の意義

"ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013"はアジアではじめて開催された照明デザインの世界会 議イベントです。 IALD Japanが主催し日本経済新聞社の後援を得て大きな成果を得ることがで きました。IALDは照明デザイナーによるセミナーイベント"ENLIGHTEN AMERICAS"を2007 年より北米諸都市で毎年開催し、この継続的な活動はヨーロッパにも伝播して"ENLIGHTEN EUROPE"として開催しています。参加者はIALD会員に限ることなく照明業界や建設業界全般 に及び、照明デザインを取り巻く業界全般の課題をテーマにしています。このENLIGHTENの思 想を受け継ぐイベントをアジアで行いたいという声が2010年にあがり、IALD Japan の会員有志 で企画実行委員会を発足させました。

多忙を極める照明デザイナー各位が自発的な会合を頻繁に開き、日本経済新聞社や日本照明 器具工業会の方々との意見調整を重ね、ライティング・フェア2013のイベントとの相乗効果を期待 してさまざまなセミナーやシンポジウムのプログラムを立案しました。プログラムのテーマは"Asian Sense of Light=アジア感覚の光"。今や照明デザインはすべての国境を越えグローバルに語り 合い、ますます斬新なデザインが求められる一方で、地球規模では、省エネ・低炭素時代に対応し たエコロジカルな照明デザインの可能性が叫ばれています。欧米で先行した照明技術やデザイ ンの方法論はアジアに渡り、多様な伝統文化に基づいた独特な照明デザインを生み出しつつあり ます。アジアの国々で発信する照明デザインの潮流とは何か。私たちはこのイベントを通して多く の知見を交流し、アジアでの照明デザインの魅力と課題について討論しました。

照明デザイナーの今後の課題

4日間にわたるアジア初のこのイベントは、さまざまな反響を呼び起こして閉会しました。 まずは このイベントを通じて、日本の照明デザイナーたちの新たな連携と強い結束力が示されたこと は最大の成果です。日本以外のアジアの諸国にも多くの照明デザイナーが活躍する昨今で すが、これほどまでに強い信頼と協力関係を持続してイベントを成功に導いた例は他にありま せん。その意味では、小さな反省事項は数多くありますが、それ以上に希望の持てる未来を 示すことになりました。

進化発展する技術の前に照明デザインには常に斬新な回答が要求されています。光と人間の 関係は加速度的な変容を見せているのです。しかし一方で照明デザインが社会に対して役立つ ためには、エネルギーを浪費することなく環境に配慮した成果が期待されています。とりわけ2011 年3月に大震災に見舞われた日本では、照明がやっと量より質への転換が叫ばれるようになりまし た。これまでの明るいだけの価値観がやっと払拭されつつあります。この社会現象を好機として 私たち照明デザイナーは照明業界との絆を一層強固に保ちながら、ますます社会全般に照明の 力を啓蒙していかねばなりません。

ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013 は日本やアジアにおける新たな照明デザインの第一章を 示しました。これを起点として、IALD Japan はさらに洗練した職能を目指し、現代社会に対し有 意義な発言を開始するに違いありません。

而出 董 │ 照明デザイナー |A| D

照明デザイン 軌跡と展望

Lighting Design-Yesterday, Today, and Tomorrow

講演者|石井幹子



Speaker

石井 幹子

株式会社石井幹子デザイン事務所/都市照明か らライトオブジェや光のパフォーマンスまでと幅広い 光の領域を開拓する照明デザイナー。日本のみな らずアメリカ、ヨーロッパ、中沂東、東南アジアの 各地で活躍。近年はオペラや野外能の照明にも 取り組む。東京藝術大学美術学部卒業。フィンラ ンド、ドイツの照明設計事務所勤務後、石井幹子 デザイン事務所設立。北米照明学会会員、国際 照明デザイナー協会特別会員(Fellow)、日本照 明委員会会員、照明学会名誉会員、光文化フォー ラム代表。

照明デザインの黎明期からオイルショック

「照明デザイン」とは何か。黎明期には誰も 分かっていませんでした。まず「デザイン」とい う言葉、概念が人びとに伝わりはじめたのが 1960年代のことでした。その頃「デザイン」と いえばファッションデザインのことだと思われて いました。その後にグラフィックデザイン、イン ダストリアルデザインが出てきます。私は「照 明デザイン」の黎明期は1960年代、そして 1970年代は照明デザインの「はじまりの年」 だったと思います。

ところが1973年、第一次オイルショックが起こ りました。銀座のネオンも消され、高速道路の 照明まで間引いて点灯する始末でした。照 明は「生贄の羊」でした。照明デザイナーに 仕事なんてありません。「本当にこれから照明 デザイナーとしてやっていけるのだろうか」と 思う日々が続きました。

海洋博から国際照明学会

1995年の沖縄海洋博では屋外全域の照明 デザインを依頼されましたが、何か新しいこと をやらなくてはいけないと考えました。そこで、

8mほどの深さの海中に光源を沈め、約1km にわたって海を光らせるという試みを行いまし た。実験に実験を重ねた末に実現できたもの でした。

1970年代でエポックメイキングだったことは、 CIE、国際照明学会の大会が京都で開かれ たことです。1978年のことでした。ホスト国と して、海外の方たちにどんな夜景、照明を見 せればいいのかとずいぶん悩みました。京都 タワーからの夜の街並みを見てびっくりしまし た。真っ暗な街並みが広がるばかり。ここに CIEの方がたをどうやってお招きすればいい のか。試行錯誤の連続でしたが、結果として は嬉しいものになりました。私が考えたのは、 京都の古建築、平安神宮ですとか京都市の 博物館に夜間景観照明をすることでした。そ れから街の個性をつくり、夜間の安全を保つ ことにも一役買えるということで、その後、手 弁当で各地の夜間照明、ライトアップキャラバ ンを行ってきました。ライトアップを通じて、細々 ではありますが、光の大事さを説いてきまし た。照明デザインにとって揺籃期、赤ちゃんの 時代でした。

1980年代 — ライトアップ

1986年には横浜ライトアップフェスティバルが 開かれました。ずっとやり続けてきたライトアッ プキャラバンの、ある程度まとめが出来たので はないかと思っています。ライトアップフェステ ィバルでは、横浜の開港記念館をライトアップ しました。わずか5灯のライトで大きな効果を 得られたのです。市民の方たちからは、ぜひ ライトアップを常設化してほしいという声が上 がりました。現在、横浜では55カ所ほどの場

所が常設的にライトアップされています。

そういった動きを受けて、奈良県から県内の 主要な建築をライトアップしたいというお話を いただきました。東大寺の大仏殿と楼門、そ れを囲む回廊をライトアップいたしました。興 福寺の五重塔、この場合は明るく照らし出す だけではない、あえて暗いところをつくるという 照明にしています。暗い面が2面、明るいとこ ろが2面となっています。

この頃から、日本では大型橋梁がつくられる ようになりました。その第一弾となったのが横 浜ベイブリッジです。白い橋をただ白いままに しておくのは面白くないと考え、1時間に1回、 ブルーの光を照らそうと考えました。フィルター の開発からはじまり、苦労しましたが実現する ことができました。

昭和天皇のご崩御の1989年、時代は平成 に入りまして、照明デザインというものがかな り認知されてきたと思います。東京タワーのラ イトアップもはじまりました。ライトアップをはじ めてから、東京タワーは東京のランドマークと なり、夜空に浮かび上がる東京タワーが好き だとおっしゃる方がたいへん増えてまいりまし た。これでやっと照明というものが景観や人び との心理に影響を与えることができると証明で きたと思います。東京タワーの夜景が見える ことを売り物にしたレストラン、マンション、オフ ィスが非常に増えました。照明が経済的な価 値を上げるということを実証できたんです。

1990年代 — 光の喜びを感じてほしい

1990年代は照明デザインがはじまった第一 歩だと思っています。

1990年に国際花と緑の博覧会が開かれまし

た。それから1992年頃から函館のライトアッ プの計画、続いて長崎、姫路と各地でライトア ップの計画が行われるようになりました。

1995年、阪神淡路大震災があり、壊滅的な ダメージを受けました。そんな中での照明デ ザイナーの活動は、非難されることなく、あか りが灯ったという喜びを与え、人びとから歓迎 されました。

函館でのプロジェクトは、有名な函館の夜景 を「巡って歩く夜景」に変えようという試みをし ました。歴史的な建造物を選んで照明を施し ていく。それを見て回るのはまるで宝探しのよ うなワクワクとした楽しいものとなりました。

函館のムーブメントは長崎へと波及しました。 函館と同様に夜景を観光資源としようとするも のです。長崎にも多くの歴史的建造物があり ます。大浦天主堂、眼鏡橋といった、主に江 戸期のものから、室町時代のものまである。こ れらをライトアップしていきました。ただ、長崎 の街並みは昼間はとても美しいものとはいえ ません。ところが、暗くなったら照明によって 見せたいものだけを見せる、そういうことが可 能になるわけです。

姫路では、ただ姫路城に光を当てるのではな

く、姫路市全体の照明計画まで考えました。 市街地から城がどう見えるのか、新幹線の駅 から城までの道をどう演出していくかなどを考 え、ランドマークとしての姫路城を中心に、夜の 都市景観を計画しました。このような考え方は、 姫路での計画がスタートになっています。

照明とエネルギー太陽光発電

2000年から2001年頃より、太陽光発電により 力を入れるようになりました。照明を行う場合、 その場でエネルギーをつくるという意味は大き い。レインボーブリッジでも一部ですが世界に 先駆けて太陽光発電を取り入れています。

一番大きかったプロジェクトが、明石海峡大 橋です。全長約4km、2本の支柱の間が約 2kmと、大変大きな橋です。 橋のライトアップ の実現には長い年月を必要とします。だいた い4~5年、長いものでは6年以上というもの もあります。それは数多くの面から検討を行 わなければならないからです。たとえば航行 量――ここは多くの船が通る、ここはあまり船 が通らない―、どこが漁場となっているのか、 自然環境への配慮はどうなっているのかな ど、いろいろな条件をクリアしながらプロジェク

トは進められていきます。明石海峡大橋では 30数通りの照明プログラムが組まれました。

照明デザインの2000年代

私は2000年代を照明デザインの開花期と位 置付けています。一般の方たちの照明に対 する関心が深まってきたのもこの頃からです。 鳥取花回廊は大山の広大な自然の中につく られた植物園です。ここでも自然エネルギー を積極的に使っています。北九州の門司港 では上からの光によるライトダウンとでもいう演 出を試みています。

熱海での海岸線を照明によって演出するプロ ジェクトでは、安全確保のため薄いブルーの 照明を使いました。

浅草の浅草寺のライトアップでは、地元の方 たちが資金集めをしてくれました。そのため6 年ほど待たなくてはなりませんでしたが。光に よって生活が変わる、光によって夜を長くする ことに貢献できたと思います。

長野灯明まつりでは檜皮葺きの建物が10日 間、五色の色に染まります。厳寒期の長野に、 この10日間の催しに70万人という人が訪れ ます。大勢の方が見にきてくださる、これも光



2005年には愛・地球博が開催されました。こ の博覧会は極めて環境を重視したもので、照 明もできるだけミニマムに、そして自然の材料 を使うといった制約がありました。スギの間伐 材を使った照明ポールなどエコ材料を使った 試みがなされましたが、この時はまだLEDが

登場するには早すぎた時期でした。

の力ではないかと思っています。

倉敷でも仕事をさせていただきました。江戸 時代の面影の残る倉敷の街並みに対し、照 明器具は絶対に見えてはいけない、工事の ために土を掘り返してはいけない、堀の水を 抜いてはいけないなどと、非常に厳しい規制 がありました。そんな中で、私たちはアクロバ ティックな方法を考えつきました。それは、既 存の街路灯の笠の中に小さな投光器をふた つ設置するというものでした。その投光器によ って、横方向に光を伸ばすという設計をしまし た。街路灯内の電源ですべてまかない、投 光器は省エネ設計のものですから非常に小 型につくることができました。そして街並みに 面した窓の内側に小さなスタンドを置き、室内 からの光で街の照明をしようとしました。これ も市の予算の中で実現できました。

光で世界に発信する

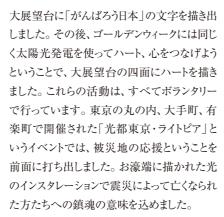
ここ数年、私どもが力を入れておりますのが、

光で日本の文化を海外に発信していこうとい うものです。日本とフランスの交流150周年を 祝いまして、パリで照明デザインを行いました。 私と娘の石井リーサ明理――パリで照明デザ イナーとして活動しています――のふたりのコ ラボレーションです。セーヌ川の25橋をライト アップしました。さまざまな形の橋があって、そ れを日本の色で染めたい、というのがひとつの コンセプトでした。それに加えて、シテ島の岸 壁に幅60mほどにわたって、ここに日本の美 術品150点を映し出しました。

パリだけではなく、イタリア・ローマのティベリー ナ島、日本とハンガリーの国交回復40周年の 記念イベントなど、光でメッセージを送ることに 力を入れています。

2010年代 — 東日本大震災を超えて

2010年代に入って最初の大きな出来事は、 東日本大震災ではないかと思います。未曾有 の災害であったと同時に、原子力発電所の 事故の問題があります。電気を使う仕事をし ている照明デザイナーは、このことを重く受け 止めなければいけない。震災から1カ月、私 たちがしたことは東京タワーに「がんばろう日 本」を光で描こうというものでした。太陽光発 電器をテントの足元に張りまして、そこで起こ した電気でLEDのイルミネーションを光らせ、



もうひとつ、「創エネ・あかりパーク | というも のがあります。エネルギーの自産自消がコン セプトです。これはどうしてもやりたい、やら なくてはならないと協賛会社を募り、経済産 業省と環境省を説得し、皆さんのご賛同を 得て実現できたものです。会場の芝公園は 無料で使わせていただくことができ、その場 で発電してその場で美しいあかりをつくりまし た。すべての電力は電気自動車でまかない ます。深夜電力で充電した電気自動車にカ チャッと接続すれば照明が点灯するわけで す。LEDを使ったことで、電気自動車の発 電からだけで約3万坪の公園に照明を点灯 することができました。

東京ゲートブリッジは面白い形の橋です。羽 田空港が近いこと、また晴海埠頭があり、下 を大型の船が航行するという、相反する条件 がありました。飛行機のためには橋の高さを 低くしなくてはならず、船のためには橋桁を高 くしなくてはなりません。そこから導き出された のが、恐竜が2頭向かい合うような形です。 この橋をライトアップするに当たり、どこから見 てもこの形が見えることを考えました。LEDを 使った橋桁の照明のほとんどを太陽光発電 でまかなっています。1973年の第一次オイル ショックの時、照明がどんどん消されていくと いう残念な思いがいまだに心に強く残ってい ます。自産自消――自分で使うエネルギーは自 分でつくる――に注力する理由のひとつです。 今年(2013年)2月14日に初点灯された、 新しい歌舞伎座です。ここではすべてLED が使われています。屋根が明るく照らされて いるのがお分かりいただけると思います。こ れは後ろに建つ歌舞伎座タワーの130m の高さから光を当てています。大変優れた LEDの技術です。全体の照明は色温度を 変えることができ、夏、春秋、冬で設定を変 えています。江戸時代の時刻の数え方は現 在と異なり、日の出から日の入までを等分に 分けた不定時法です。この歌舞伎座の照 明は、歌舞伎が生まれた江戸時代の不定時 法を使ってプログラミングされています。です から、毎日少しずつ点灯時間・消灯時間が 変わります。

照明デザインの未来

照明の世界は、技術とデザイン、このふたつ が車輪の両輪のように進んでいかなくてはな らないと思います。そのふたつの車輪をがっ ちりと支えるのが社会なんです。社会とは多く の一般の方たちです。多くの一般の方たちが どれだけ照明デザインに関心を持ってくれる か。あかりに対する関心を呼び起こすことが、 重要になると思います。社会の中で技術とデ ザインが一体となって進むべきでしょう。どれ かだけが突出してもよくない。全体がよくなら なければならない。社会も大きくグローバル化 してきています。世界の人たちとどう向き合う か、世界の潮流はどうなっているのか、エネル ギーをどう使うのか。照明デザイナーは、そこ に深く関わっている立場をいつも自覚していき たいと思っています。



アジアの照明デザインショーケース 6人のデザイナーが語るアジア感覚の光

Asia Lighting Design Showcase — Six Designers Discuss Asian Lighting Style

IALD JAPAN + LIGHTING FAIR

モデレーター | 面出 薫 バネリスト | ロン・ハオレイ、J.Kヤオ、ティノ・クワン、ルイ・クレア、チャールズ・ストーン

Moderator: Kaoru Mende, Panelists: Rong Haolei, J. K. Yao, Tino Kwan, Louis Clair, Charles Ston,



Moderator

面出 薫

株式会社 ライティング プランナーズ アソシエーツ/1950年東京生まれ。照明デザイナー。照明文 化研究会「照明探偵団」を組織し、団長として精力 的に活動を展開中。東京国際フォーラム、JR京都駅、せんだいメディアテーク、六本木ヒルズ、シン ガボール中心市街地照明マスターブラン、JR東京駅丸の内駅舎復原ライトアップなどの照明計画を担当。国際照明デザイン大賞、日本文化デザイン賞、毎日デザイン賞などを受賞。著書に『世界照明探偵団』鹿島出版会、『都市と建築の照明デザイン」六耀社、『後影のデザイン』六耀社、『光のゼミナール』鹿島出版会など。

Panelists

ロン・ハオレ

清華大学照明研究所/主に都市照明と建築 照明を研究領域としている。Code of urban lighting planningの共同著者のひとり。 共 同著者として、北京の都市照明の計画使用書や 北京夜間景観照明の技術的仕様書などの地域 基準策定に参加している。都市照明計画、ランド スケーブ照明デザイン、自然光利用などを主な業務 としている。CIE国際カンファレンスやその他照明 カンファレンスなどで講演を行っている。

JK・ヤオ

クローマ33 アーキテクチュラル ライティング デザイン/パーソンズ・スクール オブ デザイン、ニューヨーク。1986 ~1988現代美術、建築照明デザイン修士号取得。1998年よりIALDプロフェッショナル会員。主な業績は2008年の北京オリンピック「セントラルバーク」チーフ照明デザイナー(北京市建築設計研究員有限公司と協働)、「鳥の巣」(Landsky Lighiting Groupと協働)など。主な受賞はIALD Radianceアワード&優秀賞「CSK国際空港ターミナル1改修 桃園、台湾」(2004)、IALD優秀賞「Chun-Lien Bank 台湾」(1999)、IALD Award of Merit「M39/40, 台北、台湾」(2003)、IALD Compendium of Good Practice「Compal Electronics 本社、台北、台湾」(2001)など。2002年 IALD 照明賞審査員。

「ENLIGHTEN IN JAPAN 2013」のメインテーマは「アジア感覚の光」。欧米やアジアを拠点に、アジア各地でプロジェクトを手がけてきた照明デザイナー6名によるシンポジウムが開かれた。

「アジアには欧米とは異なる文化、気候風土、 クライアントの考え方があります。ライティング デザインにおいても、アジアと欧米では光に対 する価値観や仕事の進め方に違いがありま す。もちろんアジアの中でも違いはあります。 たとえば日本と中国では違いますし、インドや 東南アジアも違う。アジアと一口に言っても、何 しろ広い。一般的にはヨーロッパを除くユーラ シア大陸全般がアジアですから。このシンポ ジウムでは光に対する考え方の差異を話して いきたい」と面出氏が語る。

アジアにおける光

チャールズ・ストーン氏は、米国ニューヨークを 拠点に仕事をしている。面出氏との親交が深 く、互いに駆け出しの頃の、35年ほど前から 建築照明の道を一緒に歩んできた。アジアで プロジェクトを手がける場合、「ニューヨークの デザイナーを雇う価値がどこにあり、どうすれ ば地域に貢献できるかを考え、ひとつのアイデ アを計画地の環境に持ち込み、さまざまな意 見の一致を図ることで、文化を超えてアイデア を広げてきた」とストーン氏は言う。「西洋や 東洋に関係なく、基本的に理解すべきことが あります。それは、光には3種類あるというこ とです。『アンビエント・ルミネッセンス』(周囲 を取り巻くような柔らかな光)、『フォーカル・グ ロウ』(ローマのパンテオンなどのように、天井 の穴から太陽光が差し込んだ時の、指向性がありコントラストが強い光)、『プレイ・オブ・ブリリアンス』(シャンデリアなどに見られる遊び心のある光の輝き)です」。ストーン氏は広い視点から「アジア感覚の光」について語り、その代表として日本の光に対する印象を説明した。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の内容にある「柔らかい」「光が分散する」という表現や「光が折り重なり、物語を語る」という部分を取り上げて「非常に高度で上質な文化だ」と語った。同氏はアジアのプロジェクトを手がける時に常に参考にしていると言う。

日本でしかできない品質の照明

面出氏は、東京を中心にシンガポールと香港にも事務所を置くライティング プランナーズ アソシエーツで手がけた仕事を基に、日本とそれ以外のアジアの国々の光の違いを説明した。「東京国際フォーラム」では施工精度の高さを生かし、14.5万㎡の複合公共建築そのものが、ダイナミックな建築照明のサンブルとしてデザインされた。「JR京都駅」では陰翳礼讃の世界観に通じる暗さが理解される地域で「陰影をデザインする」という考え方を確立した。「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」では、7万個の小さな「光」が水盤に灯された。光はわずかな風を受けて水に揺らめき、自然と祈りの気持ちを起こさせる鎮魂の光をつくり出した。

水墨画のような光

ロン・ハオレイ氏はパネリストの中で一番若いが、中国の精華大学で多数のプロジェクトを手

がけている。同氏は公園の照明デザインを手がけた際に、色温度や照度を低く設定し、器具も低い位置に配置した。「経験に基づいて感情に変化をもたらすことを重視したんです。アジアの照明は、水墨画のようなイメージで、暗い部分と光る部分が共存しています」と同氏。また、「たとえばモニュメントの照明を考えてみましょう。西洋では外から光を当てることで目を引きつけます。一方、東洋では光を内側に隠すんです」と西洋と東洋の違いを挙げた。

アジアでのカラーライティングとコンセプト

面出氏が「もっとも情熱的な照明デザイナー」 と紹介したルイ・クレア氏。フランスを拠点に中 国やシンガポール、マレーシア、ブラジル、スペ インなどに事務所を構え、グローバルな仕事を 展開している。仏のモン・サン=ミシェルで空に 上るような形の影をデザインするなど、歴史的 建造物から新しい都市の演出まで手がけてい る。ティノ・クワン氏から「ヨーロッパではしっとり とした美しいライティングをしていたが、中国で はカラフルで躍動感のあるライティングをしてい て驚いた。中国のクライアントの要望に合わせ てスタイルを変えたのか | とルイ氏に質問があ がると、「スタイルを変えたのではなく、子どもの 頃に戻っただけ。フランスでは照明に色を使っ てはいけないという制約の中で仕事をしてきた が、その制約のない中国に行ってさまざまな想 像をして、色や動きのある光を多用する照明 デザインを提案してきただけだしと答えた。

ファサードはキャンバスではない

ストーン氏の元で働いていた25年前に面出

氏と知り合い、現在は台湾を代表するデザイナーとして活躍しているJ. K. ヤオ氏は、「色をたくさん使うことには反対しないが、あらゆる色がごちゃごちゃと入っていることには反対だ。建築のファサードをキャンバスにしてしまうのはよくない。意味があって色が変わるのはいいが、現状は多くが意味もなく色を変えている」と語った。続けて同氏は「コンセプトは何かとよく聞かれるのだが、建築家やインテリアデザイナーにコンセプトがあり、それぞれが別のコンセプトを持つとごちゃごちゃする。私が指示を出すのは『正しくやりなさい』ということです。ただし、どこに対してもまったく同じアプローチをするのではなく、職人の能力や状況に応じてデザインを変える。良いデザインを

提案しても、状況に合わない内容を進めると、 出来上がった作品はひどいものになる」と話 した。

光の将来像

日本でも多くの仕事を手がけ、5つのレストランのオーナーを務める美食家であり経営者でもあるティノ・クワン氏。「LEDは光源の将来像です。ここに多くのメーカーの方がいたら、すべてのメーカーが同じ基準で製品をつくることをお願いしたい」と強く語った。そして「照明デザイナーが品質のよいLEDを使えるようにして欲しい。中国の多くのビルのようなさまざまな色を使う必要はないんです。以前、中国での移動中に、古い建物が並ぶ中で光の色が変わる



Panelists

ティノ・クワン

ティノクワン ライティング コンサルタンツ/1979 年ロンドンで開業し、その後香港にスタジオを移す。 国際的に高い評価を受け もっとも著名が昭明デ ザイナーのひとりとして認知されている。30年以 上にわたる照明デザイン経験をもつ彼の業績は、 照明業界内外から広く受け入れられている。プロ ジェクトは、国際的な一流ホテルなどのほか多岐 にわたっており、アジアパシフィックホテルデザイン 協会の副プレジデントにも招聘されている。また清 **華大学の講師として、新世代の照明デザイナー** の育成を行う。照明デザインの専門知識に加え て、情熱、知恵、才能、創造力で世界を照らそうと している。2007年に香港における「Ten Most Outstanding Designers」2008、2009年に は「Outstanding Greater China Design Award」を受賞。

ルイ・クレア

ライトシーブル/映画の世界から出発し1978年より照明デザインに従事。1983年独立レライトシーブルを立ち上げ、1990年には東南アジア、中国、中東まで事業を拡大した。1992年ポイボス建築、ステージ照明デザイナー協会の創設者となる。1995年建築照明デザイナー協会(A.C.E)、2001年/2003年同協会プレジデントを務める。2000年よりIALD会員。国際照明器具産業のマーケティングコンサルタント。世界各国で講演、ワークショップなどを行っている。建築家である彼の息子エマニュエルは1998年パリのライトシーブルに参加。現在シンガポール、マドリッド、中国、マレーシア、ブラジルに6つの姉妹会社を持つ。主な著書に"Architectures of Lights"。

チャールズ・ストーン

フィッシャー マランツ ストーン/1976年プリンストン大学、舞台・ダンス照明デザインで学位を取得。 当初は舞台照明デザインを行っていたが、すぐに 建築照明デザインも従事するようになり、ワシントンでしばらく働いた後、Jules Fisher and Paul Marantz とともにニューヨークで働くようになる。それから30年たった現在は、マンハッタンのフラティロン地区に位置するデザインスタジオで、35名の照明デザイナーをもつFisher Marantz Stoneの社長である。数多くの受賞歴もあり、よく知られているプロジェクトにはカーネギーホール、ワシントンモニュメント、アメリカ自然史博物館・地球宇宙ローズセンター、香港国際空港とがある。NCQLPでLEED資格保持者。IALDのフェロー会員でもあり、過去には会長も務めた。

Caption

- #1 ストーン氏は日本人が愛でる光の現象として、 面出氏撮影の朝日が水面に反射しうつろう風 景を紹介した。
- #1 Charles Stone introduced a photo taken by Kaoru Mende of the morning light reflecting on the surface of water, a favorite lighting phenomena of many Japanese.



ビルが突然現れるという夜景を見ましたが、まったく意味をなしておらず、LEDに対する間違った印象を人びとに与えていました。LEDは省エネだと言われるが、小さな製品であってもたくさん設置すればその分電力を使う」と話し、LEDのメリットを活かすべきだと訴えた。

今後の照明デザイナーの役割と アジアの照明デザインに期待すること

面出氏は、東京やシンガポールにおいて、現場 監理にどれだけ関わるかを重視して丁寧に仕 事を進めることの重要性を語った。ルイ氏は照 明デザインの仕事と責任を「照明デザイナーの 仕事には、(照明)デザインと、その建築デザイ ン、そして建築のコントロール、さらには仕事を 請け負うと仕事を提供してから5年間責任を 持つという保証がある」と説明する。面出氏が 「竣工後5年のギャランティーを契約できるの か」と訊ねると、ルイ氏は「契約できる。10年 間の契約を結ぶものもあり、10年経った時に LED照明のメーカーがなくなっていても、私は 責任を持たなければならない。中国では機器 に5年の保証をしてもらえる。建設業者が一 番低い価格で落札しても、仕事の品質は保証 しなければならないと語った。

J. K. ヤオ氏が「LEDと簡単なコンピューター制御を組み合わせれば、誰もが美しい夜景をつくることができる可能性があります。そこでは照明デザイナーの価値が問われるのではないでしょうか」と懸念すると、面出氏は

「LEDには非常に危ういところがあります。 しかし私たちプロの照明デザイナーは、それ に警鐘を鳴らしながらも具体的な技術が正し く活きる方法をもっと考えなくてはいけない」と 応答した。

ハオレイ氏も「社会やクライアントのために、 長い目で見て通用する価値を提供したい。 LEDはツールであり、人の使い方によってさま ざまな効果を生む。私のラボではLEDの応 用についての研究を行い、モックアップをつく って、どれがよいかを調べてデータベースに 入れている。課題は多く、照明デザイナーが やる仕事はたくさんある」と話した。

チャールズ氏は「日本は津波と地震を経て、電力不足の問題を抱えている。しかし、省エネでありながら美しいものをつくることは、クリエイティブでないとできません。それを私たちはポジティブに捉えられるし、この会議が開かれていることがそれを表している」と照明デザイナーの今後の活躍に期待を寄せた。

面出氏は最後に「照明デザインでは技術の『グローバリゼーション』がますます進むが、一方でそれぞれの土地に適った『ローカライゼーション』が大切だ。今回は大変エネルギッシュに、いろいろなことを正直に話すことができてよかった。照明デザインが洗練されていくためには、クライアントや社会に対して、照明の価値や意味、そして体験や成果をたくさん示す必要がある」と、すべてのデザイナーやクライアントが共有すべき課題を投げかけた。

The main theme of ENLIGHTEN IN JAPAN 2013 is Light with Asian Sense. A symposium was held by six lighting designers who are based in Europe, the U.S. and Asia and who have been engaged in various projects in different places in Asia.

"There are cultures, climates and clients' ideas in Asia that are different from those in Western countries. Also in the field of lighting design, there are slight differences in the value and work processes regarding lighting between Asia and Western countries. Naturally, there are differences within Asia. For example, there are differences between Japan and China, and Southeast Asia is also different. After all, even if you simply call it 'Asia,' the region is vastly wide. In general terms, the whole of Eurasia besides Europe is all Asia. In this symposium, I would like to talk about the differences in the ideas regarding light," said Mr. Mende.

Light in Asia

Mr. Charles Stone is based in New York. U.S. He maintains a close relationship with Mr. Mende, and they have been taking similar paths in architectural lighting from about 35 years ago. Mr. Stone said that when he is engaged in a project in Asia, "I have been expanding my ideas beyond cultures by considering what the value is of employing a designer from New York and how I can contribute in the region, and to try to reach a consensus among various opinions on bringing one idea to the environment of the planned site." "Regardless of East or West, one must understand one basic thing. That is, there are three types of light. They are the 'ambient luminescence' (soft light that embraces the surroundings), 'focal glow' (directional light with strong contrast such as sunshine pouring into the building from a hole in the ceiling as in the case of

Pantheon in Rome), and 'play of brilliance' (a whimsical shine of light as seen in a chandelier, for example)." Mr. Stone told a story about "light with Asian sense" from a broad perspective, and explained his impression of light in Japan as the most notable example. He mentioned the expressions in In Praise of Shadows by Junichiro Tanizaki like "soft," "the light diffuses," and "many layers of light tell the story," and explained that "it is quite an advanced culture with high quality." Mr. Stone says that he constantly takes some reference from the book when he is engaged in a project in Asia.

Lighting of the Quality that Can be Realized Only in Japan

Mr. Mende explained the differences

among lights in cities in Japan and other Asian cities, based on his experience in works engaged through Lighting Planners Associates, which is based in Tokyo but has offices also in Singapore and Hong Kong. In the project of the Tokyo International Forum, capitalizing on its high construction precision, the entire complex with a total area of 145,000 m² was designed as a sample of dynamic architectural lighting. In the case of JR Kyoto Station, the idea of "designing shadows" was established in the region where the culture of darkness, which can be related back to the worldview of In Praise of Shadows, is understood. For the Nagasaki National Peace Memorial Hall for the Atomic Bomb Victims, 70,000 small lights where lit on a basin. The lights flickered on the surface of the water, creating a solemn light for the repose of the victims' souls, stirring a natural feeling of prayer.

Light Like Ink Painting

Although Mr. Rong Haolei is the youngest among the panelists, he is engaged in

Moderator

Kaoru Mende Lighting Planners Associates Inc.

Kaoru Mende was born in Tokyo in 1950. In 1990, he founded Lighting Planners Associates Inc. The scope of his design and planning activities ranges widely from residential and architectural lighting design to urban and environmental lighting. Mende is also the acting chief of the "Lighting Detectives", a citizens' group that specializes in the study of the culture of lighting. Mende has been involved in such superb projects as Tokyo International Forum, JR Kyoto Station, Singapore City Center Lighting Master Plan, Alila Villas Uluwatu, Aman New Delhi and Façade lighting for Tokyo station. Books Mende has authored include "Transnational Lighting Detectives" (Kajima Publishing), "LIGHTING DESIGN for Urban Environments and Architecture" (Rikuyosya), "Designing with Shadow" (Rikuvosva) and many other.

Panelists

Rong Haolei Dept.of Lighting Design & Research, Beijing Tsinghua Urban Planning & Design Institute/China

Dr. Rong mainly works on urban lighting and architecture lighting as his research realm. He is one of the co-author of Code of urban lighting planning. As one of the main co-authors, Dr. Rong also participates in local standards such as Technical specification for Beijing Nightscape Lighting and Planning Specification for Beijing City Lighting. His professional technical work mainly involves urban lighting planning, landscape lighting design and natural light utilization etc. He was invited to give presentations on CIE International Conference and several national lighting conferences.

JK Yao chroma33 Architectural Lighting Design

JK Yao graduated from Parsons School of Design, New York City / Master of Fine Arts in Architectural Lighting Design in 1988. International Association of Lighting Designers (IALD) Professional Member since 1998. Noteworthy Events Yao has involved are 2008 Beijing Olympic as a chief lighting design consultant, Central Park with Beijing Institute of Architecture Design, Bird Nest Stadium 2008 Beijing Olympic lighting consultant with Landsky Lighting Group Awards Yao has received include IALD Radiance Award & Award of Excellence, CKS International Airport Terminal One Renovation, Tao-Yuan, Taiwan (2004), IALD Award of Excellence, Chun-Lien Bank, Taipei, Taiwan (1999), IALD Award of Merit, M39/40, Taipei. Taiwan (2003) and IALD Compendium of Good Practice Compal Flectronics Headquarter Taipei, Taiwan(2001) He also took a role as 2002 IALD Awards Judge.

Panelists

Tino KwanTino Kwan Lighting Consultants Ltd.

Internationally acclaimed lighting designer Tino Kwan is widely accepted as one of the world's most celebrated masters of his trade. With more than 30 years of lighting design experiences, professionals both within and outside the industry have heralded Kwan's design achievements. Kwan has designed for a wide range

of projects, which include international prestigious hotels. Kwan has been invited by Asia-pacific Hotel Design Associate to be their Vice President. Kwan has also been invited by Beijing's Tsinghua University as guest lecturer at the elite institution to nurture a new breed of lighting designers. With his passion, wisdom, talent and creativity, adding to that his expertise in lighting design, Kwan is set to light up the World.

Louis Clair Light-Cibles

Stemmed from the cinema world, Louis Clair started lighting design in 1978.

1983 «Light-Cibles» Free Independent Professional Lighting Designer Agency
1990 Development in South East Asia, China and Middle East.

1992 Founder of "Phoebus" Architecture and Stage Lighting Designers Association 1995 Architectural Lighting Designers Association: A.C.E.(president from 2001/2003) 2000.Member of IALD 2008 Book "Architectures of Lights" (lighting ambiances and lighting script) Marketing Consultant for international lighting fixture manufactures

He gives lectures, conducts workshops and teaches all over the world,
His son Emmanuel, architect, joined LightCibles Paris In 1998

They founded 6 daughter companies: Singapore, Madrid, Spain, China, Malaysia, Brazil.

Charles G. Stone Fisher Marantz Stone

Charles Stone graduated from Princeton University in 1976 with a Certificate from the Program in Theater and Dance for Lighting Design. His early work in theater lighting soon led to a career in architectural lighting design, briefly practicing in Washington DC before he moved to New York City to work with Jules Fisher and Paul Marantz, Fastforward thirty years to the present, Charles is now the president of Fisher Marantz Stone, a 35-person lighting design studio located in the Flatiron District of Manhattan. Charles has designed award winning and well-known projects such as Carnegie Hall. the Washington Monument, the American Museum of Natural History - Rose Center for Earth and Space, and the Hong Kong International Airport. Charles is Lighting Certified by the NCQLP, a LEED Accredited Professional, and a past President and Fellow of the IALD.



many projects at Tsinghua University in China. When Mr. Haolei designed the lighting of a park, he set the color temperature and illuminance at a low level, and also applied lighting apparatuses low. "I prioritized bringing changes in people's feelings based on experiences. Lighting in Asia has an image like an ink painting, where dark parts and radiant parts coexist," Mr. Haolei said. He also pointed out a difference between East and West, "For instance, let's think about lighting for a monument. In the west, light is radiated from outside to catch people's eyes. On the other hand, in the east, the light is hidden inside."

IALD JAPAN + LIGHTING FAIR

Color Lighting and Concepts in Asia

Mr. Louis Clair was introduced by Mr. Mende as "the most passionate lighting designer." He is based in France, and has offices in China, Singapore, Malaysia, Brazil and Spain, and is engaged in projects globally. His work covers from historic architecture to modern cities, and he designed shadows in a shape like ascending towards the sky for Mont Saint-Michel in France. Mr. Tino Kwan asked, "Because your lighting work in Europe was tender and beautiful, I was surprised by your colorful and dynamic lighting in China. Did you change the style according to requests from the clients in China?"

Mr. Louis responded to this, "I didn't change my style, but I simply went back to my childhood. I was doing my work in France under the restriction of not using colors. When I went to China, where there is no such restriction, I imagined various things and simply made suggestions on lighting design that frequently use lights with colors and movement."

Mr. J.K. Yao, who met with Mr. Mende

Facade is Not a Canvas

25 years ago when he was working under Mr. Stone, is now a designer representing Taiwan. Mr. Yao says, "I have no objection to the use of different colors, but I oppose a messy mixture of all colors. I don't think it is good to turn the facade of a building into a canvas. Colors may change if there is a meaning to it, but in reality, colors change without any meaning in most cases." Mr. Yao continued," I am frequently asked that what the concept is. However, if the architect or the interior designer already has a concept, it will be confusing to bring a different concept. I only instruct to 'do it correctly.' However, I do not take a completely identical approach with all clients, but rather I change the design according to the ability of the craftsmen and the situation. Even if a good design is suggested, if the design does not

match the situation, the resulting work will be disastrous."

The Future Vision of Light

While Mr. Tino Kwan is engaged in many designing projects in Japan and other places, he is also a gastronomist and a business manager, owning five restaurants. Mr. Kwan made a strong appeal that "LED is the future vision of light sources. If there are many people from manufacturing companies, I would like to ask all manufacturers to make products with the same standard." He also said, "Please allow lighting designers to use high-quality LEDs. You do not need to use so many different colors like many buildings in China. I once saw a nightscape in China where a building illuminated with lights that change colors suddenly appeared in the middle of old buildings. It was completely nonsense, and it gave a wrong impression of LEDs to people. Although LEDs are said to be energy-saving, if you use them abundantly even if the product is small, it will consume electricity accordingly," and called for the necessity to capitalize on the advantage of LEDs.

The Role of Lighting Designers in the Future and What is Expected with Lighting Design in Asia

Mr. Mende talked about the importance of prioritizing involvement in site supervision and to work neatly. Mr. Louis explained the work and responsibility of lighting design as, "The work of the lighting designer includes the (lighting) design, architectural design thereof, the control of architecture, and to guarantee the result for five years after providing the work." Mr. Mende asked, "Is it possible to include a guarantee for five years after the completion of construction in a contract?" and Mr.

Louis answered, "Yes. Some contracts guarantee for ten years. In such case, if the manufacturer of the LED lights does not exist ten years after, I have to be responsible for it. In China, there is a fiveyear guarantee for apparatuses. Even if the builder wins a bid with the lowest price, "quality must be guaranteed." Mr. J.K. Yao presented the concern as, "It may be possible for anyone to create a beautiful nightscape with a combination of LEDs and a simple computer control system. Isn't it here where the value of a lighting designer is called into question?" Mr. Mende replied to this, "There is something very risky about LEDs. However, we, as professional lighting designers, must think more about properly utilizing the specific technology while also sounding an alarm." Mr. Haolei said, "I want to provide values that are effective from a long-term perspective to the society and people. LEDs are a tool, so they exhibit different effects according to the method of use. My laboratory implements research on the application of LEDs, makes mock-ups, and studies which is better and records them in a database. There are still many problems, and there is much work left for a lighting designer."

Mr. Charles expressed his expectations towards the activities of lighting designers in the future as, "Japan now faces a problem of shortage in electricity after experiencing the tsunami and earthquake. It is necessary to be creative to make something beautiful while also saving energy. We can take this positively, and the holding of this symposium proves this."

As a closing, Mr. Mende presented the issue that must be shared by all designers and clients, saying, "It is expected that the globalization of technology will further accelerate. On the other hand, the concept of 'localization,' adapting to each region, is also important. I was glad that I could talk about various things quite honestly and energetically in this symposium. In order to further sophisticate lighting design, it is necessary to show the value and meaning of lighting, and experiences and results thereof, to clients and society."





照明は心の問題とどう向き合えるのか

How Can Lighting Face the Issues in People's Hearts

特別ゲスト 内藤 廣

Special Guest: Hiroshi Naito

建築家・内藤廣氏に、IALDの催し「ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN」、そして照明デザインのあり方を、 外部の立場から語ってもうらった。内藤氏は、東日本大震災復興のため、5人の建築家で「帰心の会」*1を結成し、 積極的に被災地に関わりながら、震災以後の建築のあり方を問い続けている。また、土木・都市計画・ランドスケープ デザインなどの領域をまたがって都市景観を考えることを提唱する一方で、建築だけでなくインスタレーションや インテリアデザインまでも手掛けるなど、横断的に活動している。東京・渋谷駅の再開発でも 渋谷駅中心地区デザイン会議の座長として、マスターアーキテクトの役割を務める。 内藤氏には「ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN」 へ来場していただき、シンポジウムも聴講していただき、 その上で批評と激励の生の言葉をいただいた。

イベントの所感

今回のイベント「ENLIGHTEN ASIA IN JA PAN 2013」は、なかなか素晴らしいものだっ たと思いました。建築の世界はいささか疲れ てしまっていて、あそこまでのことはなかなか できないような状況です。照明は今、技術変 革の真っ直中にあります。それだけに、きちん と新しいものを見せていくことが求められてい ます。企業もつば迫り合いしているところです から、お金を出しやすい、という状況なのだと 思います。こういうことができる時期にはどん どんやったほうがいいでしょう。

今はまだ、いわゆる業界の人たちが、それぞ れの会社の仕事というレベルで来てくれてい ます。それはそれできちんと機能しているので よいでしょう。ただ、もっと学生たちや若い人た ちの姿が会場に増えたらいいとは感じますね。 純粋に照明に興味のある人たちがイベントに 来てくれるかどうか、これから問われるでしょう。 より幅広い層をイベントに呼ぶには、やり方はい くつもあるはずです。

照明という仕事

私の仕事の中でも、照明デザイナーといろいろ とクロスオーバーするところはあるのですが、 お願いしてデザインしてもらうまでに私たちが 至っていないというのが正直な感じです。私 たちが設計をするときには、一気にウワーッと やってしまうところがあるので、まず構造や設 備というところを押さえていかなくてはなりませ ん。どうしても照明計画は後回しになってしま う傾向があります。私のほうのエネルギーが

足りていないのかもしれないのですが。 私は公共の仕事が多いので、設計費をかけ られないことが多い。だからこそ照明デザイン というカテゴリーを、もっとパブリックに認めさせ る必要があるのかもしれませんね。企業では アドバタイジング的な効果を見込むこともある だろうけど、公共ではそこまで認識が至って いないのだと思います。イベントとしてライトア ップするとかいうケースはありますが、費目とし ては別立てですからね。ところが恒常的に公 共建築に照明デザイナーが入って何かをや るという場合は、残念ながら費目が立たない。 費目が立たないからやることができない。そう いうところが遅れていますね。照明デザイン自 体は認知されているけれど、照明、光をデザ インする人がいて、そこに費用が発生すると いう認識までは持ってもらえてはいない。未だ 照明器具メーカーのサービス業務、製品の価 格に乗っかているんでしょう、という感覚が役 所の側にあるのではないでしょうか。

では、それをやめさせればうまくいくか、とも言 えないわけです。インハウスでデザインをして いる人たちが多くいるわけです。照明に限ら ず、これはあらゆるデザイン業界全体に言え ることで、プロダクトでも若い人たちがデザイ ナーを目指しながら食べるためには企業でや るしかないか、という選択肢になってしまう。 若い人たちが自然にデザイナーとしてインディ ペンデント(独立)になりうる状況とはとても言 えません。そういったことを含めて、変えてい かなくてはならないことが数多くあります。

資本の論理

ライティングって見れば見るほど、どうして「バ ブリー | に見えるのかという話があるんです (笑)。照明デザイナーの皆さんは努力され ているし、素晴らしいエンジニアリングもある。 しかし、どうしてもある種、商業主義とかグロ ーバリズムに飲み込まれている状況なわけで す。それ自体は社会に要求される、大切な一 面でもあるだろうとは思います。しかしそれに 浸かったままでいいのかということです。

一方で、3.11の東日本大震災以降の2年間、 私たちがどういう時間を過ごしてきたかという と、心の問題だったり「鎮魂」だったり、そうい うものとも向き合ってきだわけです。ものすごく リアルな現実を見せつけられたのですから。と ころが照明というのは、非現実だったり、非重 力的や非物質的なものだったり、夢のような世 界をつくり出せる。言ってみれば「捏造」され た物語にしてしまう。照明には、そういうものを 表現してしまう性質があるのでしょう。資本の

論理、「近代」「大衆化」といってもいい。それ と「3.11」以降の心の問題とどう折り合いを付 けるのか。三陸の被災地へ行くと、夜は真っ 暗で何も見えない。満潮になると道路も埋没し てしまう。そこにあるのは完全な闇だけ。「あ の闇の中に何があるのか?」からスタートするの もありなんじゃないかと思うんです。それは絶 対に世界へ発信し得るような価値になるんじゃ ないかと思います。福島の問題をはじめとして、 われわれはまだ渦中にあるわけで、「起こった こと」ではなく、「起こりつつある問題」としてこ れから生かしていかないと、被災された方々に 本当に申し訳ないと思います。

誰の味方か

一般の人たちは、建築家はお金持ちの側— 資本だとか社会の側――に立っていると思っ ています。現実に、被災者の方たちは、建築 家なんかに助けを求めないでしょう。自分たち を助けてくれる対象ではないんです。それは 明快で、建築家も照明デザイナーもプロダクト デザイナーも、あらゆるデザイナーが「いった いお前は誰の味方なんだ」と問われている状 況なんだと思います。

この10年くらいを考えると、エコだというんで、 やれ省エネルギーだ、やれ地球環境だと騒い できた。ならばLEDを使おうという結論にな る。これは流れとしては分かりやすい。それ はそうだろうなと思います。ところがそうでない ものが現れてしまった。原子力発電はCO2を 出さない、環境にやさしい、安全だと言われ て、いろいろ問題はあるけど「しょうがないか」 とやってきた。それが震災によってすべてひっ くり返されてしまった。本当に環境にやさしい のか、本当に安全なのか。省エネだとか環境

だとかいうことを全面に押し出しているロジック というのは信用ならない、と今やごく普通の主 婦だってそう思っているはずですよ。

たぶん、照明もわりとわかりやすいロジックに 乗っていたので、性根から入れ替えて、向き 合っていかないと社会から抹殺されてしまうか もしれない(笑)。建築家もまったく一緒です けれど。建築家の方がもっと危機的かもしれ ない(笑)。

光で命を救う

安政の大地震の時に、田んぼの稲藁に火を 灯して村人を高台まで導いたという話が残っ ています。あれは光の話です。こういう、光 が命を助けてくれた、火が心を救ってくれた、 という物語が歴史の中にたくさんあると思う んです。それらをもっと説き起こさなければな らない。

被災地で照明デザイナーがどのくらいの提案 をしているのかという話も出るはずなんです。 たとえば明治三陸地震は午後7時頃に起き ています。夜、暗闇の中を逃げるということを 照明デザイナーも考えるべきだと思います。夜 に避難しなくてはいけないときに点いてる何か しらの光について、町の人たちが常日頃「うち



「今回のイベントは、素晴らしいものだと思いました。

建築の世界は少し疲れてしまっていて、あそこまでのことはなかなかできません。 照明は今、技術変革の中で新しいものを見せていくことを求められています。」

※1 帰心の会

東日本大震災被災地を受けて、建築家に何ができるのかを問うために、伊東豊雄、山本理顕、内藤廣、隈研吾、妹島和世の5 名の建築家が「帰心の会」を結成。10万人以上の人びとが家を失い、無味乾燥な仮設住宅での厳しい暮らしが続く中、より人 間的で居心地の良い場所を提供したいとの想いから、「みんなの家 | プロジェクトを提唱。 「みんなの家 | とは、(1)家を失った人々 が集まって語り合い、心の安らぎを得ることのできる共同の小屋、(2)住む人と建てる人が一体となってつくる小屋、(3)利用する 人びとが復興を語り合う拠点となる場所である。帰心とは、故郷に帰りたいと願う心の意味。











の町にはこんな照明が点いているね」と感じ ていて、いざというときにそれを頼りにできたら いい。こういう話はもっと照明デザイナーから 積極的にされてもいいはずなんですよ。現状 は、照明メーカーが各自治体に営業をして、 街路灯は1本につきいくらです、みたいな話を して入札で決まってしまう。だから、つまらな い通常の街路照明になってしまうんです。そ れは照明デザイナーが責任放棄してると言え るかもしれない。そこのところで、普通の人た ちの生活や命というものとデザインがつながっ てくる可能性があるわけじゃないですか。

非常時に役に立つものというのは、日常の暮 らしの中でも愛されているものだと思うんで す。みんながいつも使っていたり、いいよねと 思っているもののはずです。被災線に桜を

植えるようなことと同じかもしれない。照明デ ザイナーが被災地で提案できることもあると 思います。それによって大切なものが見つか るはずなんです。たまたま、東日本大震災は 昼間に起きたけれど、当然真夜中に地震が 起きることだってある。われわれのいる東京 だって震災がいつ起こるか分からない。広 範囲で停電してしまった時に、バッテリーによ る照明で何時間か頼りにして逃げられる、と いう話もあるかもしれない。

普通の人たちの心を掴む

一般の人たちにアプローチするにも戦略を考 えなくてはいけない。先ほどの「誰の味方な のかしという話にも通じますが、照明デザイナ

ーにしても、建築家にしても何かを提案しよう とすると「なんだ、営業に来たのか」と思われ てしまう。それは、基本的な信頼関係が崩れ てしまっているからなんです。これは非常に 大事な問題で、だからひょっとしたら今回のイ ベントにしても、ビッグサイトのようなところでや るべきじゃなかったのかもしれない。もっと普 通の人が来やすい場所でやるべきだったの かもしれない。行政の側の人でも来やすいよ うなものをやるべきかもしれない。

これからは一般の人を味方に付けられないプ ロフェッションはアウトだと思います。高度情 報化社会によって、タコ壺に入っているような デザイナーよりも普通の人の情報量が多くな るかもしれない。昔はデザイナーとか専門の 人たちは自分たちのほうがたくさんモノを知っ ていて、言い方は悪いですが、それを下げ渡 しているような意識があったはずです。ヨー ロッパ的な考え方です。でも最近はひょっとし たら、街なかを歩いているような女の子のほう が、物事の本質を掴まえているかもしれない し、意識が進んでいるかもしれない。その怖 さを建築家もデザイナーもまったく分かってい ない。クライアントと対している時に、技術的な ことは別にしても、相手のほうが建築のこと、 建築の本質を分かっているかもしれない。今 はそういう時代なんですよ。だから、その人た ちの心を掴むために、もっと必死にならなけれ ばいけないと思います。

これからのことを考える

照明というもののこれから先は、モノとしての エンジニアリングと脳医学とリンクしていくもの だと思っています。私たちは、一日のうち何時 間かは液晶パネル、つまり発光体を見ることを 習慣付けられてしまっている。人類史上はじ めてでしょう。それらが脳神経にどういう影響 を与えているかなんて誰にも分からない。だっ て検証するには、そうなってからあまりにも期 間が短い。そう考えると、照明はエンジニアリ ングとしてもまだ初期の段階で、「これから」と いうものだと思います。だから今こそ、若い人 が頑張る時なんでしょう。10年前の知識は古 くなってしまう。そんな状況なんだから、新し い情報をどんどん取り入れていく力が求めら れるはずです。

シンポジウムではチャールズ・ストーン(p.8)に は何となく納得したんです。欧米的な、冷静 で、人間的に常識的な素晴らしい部分を持っ ている。くやしいけれど(笑)。私は日本の照 明デザイナーは彼のスタンスに学ぶべきかな



「照明はエンジニアリングとしても初期段階で『これから』というものだと思います。 だから今こそ若い人が頑張る時。10年前の知識は古くなってしまう。」

と実は思ったんです。つまり、現在のように心 の問題へ向かっていくという時代背景に、ちょ うどいいのではないかと。その中で、これから のアジアの照明デザインというものを見つけ出 していければいいと感じました。いきなり安直 にアジアの照明デザインを見つけ出そうとす るのではなく。

ピーター・ライス(構造家。代表作にシドニー のオペラハウス、ロンドンのスタンステッド空港、 パリのシテ科学産業博物館などがある)の自 伝に出てくる「ムーンライトシアター」の話を思 い出したんです。南フランスの山の中で、反 射板を使って月の光だけで演劇をやろうとい うものです。エンジニアリングの最先端にいた ライスがそんなことを考えたというのが興味深 い。ここには、エンジニアリングも、人間の脳の 話も、文化もいろんなヒントがあるはずです。 シンポジウムの難しいところは「持ってくることが できない」こと。実物を提示できない。建築もそ うですが、実物を提示しないから、話せば話 すほど嘘っぽくなっていく感じがしてしまう。私 からすると、照明デザイナーには照明デザイナ ーならではのやり方があるような気がします。 実物の光を再現して、体感できるようなセッショ ンとかシンポジウムとかもあるのではないか。そ のほうが多くの人に興味を持ってもらえると思 います。しかし、すべてはこれからの事です。 まずここからという大きな一歩をIALD Japan の方々は踏み出したのではないでしょうか。

(2013年3月21日・内藤廣建築設計事務所にて)

- #1 シンポジウム 「照明デザイン 軌跡と展望」
- #2 シンポジウム「アジアの照明デザインショーケース/6人のデザイナーが語るアジア感覚の光」
- #3 セミナー「Asian Cool & Hot!!」
- #4 ライティングデザインセッション「照明デザイン界 ふしぎ発見!~クイズで知る照明最前線」
- #5.6 有明あかりスタジオ

内藤 廣

1950年神奈川県生まれ。1974年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1976年同大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲー ラス建築設計事務所(マドリッド)、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所設立。2002~11年東 京大学大学院工学系研究科社会基盤学教授。2007~09年グッドデザイン賞審査委員長。2010~11年東京大学副学長。 2011年~東京大学名誉教授・総長室顧問。主な作品に「海の博物館」(1992年)、「安曇野ちひろ美術館」(1997年)、「島 根県芸術文化センター」(2005年)など。受賞・著書ともに多数。

Asian Cool & Hot!!

Asian Cool & Hot!!

コーディネーター | 内原智史 パネリスト | 鄭康和、ザン・シン

Coordinator: Satoshi Uchihara Panelists: Chung Kangwha, Zhang Xin

Coordinator

内原智史

有限会社内原智史デザイン事務所/1958年京 都出身。1982年多摩美術大学デザイン学科卒 業後、株式会社石井幹子デザイン事務所入所。 1995年有限会社内原智史デザイン事務所設 立。光による空間プロデュースを始め、照明器具か ら都市景観照明のデザインを手がける。多摩美術 大学非常勤講師。

Panelists

鄭康和

建国大学校 デザイン部門/Chung Kangwha は建国大学校デザイン部門の教授であり、韓国 照明デザイナー連盟の会長を務めている。東京藝 術大学で博士号を取得。都市計画、建築、景観 建築、照明芸術などの分野における様々な照明の デザインを専門としている。デザインした作品は、ソ ウル市の夜景マスタープラン(2000年)から、杭 州の照明マスタープランの立案まで幅広く、EON SOL社の代表dearu Jeong-Meeと協力して 韓国のいくつかの都市の照明計画にも携わってい る。2009年からはアジア・ライティングデザイン・ フォーラム(ALDF)を設立し、韓国政府のLED産 業製作の顧問となっている。

ザン・シン

清華大学建築学院/2001年清華大学建築学 院卒、建築学士。2005年清華大学建築学院工 学博士。2009年清華大学建築学院助教授。 2012年 ケンブリッジ大学客員研究員。

中国、韓国の照明デザイン にみる「クール」と「ホット」

洗練・品格の「クール」× 心を揺さぶる「ホット」

コーディネーターの内原智史氏が出したテー マは「クール | と「ホット |。「クール | を進化的 で洗練された照明デザイン、「ホット」を新旧 やテクノロジーを問わない心を揺さぶる照明 デザインと捉えた時、アジアの国々ではどのよ うな特徴が見られるのだろうか。韓国と中国 で質の高い照明デザインの提供と照明デザ イナーの社会的な立場の確立や景観の向上 に取り組む照明デザイナー鄭康和氏とザン・ シン氏。ふたりにそれぞれの国の特徴や現状 を語ってもらった。

鄭氏は「韓国では、辛い味が好まれるように 照明にもインパクトを求められる状況です。建 物の頂部など外観に、品格と落ち着きのある 『クール』なデザインを提案してきました」。た とえば、同氏が内原氏と取り組んだプロジェク トでは、長く使い続けられる建築の外部を『ク ール』に、商業施設である内部を、高いアクテ

イビティに合わせて『ホット』にすることを考え たと言う。さらに『ホット』の事例として、自然界 にはない光の波長を持つ赤色LEDを音に反 応させて非日常性や生命感を表した作品を 紹介した。

ザン氏は、照明のプロが考える中国での「クー ル として、 蔡國強氏の作品を挙げると共に、 省エネへの配慮やプロがデザインしたと感じ させないことなど、いくつかのキーワードを語っ た。一般の人が考える「クール」としては「イン タラクティビティ」を挙げながらも、メディアファ サードなどの映像と実際の空間や環境には違 いが生じることを懸念している。たとえば、スモ ッグがかかった北京・天安門広場。スクリーン に青空の映像が映し出された様子を記録した 写真が大気汚染の風刺だと話題になったことを 「クール」だと感じている。一方、中国での「ホ ット」について「東洋と西洋の違いを比べると、 東洋では主観的に物事を捉える傾向がありま す。エモーショナルなデザインが特徴です」と 話す。同氏個人の意見として、「紙」と光につ いて、西洋は反射を好み、東洋は(主に拡散、 透過による)鈍い光を味わうなどといった傾向 を描いた『陰翳礼譜』(谷崎潤一郎著)を取り 上げた。とはいえ、日本では空間と照明の調和 を求め、中国では照明そのものに注目するとい う違いがあることも説明した。

白色光に対する各国の意識の違い

内原氏は日本の現状を「照明デザインにおい てベーシックに取り扱う白色の光には、LEDな どによってさまざまな『風合い』が生まれまし た。近年日本では白色光を中心に落ち着い た照明デザインが施されています」と語り、両 国での「白」の捉えられ方を尋ねた。

ザン氏は、「中国では白という色には矛盾が 含まれています。葬式に使うので不吉な色だ とされていますが、都市にさまざまな色が溢れ てきたために白が新鮮に映る場合もあります」 と話す。現在の中国のカラフルな夜景は「お 祭りでつくったカラフルなランタンが照明器具 に変わった ものであり、日本では照明器具に 白い紙を張るが、中国では蝋燭の炎を直接 見るといった歴史的な背景も、現在の色の好 みに影響しているという。

鄭氏は「韓国でも葬式の白装束を連想します

が、白には素朴さや純粋さが凝縮されていま す。陶磁器が、青磁から着彩を経て白磁に 至ったのは、時代とともに白の深みを感じる余 裕ができたためです。水墨画の余白から感じ る美のように、見る人が感情移入できる『余 地』なんです |と説明する。

東京の夜景と、中国・韓国の 夜景のこれから

内原氏は、最後に東京の夜景について「3. 11を経験してから多くの人が、照明がエネル ギーに直結していることを実感し、いい意味 で抑制されて成熟した都市の景観になってき ました | と語り、今後の照明について尋ねた。 ザン氏は「東京の落ち着いた夜景は世界の 手本になります。中国で同じようになるかとい うと、文化的背景の違いがあるので近い将来 は難しい。ロンドンのように多元的だが調和が 取れているデザインも手本にしたい」と語る。 鄭氏は「韓国は成熟した方向に進みます。同 時にメディアファサードにより活力あふれる方 向にも発展するでしょう」と独自の方向への発 展にも期待を寄せた。

- #1 鄭氏が教授として務める韓国の建国大学の 前にある高層マンションと商業施設を含む再 開発プロジェクト。地域と学校が一体となっ て、夜にコミュニケーションが活性化されること を目指す。同氏が照明デザインを提案した。イ メージプロジェクターを使って、大きな外部の 壁面に躍動する光をつくり出した。普通、商業 施設では派手な演出が好まれるが、同氏は品 格の備わったデザインを狙った。
- #2 韓国で鄭氏が照明デザインを手がけた「ステー トタワー・ナムサン」。建物の下部にモノトー ンの映像を映すメディアファサードを設けて いる。鄭氏は2002年に設立した照明デザイ ナー協会のメンバーと共にソウル市の照明デ ザインのガイドラインの制定にも携わり、その 流れが地方都市へも広がっている。社会的な 取り組みはそれだけに留まらず、「デザイン面 で優れた空間をつくるために、照明デザイナー が、電気工事のサブではなくプロジェクトの主 契約者となれるように法律の改正に努力した」 と鄭氏。2013年2月には韓国政府が人工照 明による光公害防止法を制定し、違反すると 罰金が科せられるようになった。「照明を美とエ ンジニアリングとの双方から満足できるように 努力している。ガイドライン制定などの影響で、 市民の照明に対する意識は上がってきている」 (同氏)。
- #3 ザン氏が照明デザインを手がけた上海万博 の企業のパビリオン。筒状の特徴的な構造 体の隙間から間接照明の光が漏れる。ザン氏 は「照明デザイナーはクォリティを大切にする べきだ」と話す。同氏は「中国で照明設計をし ている人の数は数万人に上っており、中国政 府が認可している大陸の照明デザイナーは 5.000人、照明デザイン会社は800社ほどあ る。だが、実際にプロと呼べる技量を持つ人 の数は20人くらいしかいない」と語る。
- #4 ザン氏が彫刻家と協同で手がけた記念碑。昼 と夜の表情を変える照明デザインを施した。裏 側からは見え方が変わる。





デザイン日本、開発ルポタージュ

Design Japan, Development Reportage

コーディネーター | 内木宏志、山下裕子 パネリスト | 立川裕大

Coordinators: Hiroshi Naiki, Yuko Yamashita Panelist: Yudai Tachikawa

Coordinator 内木宏志

株式会社ナイキデザイン事務所/1969年横浜生 まれ、日本の照明メーカーで建築照明デザイン実 務の5年後、1995年に独立しフリーランスで活動、 その後NAIKIDESIGNを2006年に設立し、現在 は展覧会、リゾート施設の開発、ハイエンドの住宅 を含む国内外の幅広いプロジェクトや器具開発プ ロジェクトに携わる。北米照明学会(IESNA)、日 本ディスプレイデザイン協会(DDA)などから数々 の賞を受賞。

山下裕子

有限会社ワイ・ツー・ライティングデザイン/武蔵野 美術大学工芸工業デザイン学科を卒業後ザイン事 務所でCafe Bar等の設計スタッフを経て、1986年 (株)MGS照明設計事務所(藤本晴美代表)入 社設計チーフ/ディレクターとして、様々なジャンルの 照明計画に参加。イベント/展示等の等のプラン& オペレートも数多く手掛ける。2001年に独立。Y2 Lighting Design (ワイツーライティングデザイン) として始動。

Panelists

立川裕大

株式会社 t.c.k.w / デザインディレクター 株式 会社t.c.k.w 代表取締役。インテリア関連商品の 開発企画などに携わる。日本の伝統技術とデザイ ンを結びアートワーク、家具、照明等を製作するプロ ジェクト「ubushina」を展開する。

ひとの手と目がつくる 伝統×モダンのデザイン

IALD JAPAN + Enlighten Asia

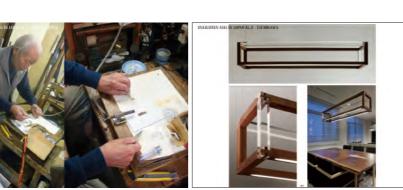
日本人の感性が発露するプロダクト

「ひとりで電球をつくり続けているおじさんがい る、と聞いて、およそ10年前に訪ねたのが、情 野(せいの)電球製作所とのつきあいのはじま り」と語るのは、日本の伝統産業界とデザイナ ーの架け橋として活躍するt.c.k.w.の立川 裕大氏。もともと滑走路の誘導灯など、特殊 ランプを製造していた情野氏は、70歳代とい う高齢ながら現役だという。情野氏がつくる のは、ごくシンプルな形状のランプ。しかし、通 電したときに光るフィラメントの様子に魅せられ るファンは多く、現在も生産が追いつかないほ どだそうだ。

今回、情野氏の工場を見学した内木宏志氏、 山下裕子氏は、フィラメントを形づくる工程や 電球内を真空にする作業など、自作の道具を 用いながらの繊細な手仕事に驚きを隠せなか った模様。「フィラメントがこんなに美しいとは!」 と内木氏は感嘆の声を上げる。「ランプから こだわったものづくりは、日本人的なプロダクト

の在り方とも。

立川氏は「ヘリテージにならないため、コンテ ンポラリーに持っていくことが大事。そのため にクリエイティビティ+デザインが必要になる」 と訴える。伝統工芸はともすればノスタルジ ーを覚えるだけの過去の遺物になりがち。い まの暮らしや空間にはなじまないものも多々あ るのが実状である。それらを「いま」に生か すデザインに昇華させるのが立川氏の役割 だ。「そのひとにしか、その工場にしか、その 地域でしかできないこと。代わりの効かない 仕事」にするのがモットー。2000年に立ち上 げた「ubushina」プロジェクトでは、富山県 高岡市で仏具をつくっていたメーカーとの出 会いを皮切りに、青森のブナのリボンをコイル 状にして形づくったプロダクト「ブナコ」、岡谷 市のシルク産業からは蚕の吐き出す糸を型に 巻き付けたシェード、別府の籠編み工程を合 理化して成形したブラケットなど、地場の技術 とデザインをかけ合わせたプロダクトを次々に 生み出してきた。東京スカイツリーでは、イン テリアデザイナーの橋本夕紀夫氏とタッグを組 んで、漆や提灯、金箔をはじめとした12種類









の伝統工芸でオブジェを仕立てた。「伝統は 進むんです」という立川氏の言葉にうなずか される作品群である。

ローテクとハイテクが鍵を握る

「アキッレ・カスティリオーニさんのように、本当に 革新的な光をつくりたいんですよ |と立川氏は目 標を掲げた。加えて、ハイテク好きを公言。「職 人の仕事、いわゆるローテクとハイテクを混ぜた い。それができるのは日本だからこそ」と日本の 匠の技術、応用力に太鼓判を押す。

大いに賛同した内木氏は、イサム・ノグチ氏 の「AKARI」シリーズを例に挙げ、日本的な 感性を発揮した、世界に発信できるプロダク トとして賞賛。そして、日本の美意識を体現

した現代の照明として、2012年に発表さ れた「陰翳 IN-EI ISSEY MIYAKE」を 紹介した。プリーツというファッションの技術 を生かした立体造形であり、折りたたむこと ができる点も「AKARI」と重なる。「衝撃的 だった。陰影の美しさもさることながら、これ からの照明デザインにおける伝統とデザイ ンの融合方法を発見できた」と山下氏は振

障子越しの光、三和土に映る光と影、反射板 としての天井など、常にディフューズした光を 空間に取り込んできた日本の建築。その世 界観をもう一度ひもときながら、匠の本質を引 き寄せられれば、日本独自の光のデザインは 花開くに違いない。

- #1 情野電球製作所の情野氏は70代ながらひと りで工房を切りまわす。電球製造に必要な道 具も自らつくる。
- #2 釘を使わずに木を組む大工技術、三方組によ る照明器具。三方組の部材のひとつにアクリ ルを用いた(デザイン橋本夕紀夫、コーディネー ト:立川裕大)。
- #3 プリーツを固定する技術を利用してつくられた「陰 翳 IN-EI ISSEY MIYAKE」(2012年・アルテ ミデ社)。日本ではマックスレイで取り扱う。
- #4 2000年にリビングデザインセンターOZONE で開催された「あかり/AKARI」で再現された 谷崎潤一郎の住宅。照明計画は山下氏が手 がけた。

アジアProjectにおける照明デザイナーの役割

Roles of Lighting Designers in the Asia Project

コーディネーター | 金田篤士 バネリスト | 丹野太郎、チ・ホンハイ、リ・ジェハ、村井達也

Coordinator: Atsushi Kaneda Panelists: Taro Tanno, Qi Honghai, Lee Jaeha, Tatsuya Murai

Coordinator

金田篤士

株式会社ワークテクト/1961年生まれ。山口県出 身。1996年 株式会社ワークテクト 設立。2010 年 株式会社ワークテクト 香港 設立。2013年 ワークテクト アフリカ事務所 開業。

Panelists

丹野太郎

株式会社 横浜グランドインターコンチネンタルホテ ル/数々のホテル開発プロジェクトを担当し、事業 計画、施設計画、デザイン管理、予算管理と執行な どいわゆるプロジェクトマネージメント事務を統括して きた。現在は株式会社横浜グランドインターコンチネ ンタルホテルに籍を置き新規ホテル開発、及び既存 ホテル改装業務を行っている。

チ・ホンハイ

北京远瞻照明设计有限公司/1975年 吉林省 長春生まれ。1999年 天津大学 建築学院 建築 学科学士。2002年 清華大学 建築学院 建築光 環境学科 工学修士。卒業後最初の4年は建築士 として、標準アーキテクチャで建築、景観、室内等の 仕事に携わった。2005年にZDPを設立し、照明設 計の仕事を始めた。

リ・ジェハ

株式会社ピーツーエルイーディーキューブ/株式会社 フェイズツー 代表/所長。株式会社 P2LEDcube 代表理事。ソウル市民デザイン委員会 審議委員。 建国大学校 建築大学校院室内デザイン学科兼任 教授。Kyungwon大学校 室内デザイン学科兼任 教授。ソウル市 Dobonggu デザイン委員会 委員。

村井達也

日建設計/1964年岐阜県生まれ。1990年 東 京理科大学大学院修士課程修了、同年 日建設 計入社。2007年 同社設計室長、現在 日建上海 設計部長。近作に日本平ホテル、名古屋市科学 館、福州興業银行本部ビルなど。主な受賞は、「徳 川園(2006)」名古屋市都市景観賞他、「テラ ス蓼科(2006) 」中部建築賞、「名古屋市科学館 (2011)」愛知まちなみ建築賞、中部建築賞他。

照明デザイナーの役割

IALD JAPAN + Enlighten Asia

コーディネーターは金田篤士氏。パネリストは 氏が照明デザインを担当したプロジェクトで、 建主側のプロジェクトマネージャーを務めた丹 野太郎氏と建築設計者である村井達也氏、 さらに中国のチ・ホンハイ氏と韓国のリ・ジェ ハ氏というふたりの照明デザイナー。

金田氏から「クライアントと本音で話したい」と の言葉。照明デザイナーと建主、設計者との 関係、建主の心をつかむプレゼンテーション や、仕事の進め方を紹介した。

金田氏はかつて、西洋環境開発に所属して いた丹野氏と同じ企業グループで、建主側の 担当者としてホテルの開発に加わった。それ をきっかけに、照明デザイナーとして独立した 経歴を持つ。

丹野氏は「照明デザイナーの仕事を冷静に 見ることができる | という独自の視点を仕事に 生かしてきた。

一方、村井氏は2000年に日建設計で京都 迎賓館の設計をきっかけに照明デザイナーの 存在を知ったという。その後も照明デザイナー

といくつも共同設計を手がけてきた。「照明デ ザイナーには、単に照明のアドバイスをしても らうのではなく、『光』の専門家として、アイデ アをもらいたい部分に積極的に参加してもら っているんです | と話す。

職能の価値を訴求

照明デザイナーという職業が確立されている ように思われる中国。チ・ホンハイ氏は、「仕 事の質という点で一定のレベルを超えるのは 約20名です。今の中国では、照明に関して 建主からだけでなく設計者からの発注も多く なり、仕事の進め方について試行錯誤してい るという現状です |と語った。

リ・ジェハ氏は、「いかに質を上げるかが大 切です。仕事の質を上げるためには建主と の関わり方、効果的に説得するプレゼンテー ションが不可欠です | と言う。同氏は韓国で サムスンのショールームの照明デザインを担 当した際、インテリアデザインの改善点を建 主に指摘し、2年間かけてインテリアデザイ ンからやり直したと話した。そこには建主と の信頼関係の強さが伺われる。また、アゼル



バイジャンで計画中の大規模なオフィスビル やホテルのプロジェクトについて、短時間で 建主を説得するためにCGシミュレーション による動画が有効であることを説明し「分か りやすい言葉で話すことです |と話す。特に 建築家たちとのコラボレートについては「ライ ト(照明装置)でなくライティング(照明効果) という言葉が適切。建築家やインテリアデザ イナーには『照明は自分で計画できる』と思 う人が多い。皆で空間について共感できる コンセプトや共通認識を持ってプロジェクトを 進めることが大切です」と話した。

照明デザイナーに求められること

リ・ジェハ氏の「建主や設計者の立場で、照 明デザイナーに求めることは何か」という質問 に対して、丹野氏は「たとえばホテルなら、ホ テルという『商品』を理解してくれていること。 そしてコスト管理まで考えてくれること | と答え た。「日本では、設計事務所やゼネコンにまと めて依頼するという流れがあります。そこでは 全部が自前で出来上がってしまい、照明は建 築の付属品だと認識されてしまいます。照明

デザイナーが参加していても下請けのひとつ だというように思われてしまいます。照明デザ イナーは、建築家やインテリアデザイナー、ラン ドスケープデザイナーと対等にプロジェクトに 関わらなくてはいけないはずです。そこで、そ れぞれに専門家がいるのなら、どのステージ で、どの専門家に何を頼むかという管理が大 切になります。プロジェクトマネージメントとは、 コンサルタントの能力や傾向を見極めてプロ ジェクに参加してもらい、彼らの働きやすい環 境をつくることです」と説明する。

「照明計画は、運営側と管理側に意識がない と、一挙に崩れるものです。それは日常の業 務から感じています」と丹野氏は語る。運営、 管理、プロジェクトマネージメント、設計、照明 デザインなどの開発と維持を手がける関係者 が適切な役割を果たすことが必要なのだ。

- #1 チ・ホンハイ氏は、「大規模なプロジェクトでは 収益や地位を得られる半面、好きな仕事とは 限らない」という。低コストで仕上げた小規模 な住宅の改修プロジェクトでは、建主と向き 合って打合せをし、家具まで設計した。地域に 向き合うプロジェクトなども手がけている。
- #2 丹野氏と村井氏、金田氏が携わり2012年に 建替え後のリニューアルオープンを迎えた日 本平ホテル。このホテルでは、共用通路から 客室のスタンドライト、シャンデリアに至るまで 照明にLEDを採用するなど、積極的な試みを 行っている。
 - 丹野氏は、西洋環境開発でのホテル西洋銀 座の開発をはじめとして、村井氏や金田氏な どと共に、多数のホテル開発のプロジェクトに 携わって来た。村井氏は日本国内で多くのプ ロジェクトの設計を手がけた後、日建設計[上 海]で設計部長としてアジアのプロジェクトに 携わっている。
- #3 リ・ジェハ氏が照明とメディアファサードのデ ザインを手がけるアゼルバイジャンのオフィス ビル「SOCAR」。同氏は、照明の専門家で ない建主に対するプレゼンテーションについて 「CGシミュレーションによる数百枚のシーンを 動画で見せることが効果的だ。1回のプレゼン テーションで強力な説得力を持つ。模型をつく ることも有効だが照明を縮小して再現するの は難しい」と話した。
- #4 金田氏が照明デザインを手がけた香港の 「COACH FLAGSHIP STORE」。同氏 は、照明デザイナーとして独立する前に、建主 側でプロジェクトを担当した経験から得た知識 と客観性を生かし、ホテルの仕事を多く手が けてきた。西洋環境開発にて横浜グランドイン ターコンチネンタルホテルプロジェクトに所属 したことから、独立後もシャングリラホテルなど の多数ホテルや銀座和光などの照明デザイン を手掛ける。米COACH社が世界の多数の 地域で展開する「COACH」の全店舗におい て照明デザインを担当するなど、海外でも幅広 い活動を続けている。





#2







Seminar 04

光を伝える技術・光を構築する手法

Technologies to Convey Light and Methods to Construct It

コーディネーター | 戸恒浩人 パネリスト | 森 秀人、角館政英、岡本 賢

Coordinator: Hirohito Totsune Panelists: Hideto Mori, Masahide Kakudate, Ken Okamoto

Coordinator

戸恒浩人

有限会社シリウスライティングオフィス/1975年生 まれ。東京都出身。建築・環境照明そして都市計 画に至る豊富な経験を生かし、演出性の高い照明 デザインから、バランスの取れた光環境のデザインま で、幅広い領域で照明のコンサルティングを行って いる。1997年 東京大学工学部建築学科卒。

Panelists

森 秀人

株式会社ライティングM/1959年香川県生ま れ。多摩美術大学美術学部立体デザイン科卒。 2006年ライティングMを設立。住宅照明から建 築照明、都市環境照明に至る照明コンサルタント 業務に携わる。日本人の感性を大切にした「感じ る光」をデザインポリシーとする。

角舘政英

ぼんぼり光環境計画株式会社/照明家、博士(工 学)、まちづくりアドバイザー、一級建築士、日本 大学理工学部建築学科修士課程修了、TLヤマ ギワ研究所、ライティング プランナーズ アソシエー ツ(LPA)を経てぼんぼり光環境計画設立。

岡本 賢

リップルデザイン/1977年 愛媛県生まれ。 2000年 日本大学工学部建築学科卒業。2002 年 日本大学大学院工学研究科建築学専攻修了 2002年 株式会社ライティング プランナーズ アソ シエーツ。2007年 Ripple design 設立。

アナログとデジタルを 使い分け、的確に伝達する

心象に訴えかける

手の温もりを感じさせる、とコーディネーター の戸恒浩人氏が評すとおり、森秀人氏のプ レゼンテーション(以下プレゼン)にはふんわ りとした光が映し出されている*1。「光の物 語を描く」ことを信条にしているという。絵を 描きながら空間把握をし、建築のコンセプトを 鑑みて、あるべき光を案出し、それを明確に、 かつ美しく大胆に伝える。「照明デザイナー が関わることで何ができるか、感じる光をい かにつくるかし。

イメージスケッチでは手描きもあるが、ベース となる図に「Photoshop」で光を置いてい くことも日常的だ。モデリングによく使うのは 「SketchUp」。簡単に空間ができて、しか も内部を歩いているようにシミュレーションでき るのも優れた点で、空間を読み解くのに適し ている。もちろん最終的なチェックのためには CGも作成する。

森氏のプレゼンの特徴のひとつは、キリンや象

など動物が描かれていること。「人間の姿を 入れるのはスケール感を表すため。でも動物 もいた方が楽しいでしょう?」 そのままポスタ ーになるほどの、感性がみなぎる像が結ばれ た森氏のプレゼンは、建築以外の分野の人び とに対する求心力がある。

CGに磨きをかける

15~16年前、ヤマギワに勤めていた頃から コンピュータを駆使してムービーをつくってい たという角館政英氏。「コンピュータは、それ までできなかったことが実現できるのが面白く て、のめり込んでいった」と振り返る。ルール を定義して、いったんデータをインプットしてし まえばいろんなパターンが瞬時にできるし、ア ングルも自在。しかも設備や音響、インテリアも ランドスケープも含めた、トータルでの計画が 可能になって、完成度も上がる。それだけに プレゼンの説得力が増すのだそうだ。

角館氏がいま積極的に取り組んでいるのは、 性能設計。たとえば、JIS基準では、歩道は 交通量が多いほど照度が高く、少ないところ では照度が低くてよいとされる。しかし防犯

性の観点からするとまったくの逆のベクトル だ。そういう齟齬をなくした性能本意の照明 設計をすべきであり、自身では地方も含めた 街単位で実践していると語る*2。「CGは地 形や街といった大きなスケールでもスピーディ に対応できる。

とはいえ、「人の感覚がなくなると地域性や 文化がなくなってしまう。人の手とコンピュー タのバランスで相手に伝えることが大事」。 性能設計もその一環なのだ。

アプリを駆使して表現

「僕はスケッチが苦手でした。だからうまく描 くための工夫をいろいろと編み出したんです と語る岡本賢氏が最初にモニターに映し出し た表には、プレゼン用のアプリケーションがまと められていた#3。建築サイドから提供された 素材、時間の有無をふまえて、どんな表現方 法にするか、どんなアプリケーションを使うか が示されていた。

たとえばCG素材の場合、「Photoshop」で輪 郭を検出して出力し、その上に色鉛筆で着彩 する。写真であれば、トレーシングペーパーで建

物や空間の輪郭を写し取り、「Photoshop」上 で色をつけたり、人物を入れるなど#4。レタッ チのメインとなる「Photoshop」の機能を自 由自在に扱えることはデフォルトのようだ。岡 本氏は「光に注目を集めなければ成立しない ので、ムダな要素をできるだけ排除すること を心がけているという。

CGを作成するときは、「DIALux」と、「3ds Max」を連携している。複雑な光は、まず「3ds Max」で空間をつくって、「DIALux」で照度 分布図に仕上げるなど、アプリケーションを組 み合わせながら、最短で、最善の表現に持っ ていく。

「伝える相手が建築家なのか、クライアントな のか、それによって選択する手法を見極めて いく。案外、スケッチの方が評価が高いケー スもあるんですよし。

※Photoshop → 画像編集ソフト ※SketchUp → 三次元モデリングソフト ※DIALux → 照明シミュレーションソフト ※3ds Max → 三次元モデリングソフト

- #1 「昔はスケッチしていたものが、今はコンピュー タグラフィックス。それで光を語れるようになると 楽しくなってくるのでは?」と森氏。
- #2 横浜元町中通りで実験、整備した街の光環 境。「凹んだところに灯りをつけることで、安心 感が増すんですよ」と角館氏。
- #3 岡本氏作成の「プレゼンテーションの手法とア プリケーション」。
- #4 模型写真をトレースしてからスキャンし、 「Photoshop」上でレタッチ。(岡本氏)









光の生理と心理~記憶をつくれるか、照明デザイン~

Physiology and Psychology of Light – Whether Lighting Design Can Create Memories

IALD JAPAN + Enlighten Asia

コーディネーター | 東宮洋美 パネリスト | 飯塚千恵里、深田吉孝

Coordinator: Hiromi Tomiva Panelists: Chieri lizuka, Yoshitaka Fukada

Coordinator

東宮洋美

株式会社ライトスケープ・デザイン・オフィス/ライ トスケープ・デザイン・オフィスは自然光や建築との バランス、人や空間との関係における光の重要性 や可能性を探究し、人の心理に影響を与える"知覚 する光"による視覚的効果に配慮したデザインと意 識を提供している。

Panelists

飯塚千恵里

アラップ/2007年Arup入社、東京事務所勤務。 2010-2011年Arupロンドン事務所勤務。2011 年 Arup東京事務所勤務。

深田吉孝

東京大学 大学院理学系研究科 生物化学専攻/ 東京大学 教授(理博)。生化学·分子生物学·行 動学の解析により哺乳類の体内時計の分子機構 を研究。脳が時を刻む仕組みにアプローチ。網膜 や脳の光シグナル伝達の解析でも国際的に有名。 国際光生物学連合 副会長。

身体に刻まれた サーカディアンリズム

地球の動きと連動する細胞

人間は一定の睡眠のあと目覚め、活動し、また 眠りにつく。それを24時間のサイクルで繰り返 している。社会の動きに沿った時間の流れで もあるが、根底にあるのは人間の身体の、細胞 レベルに刻まれたリズムである。これをサーカ ディアンリズムという。ラテン語を元にした造語 で、サーカは about、ディアンは a day。 「約 一日のリズム」「約一日周期で刻むリズム」とい う意味だ。日本語では概日リズムと訳される。 ほ乳類の体内時計について研究する深田 吉孝氏の解説によれば、サーカディアンリズム は、動物、植物、バクテリアなど、すべての生物 に備わっているという。その周期は生物によ って異なり、人間の場合は約25時間。それ を24時間周期になるように、ペースを進めたり (24時間より短い生物は戻したり)しながら自 発的に調整している。このときに大切なシグ ナルのひとつとして挙げられたのは、朝日を浴 び、朝食をとること。このときに強いリセットが 起こる。太陽光という外的因子が体内時計

に強く作用するのだ。

生物がこのシステムを獲得した経緯について、 「明と暗を繰り返す地球上で進化してきた生 物が、最初は受動的に、後に自身を変動させ て、遺伝的プログラムに24時間で振動する時 計のようなシステムがつくられたと考えられて いると深田氏は語る。

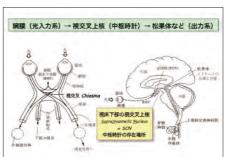
また、体内時計は記憶、中でも長期記憶に関 係していることが分かっているそうだ。記憶 を固定するコンソリデーションというプロセス で、時計遺伝子から発信されるシグナルによ って調節しているという。「眼の網膜でキャッ チレた光のうち99%は視覚で用いるが、残り のわずか1%は光の明暗サイクルのシグナルと して体内時計に送られている」(深田氏)。

長い時間をかけて育まれた身体と光の関係 を念頭においたとき、本格的に転換期を迎え たLEDはどうあるべきか? 深田氏は「LED はシャープな光。生物を照射するには広いス ペクトルで太陽光に近づける方向(自然に近 い)がよいのではないか」と示唆した。

文化を育てる人工光

日本の歴史的な建築とあかりの研究をしてき





た飯塚千恵里氏は、人間の明るさの認識に ついて、月のほのかな光から南の島のまばゆ い光まで受容できる、ダイナミックレンジの広さ を指摘した。日本文化の代表格ともいえる茶 道の世界でも、簾を上げて外光を入れる演出 をしたり、朝日が昇るとともに行う朝茶や、灯芯 や蝋燭の灯りのもとで催す夜咄の茶事など、 光は重要なファクターとなっている。祭りや行 事ではあふれるほどの光があり、茶会では抑 制された灯りを用いる。そうした幅広い光のも とで文化が醸成されてきた。「時間、太陽の 光の違い、移ろいを楽しむのは人間の特性で あり、優れている点である」と飯塚氏。そして 「身体に刻まれたリズムをないがしろにしては

いけない。人工照明を自由に操れるようにな った現代だからこそ、昼は活動的な光、夜は 穏やかな光、人間の身体がもっている記憶を 生かした照明環境をつくりたい」と語った。 東宮氏は最後に、「意識は環境とともに記憶

される |という言葉を掲げながら、「光と記憶 で創造力が生まれる。創造力を生むのが照 明力」と、照明デザイナーとしての矜持を述べ て締めくくった。

街に点在するコンビニエンスストアは太陽が 沈んでからも煌々とした光に包まれている。し かし明と暗のリズムが身体を支配しているの ならば、もう少し暗の時間に意識を向けてもよ いはずだ。

- #1 人間の身体は、昼の光で活動し、夜の闇に睡 眠をとる。それは長い地球の歴史に培われてき た生存し続けるため術。
- #2 体内時計は、脳の中心に位置し、体温や食欲 を調節するなど重要な機能が密集している視 床下部の一部、視交叉上核(しこうさじょうかく) が統括している。
- #3 視交叉上核が体内時計を司ることは、マウスが 活動期に行う輪まわしの習性を利用した実験 で証明された。
- #4 人間の目は99%以上を視覚に使うが、残りの わずか1%くらいの、いわゆる「見えない光」、あ るいは「意識しない光 | は、明暗サイクルのシグ ナルとして体内時計に送られている。







Seminar 06

若手デザイナーが語る世界における照明デザインの時流とこれから

Current Trends and the Future of Worldwide Lighting Design, as Told by Young Designers

コーディネーター | 中谷太郎 パネリスト | 上田良哉、山路哲生、村岡桃子、田中圭吾

Coordinator: Taro Nakatani Panelists: Yoshichika Ueda, Tetsuo Yamaii, Momoko Muraoka, Keigo Tanaka







Coordinator

中谷太郎

*CYPHER (サイファー) / 1978 年奈良県生 まれ。幼少期をドイツで過ごす。2000年神戸芸術 工科大学卒業。同年、大光電機株式会社入社。 2002年、有限会社スタイルマテック松本設計室 入社。2006 年*CYPHER (サイファー)を設立。

Panelists

上田良哉

株式会社 乃村工藝社 A.N.D. / 関西大学工 学部建築学科卒業後、NYへ渡りPratt Institute にてインテリアの修士課程を終了。2002年に tonychi and associates入社。2007年に帰国 し、株式会社 乃村工藝社 A.N.D.入社。

山路哲生

隈研吾建築都市設計事務所/1980年香川県生ま れ。2005~2006年 Architekt Cristian Kerez。 2006年横浜国立大学大学院修了。2006~08 年SAKO建築設計工社。2010年~隈研吾建築 都市設計事務所。

村岡桃子

株式会社ライティング プランナーズ アソシエーツ/ 2005年よりLPAにおいて、国内外の高層オフィ スビルからレストランに至る広範なプロジェクトを担 当する。主な担当プロジェクトは、Grand Hyatt Mumbai China House、国際教養大学図書館、 上海IFC、Ocean Financial Center Singapore、 Louis Vuitton Marina Bay Sands Singapore など。

田中 圭吾

株式会社ライトモーメント/神奈川県生まれ、ハワ イ育ち。2003年、大光電機TACTデザイン課入 社。2007年、ニューヨークの照明デザイン事務所 にて建築照明の基礎を学ぶ。2009年帰国後、 LIGHTDESIGN INCに入社、日本から世界に 発信するエモーショナルな照明デザインを目指す。 2013年独立。

日本人の感性が 発露するプロダクト

建築、インテリア、照明の各ジャンルから若手 デザイナーが集まり、デザインの世界はどう流 れているのか、これからどう変わっていくのか を、それぞれの立場から語るセミナー。ジャン ルは違えど、いずれも海外での仕事の経験の 持ち主で、彼らがどんな考え方をもってデザイ ンをまとめていったか、各自がキーワードを提 示して、そこから考え方を示すというセミナー である。

トップは田中圭吾氏。キーワードは「ハートに火 をつける!!!! 。彼はふたつの事例を引き出し て、自身の考えを語りはじめた。「アメリカでは、 照明デザインに対して日本とは全然違うアプロ ーチをしていました。当時、すでにアメリカでは 容量計算表を使って省エネを考えていました。 すべてのプロジェクトに対して義務づけられて います。仕切られた空間ごとに計算をしなけ ればならず、とても骨の折れる作業です。容 量オーバーになれば最初からやり直しですか ら。ですから最初から容量計算をするスタッフ

もいました。ここで私のハートに火がついてし まいました。これを克服してデザインをやり遂 げたいと思ったんです。もうひとつはザハ・ハ ディドの「Galaxy Soho」 #1#2です。オープニ ングセレモニーには何万人という人が来てくれ ました。といっても、テナントが入っているわけ ではなく、建築の竣工セレモニーなんです。日 本でもこういうことができないか。人びとのハー トに火をつけることができないかと

続く上田良哉氏が選んだキーワードは「Flexi

bility」。特に海外での仕事の場合は、クライ アントや施工業者によって柔軟に対応してい かなくてはならないと言う。「デザイナーの意 図を汲んでくれるようなクライアントの場合は、 一緒にものをつくっていこうというスタンスにな りますが、そうでないケース、ものすら見せてく れないクライアントの場合は、大きく失敗しない 方法をとります。できるだけチェックをしますが、 すべてチェックできるわけではない。しかし失 敗はまずい。デザインのクォリティはできるだ け落とさないで、どこまでできるかが頑張りどこ ろですねし。

村岡桃子氏は「適正技術とチャレンジの両

立しというキーワード。「海外での仕事では、 常に対象を正確に読み取って、何をつくるか、 つくれるかを正確に引き出すことが必要です。 社会、環境、技術力、そういったものを読み取 っていかなくてはいけません。そのうえで空 間を演出していくことを考える。現地での調 整がとても重要ですね。現地の方々が常に デザイナーと同じ方向を見ているわけではあり ませんから。もちろん簡単にいくことではあり ません。両立させることは本当に難しいです が、対象を正確に読まない限りより良いデザイ ンはできないと思っています |。#3

4人目は山路哲哉氏。「光と明」と単純そうで 奥の深そうなキーワード。いくつかの例を挙げ、 「自然光の強さを操作するために建築のボリ ユームが決まる」と説明する。照明に頼らな い光をどう空間に引き込むか、明かりをいかに 切り取るかが重要だと言う。田中氏からは「私 たちがコラボレートする建築家にも、人工光に 頼らずに自然光で表現できないかというオファ ーは多いです。そういう場合、無理に人工光 を使うのではなく自然光を活かした照明デザ インを考えようと思います。勉強することは多

いですが」という意見も出た。「私は建築家と いう立場ですから、人工光に頼ってしまうと光 の綺麗さだけになってしまう。あくまでも建築 家として空間をつくっていきたいと思っていま す。村岡氏からは「空間と照明を別々に考え るのではなく、寄り添っていくものではないかし との発言があった。

最後はコーディネーターの中谷氏。 「心 |とい うキーワードを提示した。梅田スカイビルのプ ロジェクトでは、屋上庭園の照明リニューアル で、恋人たちの相性診断を取り入れた照明を 行った。「大阪らしいコテコテの提案でした が、人の心に何かを訴えることができる照明を したかったんです」。大阪・御堂筋のライトア ップでは、イチョウ並木の葉の色に合わせた 黄色いLED照明を使った#4。「これも人の心 に残ってくれるプロジェクトになったのではな いかと思っています。生活している人たちの 心に残る街並みのライトアップがあったらとい う気持ちでした」。氏は、海外でその国の記 念碑のようなもののライトアップをしたいと言う。 人びとの心に刻まれる光を目指す言葉で締め くくられた。

- #1、2 北京に建設された「Galaxy Soho」。照 明デザインは田中圭吾氏が担当。設計はザ ハ・ハディド。巨大な宇宙船、はたまた超巨大 生命体かと思わせるフォルム。中国最大の民 間デベロッパーが建設した商業ビルである。 基本的に100㎡強のユニットに小分けされ分 譲されるというが、中国外交部の建物の向か いに位置するビジネス地区の好立地ということ もあり、ほとんどのユニットが竣工前に完売し たという。#2は竣工セレモニーの様子。まだ テナント工事がはじまっていないのに、何万人 という人が集まった。
- #3 シンガポールのマリーナ・ベイ・サンズに建 ⊃[Louis Vuitton Singapore Marina Bay」。湾を囲む遊歩道沿いのウォーターフロ ントに位置し、名高い景色の中でのランドマー クとなっている。ここでの照明のコンセプトキー ワードは「Elegant illuminated boat」。周 囲の風景とうまく調和をとりつつ、かつ洗練さ れた際立つ光の風景を目指して計画がなされ ている。
- #4 御堂筋のイルミネーション。毎年12月から翌 年1月まで大阪のメインストリートである御堂 筋1.9kmが光で彩られる。星が降り注いで いるかのような「星屑イルミ」や沿道のビルの ライトアップが施された。







#1 Photo: Forward Stroke Inc. #2 Photo: Forward Stroke Inc.





Seminar | 07

照明デザイン教育に何を求めるか

What We Ask of Lighting Design Education

コーディネーター | 岩井達弥 バネリスト | 田中康一、ガウラフ ジェイン、瀬川佐知子

Coordinator: Tatsuya Iwai Panelists: Koichi Tanaka, Gaurav Jain, Sachiko Segawa

Coordinator

岩井達弥

岩井達弥光景デザイン/1955年東京都生まれ。 1980年日本大学理工学部建築学科卒業、TLヤ マギワ研究所入社。1996年岩井達弥光景デザイ ン設立。国際照明デザイナー協会会員。日本大学、 女子美術大学、武蔵野美術大学非常勤講師。

Panelists

田中康一

ライトリンクス インターナショナル リミテッド/香港 で2011年に照明デザイン会社、LIGHTLINKS INTERNATIONAL LIMITEDを起業し、香港、 中国、日本などアジアを中心とした数々のプロジェク トを進めている。

ガウラフ ジェイン

ライティング プランナーズ アソシエーツ(S)/1975 年生まれ。インドのSSAA Gurgaon大学建築学 部卒業。3年間インドで建築家として勤めた後、ドイ ツのWismar大学で照明を学ぶ。イタリアで2年 間仕事経験を重ねた後、2005年にLPAに入社。 公共施設、教育施設、オフィス、ホテルなどを担当し ている。主な担当プロジェクトは、アレクサンドラアー チ、ドビーゴートグリーン、バイドフォード、シンガポー ルアートスクール、シンガポール国立大学エデュ ケーションリソースセンターインターコンチネンタルリ ゾート榛南など。

瀬川佐知子

株式会社ライティング プランナーズ アソシエーツ/ 山口県生まれ。武蔵野美術大学空間演出学科卒 業後、大光電機株式会社TACT TOKYO入社。 主にレストランなどの商業施設、また公共施設も手 がける。途中、スウェーデン王立工科大学建築照明 デザインコース(KTH)に留学。2012年4月LPA

バランスのよい照明デザインを学ぶ

香港を拠点にアジアのプロジェクトを展開する

IALD JAPAN + Enlighten Asia

田中康一氏。もともと照明デザインを学んで いたのではなく、途中から照明を学ぼうと思っ たという。「当時、照明デザインを教える大学 というのは世界に4つぐらいしかなく、University College London (UCL)を選びま した。UCLの中にバートレット校というのがあ りまして、修士課程で照明を学びました。実 はもうひとつ、UCLの前に大学院に在席をし ていまして、グラスゴー美術学校の照明研究 コースというところにおりました。都市計画と 照明の関係をリサーチするというテーマで研 究をしていました |。 UCLは、ヨーロッパでもっ とも早く照明デザイン教育を行った学校だとい う。「コースは、デザインからエンジニアリング まで、基礎的なものから応用的なものまでバラ ンスよく組まれていて、私にとっては非常に充 実したものでした」。照明デザインの授業の 半分は自然光、半分は人工光についてを扱っ たという。卒業生は、照明デザインに行く人だ けでなく建築やアラップのようなエンジニアリン グに行く人までさまざまだったという。

なぜ照明デザインを学んだのか?

なぜ照明デザインを学んだのか? というテー マで語るガウラフ・ジェイン氏。「私がどのよ うに照明デザインを学んだかをお話しする 前に、重要なことをお話ししたいと思います。 それは、なぜ照明デザインを選んだかという ことです」とジェイン氏。照明デザインを学ぶ 前に大学で建築を学び、その後3年間インド で建築家として活動した。その時に照明デ ザインを学ぼうと考えたという。「建築家はあ

まり照明のことについて語りません。自然光 についても人工光についても分かっていませ ん。そこが疑問だったのです」。氏は比較 的新しく創設されたドイツのWismar大学の 照明デザインコースを選択する。「大学での カリキュラムは、2年間です。1学期目は基 礎を学びます。2学期から応用科目が増え てきます。照明デザインそのものだけではな く、類型学とか心理学など多岐に渡っていま した。同時にコンピュータシミュレーションの ようなテクニカルな授業もあります。空調と 照明、音響と照明、OAと照明、これらをどう 組み合わせたらいいのかという授業もありま した。そして3学期からは外部での実習が 主になります。4学期目は修士論文を書く期 間です。これは大学でなくてもどこで書いて もいいというものでした」。

いかに自然光を取り入れるか

瀬川佐知子氏は、武蔵野美術大学空間演出 学科を卒業して、大光電機のTACT(デザイ ン・設計部門)に入社し、あらためてスウェー デン王立工科大学(KTH)で照明デザインを 学ぶことにした。「私の場合は、一度照明デ ザインの世界に入ってからまた照明について の教育を受けたわけです。KTHのあるスト ックホルムは、北海道よりはるかに緯度が高い ところです。このような特殊な環境で光につ いて学べるというところに惹かれました。当 時は1年間のコースしかなかったのだが、現 在は2年間のコースも併設されたらしいという。 「私が行った時には、21カ国から35名が学 びにきていました。1年間のコースは『Lighting and Humans [Outdoor Lighting]

[Light and Theory] [Indoor Lighting Daylight Lighting Luminaires Design』の6つのカリキュラムに分かれていま した。『Outdoor Lighting』は実際に照明 器具を使った実務的な授業です。プロの照 明デザイナーが講師となり、指導を受けること ができました。『Daylight Lighting』は自然 光について学ぶ授業です。ストックホルムは、 真夏でも東京の春分秋分より太陽高度が低 い。そんな自然環境において、いかに自然光 を室内に取り込むかということが重要視され ていましたし。

自然光と人工光のバランス

コーディネータの岩井達弥氏が「田中さん、ジ ェインさん、瀬川さん、それぞれが照明教育を 受けた学校というのは、どこも緯度が高いとこ ろですね。太陽の光に敏感であるところで照 明デザインを教えている」と切り出す。

田中氏は最初にディレクターからは、「人工 光を勉強するだけの学校ではない」とはっきり 言われたそうだ。ジェイン氏は「自然光につい ての考え方の違いを勉強しました。私はイン ド出身ですから『光=暑い』という感覚を持っ ていました。ヨーロッパでの経験で、自然光を 生かすこと、自然光と人工光をいかに組み合 わせるかを学べました」。瀬川氏も「自然光 を大事にした上に人工光を組み合わせてい く。 そこが大事なのではないでしょうか |と語 った。

日本の照明デザイン教育

会場からは、このような意見も飛び出た。「日 本の場合、照明デザインを教えるところは建

築だったり電気・電子だったり知的情報だっ たり、教えることは同じだけれど入口が違って いる。日本にも『照明学』という分野がスタン ダードとして成立しなくてはならないのではな いか」。「大学で照明デザインを勉強して卒 業しても、日本では受け皿がありません。受け 皿がもっと拡がっていくことを期待します」。

#1 自分たちが勉強してきた環境のスライドを前に、 思い出と共にそれぞれの受けてきた照明デザ イン教育を語るパネリスト。





岐路に立つ照明デザイン

Lighting Design Standing at a Crossroads

コーディネーター | 富田泰行 バネリスト | 小山憲太郎、岡安 泉、海宝幸一

Coordinator: Yasuyuki Tomita Panelists: Kentaro Koyama, Izumi Okayasu, Kouichi Kaihou



Coordinator

富田泰行

トミタ・ライティングデザイン・オフィス/卒業後、株式 会社石井幹子デザイン事務所を経て、トミタ・ライティ ングデザイン・オフィスを設立。"光のデザインは関係 性のデザイン"をモットーに都市計画、都市再開発、建 築、インテリアの照明デザインに携わる。武蔵野美術 大学、女子美術大学他非常勤講師。日本照明賞、 SDA優秀賞、IESNA AWARD OF MERIT他受 賞。国際照明デザイナー協会、照明学会、都市環境 デザイン会議、日本デザイン学会会員。

Panelists

小山憲太郎

コヤマケンタロウデザイン事務所/株式会社石井 幹子デザイン事務所を経て現事務所を設立。店 舗、住宅、ランドスケープなど建築の屋内・屋外の 照明デザイン設計のほか、照明デザインに関するセ ミナーの企画や大学講師なども務める。

岡安 泉

株式会社岡安泉照明設計事務所/1972年神奈 川県生まれ。1994年日本大学農獣医学部農業 工学科 卒業。1995~2000年生物系特定産業 技術研究推進機構。2000~2007年アイティー エル株式会社。2002年~super-robot 参加。 ismi design office設立。2008年岡安泉照明 設計事務所 改称。

海宝幸一

株式会社日建設計/1979年千葉大学工学部 電子工学科卒業。同年、株式会社日建設計に入 社。以来、照明計画、採光計画の立案、光環境評 価及び解析手法の開発等、広く光環境関連業務 を担当する。また、光ダクトシステムの開発、実用化 など、新しい照明手法の開発にも取り組んでいる。

照明の変化に 照明デザイナーや 設計者はどう関わるか

「節電」と「LEDの普及」

セミナー「岐路に経つ照明 | では、「節電 | や 「LED |をテーマに、コーディネーターの富田 泰行氏が3名のパネリストに向けて「照明デ ザインのこれから」と「今後何が変わって行く のか、また変わらなくてよいことは何か」という 課題を投げかけた。

富田氏は、原子力発電所の撤廃と節電に 対する意識調査の結果や、節電に対する自 らの取り組みを紹介した。同氏は「現在、計 画中の案件で選定している照明は、LEDの 割合が98.1%に至る。一方、自分の家での LED使用率は0%で、クリプトン球やハロゲ ン球を調光して使っている*1 |と話す。

小山憲太郎氏は、光源の変遷や、自身が手 がけた住宅から街路灯、都市の景観に関わ る仕事までを幅広い取り組みについて語っ た。LEDは、この10年で急激に効率が上 がり100lm/Wを超えているため「明るさとし

ては十分だ という。 「最近、東京の街を見る と、明るいなと思うことがある。そういう場所は LED照明に代わっている」と話す。同氏は、 数年前に行なった住空間の照明計画におい て、LEDをどのように使うべきか検討した。居 間や食卓を照らす照明などにはLEDを用い ず、主な生活の場と縁の切れる場所として、 窓枠の一部にLEDを埋め込み、タイマーを 組み合わせて使った。毎日暗くなる時間に、 温かみを感じさせる電球色のLEDの光が点 灯し、「近所で『明かりが灯る家』と呼ばれて いる#2」と同氏は話す。

新光源の普及は、建築と照明の形を変える

海宝幸一氏は、効率を優先しがちなオフィス照 明で節電の手法について試行錯誤を重ねてき た。空間の明るさ感を確保するためにデザイン を試行錯誤し、タスク・アンド・アンビエントの手 法を実践した事例や、自然光を給気シャフトか ら取り入れたり、全般、壁面、スポット照明をす べて自然光でまかなったりする事例を紹介し、 採光計画の今後の展開を期待させた。

さらに同氏は、既存の光源からLEDや有機

EL照明への転換について「単なる光源の置 き換えではなく、建築の形をぐんと変える#3。 戦前の建築は、部屋の奥まで自然光を取り 入れるために、オフィスの基本的な天井高を 4.5m、奥行きを10m程度として設計されて いた。だが蛍光灯の登場を機に一変し、昼夜 を問わず人工照明を点灯する前提で、基準 天井高が2.4m、奥行きが20mの大空間が 生まれた |と説明する。

新光源の進化のために、 照明デザイナーは使いこなす努力を

岡安泉氏は、LEDや有機EL照明の性質を 生かしたインスタレーションの事例として、白い 空間で光だけを見せたり、LEDの点滅の速さ を生かして筋状に流れ落ちる水の表情を非日 常的に見せたりする試み着を紹介した。こうい った事例と対照的に、建築照明の現状につい ては「既存の照明器具でLEDを使用するの ではなく、もっとLEDに合った(照明器具の)形 があるはずだ」と指摘する。同氏は「技術の進 歩は早いのに、使う側がLEDの性質を生かし 切れていない。建築設計者や照明デザイナー

が、製品の使い方や開発の方向性をメーカー に示せるように、自分を含めた照明デザイナー がもっと努力すべきだ」と話す。

富田氏は「原子力の神話が崩壊し、再生可 能エネルギーの活用が社会的な問題になる 中で、照明デザイナーがどのような立ち位置 で振る舞うべきか。LEDがこの10年ほどで 加速度的に市場に出回るようになり、照明が ここまでクローズアップされる時代は、白熱灯 が登場した時以来ではないか」と話す。

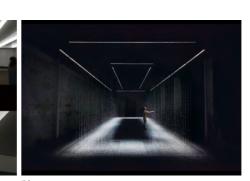
LEDを使うことで「節電した」と満足してしま ってはいけない。LEDの出現で白熱電灯が 悪者にされてしまった面があるが、白熱電灯 があったからこそダウンライトのような使い方 ができるようになった。蛍光灯の出現で、器具 の形やオフィスの形状に大きな変化がもたら された。ひょっとしたら50年後にはLEDが白 熱灯のように悪者扱いされているかもしれな い。それを踏まえたうえで、LEDを考えてい かなくてはならない。照明デザイナーや設計 者による試行錯誤や意識の変革は、節電や 光源の変換が求められる中で照明を発展さ せる大きな力になることだろう。

- #1 富田泰行氏は、「東京ステーションシティグラ ントウキョウ」など、都市のランドマークとなる大 型建築物の照明デザインを数多く手がけてき た。現在は、緊急の節電要請に応える計画と して、自らが携わる照明計画の提案に「特別 減灯時」という点灯パターンを設けるなど、状 況に合わせた照明提案を行っている。
- #2 小山憲太郎氏は、前勤務時代、東京タワーの 照明にLEDを使ったイルミネーションを検討し た1989年頃の様子を「信号機などに使われ るタイプのLED照明器具を展望台に取り付 け、1kmや500m程離れたビルから確認する と、光がまったく見えなかった」と振り返り、照 明環境の大きな変化に隔世の感があることを 強調した。東日本大震災後は、節電調査など にも積極的に取り組んでいる。
- #3 海宝幸一氏は、自然光と人工照明を問わず、建 築における光全般の計画に積極的に取り組ん でいる。光ダクトやLED照明を利用したオフィス の照明計画とタスク・アンド・アンビエント照明 の手法について多くの試みを実践している。
- #4 岡安泉氏が2011年にミラノサローネで発表 した作品「Luce Tempo Luogo<光・時・ 場>」。設計はフランスを拠点に活動する建 築事務所DGT (DORELL.GHOTMEH. TANE/ARCHITECTS) が担当した。岡安 氏は、東日本大震災を機に有志団体「エッセン シャルライト・ジャパン・プロジェクト」を立ち上げ たり、若手建築家との協同でインスタレーション 作品を発表するなど、建築の照明デザインだけ でなく、多岐にわたる活動が注目されている。









女と野獣」「バンパイア」などの一シーンを映

「影です。影が大事なんです。光だけで空間 を演出するのではなく、影をいかに有効に使 うか。いかにドラマを生み出すかは影が大事 なんです」。氏は、自身が手がけたシンガポー

シンガポールでは、壁一面に照明を施してほ しいという依頼に対して、手前に木を植え、そ の影を壁に投影した。「風があると木の影が ゆらゆらと揺れる。ドラマチックでしょう」。ベイ ルートのプロジェクトでは、木を植えずにプロジ ェクターで壁に木の影を投影したという。「光

歴史から見て

とを説明する。

中国では仏像に対して、すべて前面から光を 当てている。顔に影が落ちないようにしている のだ。中国の絵画を見ても、影がない。「光 はあるんです。でも影がない。それはなぜで しょうか。アジアでは、影が真実を覆い隠して しまうという思想があるのです」。仏像の顔に 影がない。これは真実をすべて表しているの だと説く。

空間をつくるのは光ではない

「中国の皇帝が、西洋のある国から絵画を進 まず最初に「ENLIGHTEN ASIA」のパン 呈されたそうです。お返しに自画像を贈った フレットを取り出したルイ・クレア氏。「ここに ところ、その絵を見て、『ひょっとして皇帝は病 載っている日本の照明デザイナーの作品を 気なのではないか』と言われたそうです。中 見て気づいたことがあります。光はあるけれ 国の伝統的な絵画でしたから影が描かれて ど影がありません。これはどうしたことなの いない。皇帝の顔に影がないのは真実を表し でしょうかし。氏は続いてルネ・マグリットの ているからです」。本当なのか笑い話なのか 絵画「Candle of Shadow」や映画「美 分からないが、影に対する考え方の違いがよ く分かる話である。 し出す。これらを例に、光だけではなく影が 「たとえば一本のロウソクがあったとします。 あることによって、そこにドラマが生まれるこ 西洋の絵画では、当然そのあかりによって

ルとベイルートの例を挙げた。

で遊ぶ、影で遊ぶ」を力説した。

表現が多い。ほぼすべてがそうだったといっ てもいい。一方、西洋ではパースペクティブの 表現が主流である。もちろんパースペクティブ の発明以前は平面的な表現であったし、アジ アのアクソノメトリックに比べればはるかに稚 拙なものだった。「パースペクティブな表現は アクソノメトリックの表現に比べると、空間のド ラマ性が生まれやすい。それに加え、そこに

んです |と強調する。

示した。

できた影を描きます。ところが、中国の絵画

ではあかりがあっても影は描かれません。

明暗を区別していないともいえます。たとえ

ば月夜。西洋の絵では当然月の光によって

おちる影が描かれますが、中国の絵ではや

はり影が描かれていません」。数多くの東

西の絵画を映し出し、西洋と東洋の、それ

ぞれの光と影についての扱い方、考え方を

日本も含め、アジアではアクソノメトリックによる

「アクソメでは、線は永遠に延びてつながって いきます。一方、パースの場合、線は収斂し ていきます。ここをよく覚えておいてください」。

影を加えることでより奥行きや深みが生まれる



「学生たちをつれて水族館に行ったことがあ ります。見学後、彼らにどういう印象を持った か尋ねてみました。すると興味深い答えが返 ってきました。何だと思いますかし。

西洋の学生は、まず全体の風景、大きな魚が いた、小さな魚がいた、こういう海草があった という。一方、アジアの学生は小さな魚から はじまって、全体の風景は最後に語るという。 西洋は全体から部分を把握していく。アジア は部分から全体を把握していく。

「面白いでしょう。では、手紙の住所のことを 考えてみましょう。日本をはじめとするアジアで

は、(国)→都道府県→町村→番地です。 西 洋では? 番地からはじまり、ストリート、シテ ィというように部分から全体へと辿るのです。 分数の場合はどうでしょう。2/5を何と読みま すか? 日本では5分の2です。全体を先に 言うのです。英語ではtwo fifth。部分が先 になるんですね。

全体からか部分からか。照明デザインにおい ても考えることが多いのではないだろうかとク レア氏は言う。

デザインとアート

「照明デザイナーはアーティストではないし、ア

ーティストであってはならないと思います」とク レア氏。デザイナーはあらゆる制約の中で表 現をしなくてはならないからだと言う。「寺院の 照明計画を依頼されたとしましょう。アーティス トならば、そこで自己表現をすればいいし、そ うすべきです。しかし照明デザイナーは異なり ます。その寺院のあり方、土地や地域、人び ととの関わり方、さまざまなところを理解するこ とからはじめなければなりません。デザイナー は、解釈する立場なんです」と最後に締めくく った。







Seminar 09

Coordinator

面出 薫

Panelists

ルイ・クレア

Louis Clair in Europe and Asia

株式会社 ライティング プランナーズ アソシエーツ/

1950年、東京生まれ。照明デザイナー。照明文

化研究会「照明探偵団」を組織し、団長として精力 的に活動を展開中。東京国際フォーラム、JR京

都駅、せんだいメディアテーク、六本木ヒルズ、シン

ガポール中心市街地照明マスタープラン、JR東京 駅丸の内駅舎復原ライトアップなどの照明計画を

担当。国際照明デザイン大賞、日本文化デザイン

賞、毎日デザイン賞などを受賞。著書に『世界照 明探偵団」鹿島出版会、『都市と建築の照明デ

ザイン』六耀社、『陰影のデザイン』六耀社、『光

ライトシーブル/映画の世界から出発し1978年より

照明デザインに従事。1983年独立しライト シーブル

を立ち上げ、1990年には東南アジア、中国、中東ま で事業を拡大した。1992年ポイボス建築、ステージ

照明デザイナー協会の創設者となる。1995年建築 照明デザイナー協会(A.C.E)、2001年/2003年同

協会プレジデントを務める。2000年よりIALD会員。

国際照明器具産業のマーケティングコンサルタント。 世界各国で講演、ワークショップなどを行っている。建

築家である彼の息子エマニュエルは1998年パリの

ライトシーブルに参加。現在シンガポール、マドリッド、

中国、マレーシア、ブラジルに6つの姉妹会社を持つ。

主な著書に"Architectures of Lights"。

のゼミナール』鹿島出版会など。

コーディネーター | 面出 薫 パネリスト | ルイ・クレア Coordinator: Kaoru Mende Panelist: Louis Clair

Louis Clair in Europe and Asia

Charles Stone in USA and Asia

コーディネーター | 面出 薫 パネリスト | チャールズ・ストーン

Charles Stone in USA and Asia

Coordinator: Kaoru Mende Panelist: Charles Stone





Coordinator

Seminar 10

面出 薫

株式会社 ライティング プランナーズ アソシエーツ/ 1950年、東京生まれ。照明デザイナー。照明文 化研究会「照明探偵団」を組織し、団長として精力 的に活動を展開中。東京国際フォーラム、JR京 都駅、せんだいメディアテーク、六本木ヒルズ、シン ガポール中心市街地照明マスタープラン、JR東京 駅丸の内駅舎復原ライトアップなどの照明計画を 担当。国際照明デザイン大賞、日本文化デザイン 賞、毎日デザイン賞などを受賞。著書に「世界照明 探偵団」鹿島出版会、『都市と建築の照明デザイ ン』六耀社、『陰影のデザイン』六耀社、『光のゼ ミナール』鹿島出版会など。

Panelists

チャールズ・ストーン

フィッシャー マランツ ストーン/1976年プリンスト ン大学、舞台・ダンス照明デザインで学位を取得。 当初は舞台照明デザインを行っていたが、すぐに 建築照明デザインも従事するようになり、ワシント ンでしばらく働いた後、Jules Fisher and Paul Marantzとともにニューヨークで働くようになる。そ れから30年たった現在は、マンハッタンのフラティロ ン地区に位置するデザインスタジオで、35名の照 明デザイナーをもつ Fisher Marantz Stoneの 社長である。数多くの受賞歴もあり、よく知られて いるプロジェクトにはカーネギーホール、ワシントンモ ニュメント、アメリカ自然史博物館-地球宇宙ローズ センター、香港国際空港などがある。 NCQLPや LEED 資格保持者。 IALD のフェロー会員でもあ り、過去には会長も務めた。

コーディネーターの面出薫氏が提示したトピ ックは「アメリカとアジア」。チャールズ・ストー ン氏は面出氏とのコラボレーションの経験も あり、日本での照明デザインの経験もある。ス トーン氏は、「アジア的な光の感覚」とは何 かというテーマで講演した。同氏は、Fisher Marantz Stoneでポール・マランツ氏らと手 がけたプロジェクトの中から、日本人建築家に よるアメリカでのプロジェクトや、日本人とアメリ カ人建築家によるアジアと日本のプロジェクト を取り上げて解説した。

IALD JAPAN + Enlighten Asia

自然光

滋賀の美術館「MIHO MUSEUM」。設計は I.M. ペイ氏。ここでは、自然光を活かす手法 がとられている。過度な光を抑え、建築の天窓 からの自然光をふんだんに取り入れ、かつ室 内に設けられた竹の植栽を強調する照明デザ インを行っている。館内へのアプローチには柔 らかな光を発するオリジナルのランタンをデザイ ンして配置した。美術館へのアクセスのため の橋の照明もストーン氏が手がけている。「橋 のデザインがいいから、すんなり照明デザイン は決まりましたよ」と語る。空間デザインと照明 デザインは切り離してはいけないと同氏。

教育施設内にあるチャペル「Miho Institute of Aesthetics—Chapel^{#1}」では、緩やかな 円錐形の建築の一部に設けられた広い開口部 から、温かな印象の間接照明が見て取れる。 「光がなければ影はない。影があることで光 の存在が明らかになるんです」。この空間に は慎重に構成された光のレイヤーが存在す る。チャペル内には、大きなリング状のシャンデ リアが吊られている。円錐形のチャペルの内

壁の勾配などを考慮しながら、リングのスケー ルと形状、光源の角度などについて、モックア ップを制作し、何度もディスカッションを重ねた という。

面・線・点

中国・蘇州に建てられた美術館「Suzhou Museum は、床、壁、天井が幾何学的に構 成された建築である。ストーン氏は、上下左 右のどの面を見てもしっかりと建築が見えるよ うに照明計画がなされた。ここでも自然光が 積極的に利用されており、面・線・点が意識 されている。

磯崎新氏が設計した北京の美術館「CAFA MoCA(Central Academy of Fine Arts, Museum of Contemporary Art)」では、 壁を照らすためにどのような手法を選ぶかが 問題になり、自然光を利用した壁面照明が採 用されている。天窓から取り込んだ光は「光と 影がどこからはじまって、どこで終わっているか をほとんど意識させない、とても柔らかい照明 効果を得た」。いくつかの例を挙げ、自然光の 大切さをストーン氏は語る。

さらに同氏は、世界中の照明デザイナーが使 う照明の三原則を挙げる。

「アンビエント・ルミネッセンス――周囲を取り巻 くような柔らかな光

「フォーカル・グロウ―ローマのパンテオンなど にみられる、天井の穴から太陽光が差し込ん だ時の、指向性があり、コントラストが強い光 「プレイ・オブ・ブリリアンス――シャンデリアなど に見られる遊び心のある光の輝き」

これらをいかに使いこなすか。照明デザイン は自然の光がとても重要だと説く。

照明器具や照明デザイナーの存在

建築の照明を計画することについてストーン 氏は次のようにも話す。

「建築家や評論家はよく、照明の良し悪しを 議論する。すべての場合でないにせよ、私は、 良い照明とは、照明器具や照明デザイナー の存在が気づかれることのない照明だと思っ ている。気づかれてはいけないんです。心地 よい空間だと思ってくれればいいんです。私 たちが前面に出る必要はないでしょう」。米国 テキサスにある「ASIA SOCIETY TEXAS CENTER」では、設計を手がけた建築家の 谷口吉生氏が特に照明の存在を感じさせな いことを望んでいた。同施設には、室内に座

って外を見る風景をつくる照明として、谷口 氏が設計し面出氏が照明デザインを担当し た「東京倶楽部」と似た照明手法も取り入れ られており、ここにも面と線と点が意識されて

最後に同氏は若い照明デザイナーへ向けて 「ヨーロッパ、アメリカ、あるいはアジアに関わ らず、大切なのは、『最後までやり遂げる』こ とだ。最後まで関われば、出来栄えは80% が99%になり、それ以上になることもある。関 わらなければ80%はあっという間に50%を 下回る。良いプロジェクトをつくるにはどうした らよいのか。そこに立って戦うことでしかない」 と語った。

- #1 [Miho Institute of Aesthetics-Chapel」。自然光と人工光の融合。
- #2 アメリカ・9.11のメモリアル「The National September 11 Memorial」。設計はマイ ケル・アラド、ランドスケープ・デザインはピー ター・ウォーカー。建築・ランドスープ・照明の 幸せな出会い。

Miho Institute of Aesthetics - Chapel Shigaraki, Japan Architect: I.M. Pei Architect Architect of Record: I.O. Architect Photography: Fisher Marantz Stone

The National September 11 Memorial New York City, USA Client: The National September 11 Memorial & Museum Architect: Michael Arad Landscape Architect: Peter Walker Photography: Caridad Sola Photography







Akali Studio 有明あかりスタジオ

Ariake Akali Studio

「ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN」と併催された「LIGHTING FAIR」では、これからの照明デザインを探る新たなキーワードを発掘してもらう、3つのプログラムから構成された「有明あかりスタジオ」が開催された。

「ALL LIGHT NIPPON」と名付けられたトークショー。照明デザイナーらがラジオの公開放送形式でパーソナリティーを務め、「こんなのあった!愛しの照明器具たち」「照明デザイナーの理想のリビング教えます」「アジアのあかり、ここがすごいよ!」「こんなのほしいよね!未来の照明」「店舗のあかり、何でも答えます」など、プロだけではなく一般の方にも楽しんでもらえる37プログラムのトークショーが行われた。ひとつのプログラムは15~30分で、朝からじっくり聴くもよし、たまたま会場に行った時に聴いたトークで納得したり驚いた

り。聴き方はさまざまに楽しめるものとなっていた。ひとつひとつのテーマは、掘り下げればそれこそ一冊の本になってしまうものだが、そこは「入門編」として軽い気持ちで照明の世界を覗いてもらいたいという意図は正解だった ト田る

同会場では、日本の照明デザイナー50名以上が、これまでに手がけてきた作品を紹介するコーナーが設けられた。50名以上のデザイナーが一堂に会するというのは、日本ではおそらくはじめてのことだろう。熱心にパネルに見入る来場者の姿が数多く見られ、「照明デザインってこういうことなんだ」などという声も聞かれた。

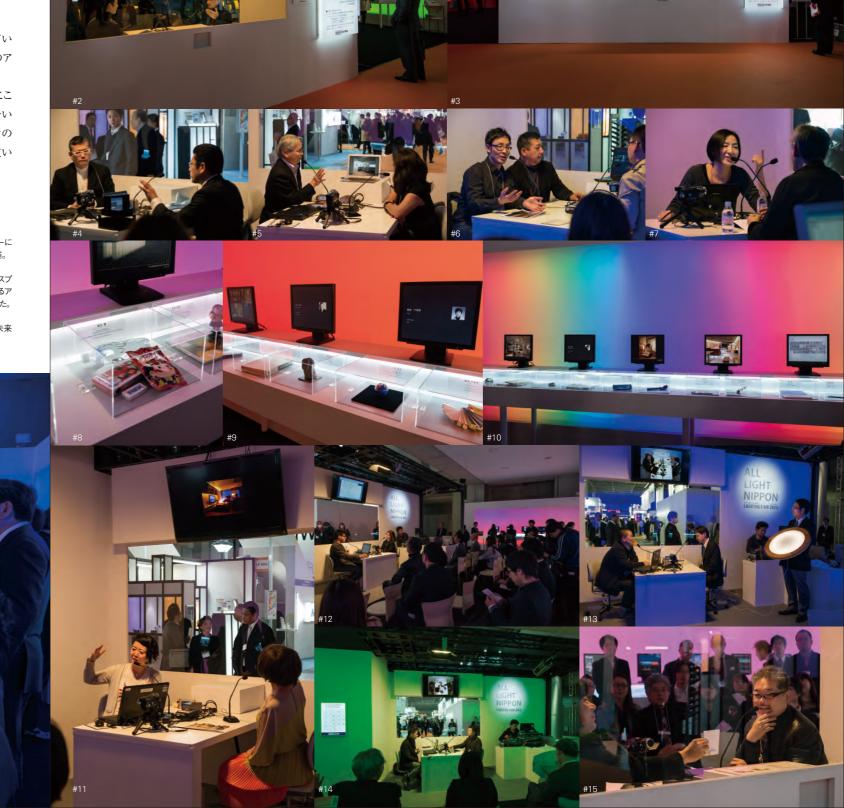
また、照明デザインをするうえで欠かせない 「照明デザイナーの愛する一品」が展示され、照明デザイナーたちが何を考え、何をし たいのかを知るうえで貴重な展示となっていた。ここからもまた、新しい照明デザインのアイデアが生まれていくのだろう。

LIGHTING FAIR 2003 有明あか りスタジオ

デザイナーというと、とかく上からの目線でここはこうしなさいという印象があるかもしれないが、少なくともこのブースを訪れた来場者の方々は、照明・あかりについて肩の力を抜いて興味を持っていただけたに違いない。

Caption

- #1~7 東京あかりスタジオ内ブースでは照明デザイナーに よる公開放送「ALL LIGHT NIPPON」を開催。
- #8~10 照明デザイナーの愛する一品を展示。液晶ディスプレイには各々の作品紹介が行われた。愛着のあるアイテム達はデザイナーの個性を垣間見ることができた。
- #9,10 連日多数のパーソナリティが会場を担当。光の未来 やあかりのヒントなどのトークで会場内を賑わせた。



有明ありりれるタジオ

照明デザイナーとめぐるTokyo Light Cruise

Tokyo Light Cruise with Lighting Designers

2013年3月6日、夜景について照明デザイナーの解説を聞きながら都内の4つの施設を巡る バスツアー「Tokyo Light Cruise」が開催された。143名の参加者、関係者25名が4台の大型バスに分乗して、 照明デザイナーが企画からガイド役まで務め、デザインのエピソードを語った。

ガイド | [1号車] 近田玲子、永津 努 [2号車] 小野田行雄、目黒朋美 [3号車] 稲葉 裕、飯塚千恵里 [4号車] 野澤寿江、菅原千稲

Guide: Reiko Chikada, Tsutomu Nagatsu, Yukio Onoda, Tomomi Meguro, Yutaka Inaba, Chieri lizuka, Hisae Nozawa, Chiine Sugawara

参加者は車内で、各施設の設計を担当した 照明デザイナーが計画を解説する映像を見 て、現地で担当した事務所のスタッフやデザ イナー、器具メーカーから説明を受けた。4台 の大型バスは、2台ずつ各ポイントを逆回りに 見学する。

廃棄物のリサイクル工場「リーテム東京工 場」。照明デザインを手がけた近田玲子氏 は、資源や機械類に光を当てたことで、「働く 人の意識がぐっと変わった。取り扱う廃棄物 を、再生される『資源』だと捉えるようになっ た」と映像で語った。光が人びとの意識を変 えたのだ。メタルハライドランプを使いながら 色や明るさを変える照明演出は、その手法が 見学後の車内でも話題になった。

「東京ゲートブリッジ」。解説の映像は数多く の橋梁のライトアップを手がけてきた石井幹 子氏。さまざまな規制をクリアするために考え 出された構造体が特徴的な橋に施したトラ スを、いかに立体的に見せる照明手法を説 明した。震災から2年経過するのを待って、 2013年の春に点灯したライトアップは、遠くか ら見て楽しめる光と、見る人に気づかれない よう緻密に設計された照明器具による機能的 な光を両立していた。

映像で登場した面出薫氏は、「東京駅丸の内 駅舎」の復原工事に伴い計画された建物外 観のライトアップについて「今後100年間使い 続けられる光を想定した | と計画について語っ た。駅舎内にあるホテルの照明デザインを担 当した小野田行雄氏が「外部と内部の照明計 画を別のデザイナーが携わる場合、計画段階 での連携が重要になる」と話した。客室の窓 枠に取り付けられた照明器具は、面出氏の計 画によって建物外観のライトアップに貢献しなが ら、内部の照明としても役割を果たしている。

「東京スカイツリー」では戸恒浩人氏が現地 で、点灯から1年を経て「時計塔」と呼ぶ照 明が航空障害灯の代替として認められたこと を説明した。技術が進歩し、LEDによっての ライトアップの可能性がより広がっていることを 感じさせた。

さらに移動時の各車中でも、ガイド役の照明 デザイナーから、設計者ならではの話を聞くこ とができ、それに対して活発な質問がとびか った。たとえば、再開発地区のマスタープラ ンについて、街区全体の光の色温度を電球 色に揃えたことを説明されると、参加者からの 「住宅の中の照明は、照明デザイナーが指 定するのか」という質問に対しては「住宅の 内部まで言及することは稀で、建物の頂部や 階段室の色温度を揃えて建物全体や隣接す る建物との統一感を出している | などと計画 のポイントを丁寧に説明していた。

参加者には、同会員が照明デザインを手が けた施設を記載した地図が配布された。参 加者は、ツアー後も地図を片手に現地を訪れ ることができる。「東日本大震災から2年経っ て、皆さんと一緒にここまで光を楽しむ経験が できるようになってよかったしという言葉に、光 と向き合う照明デザイナーの喜びが現れてい た。2年前に街中のライトアップが次々に消さ れ、約1年を経て東京スカイツリーのライトアッ プが計画通りに点灯した。バスからライトアッ プを眺められる状態に戻った今、設計者や運 営者が照明デザインに込めた意味や問題意 識を自らの言葉で伝えることは、都市照明の 価値を高め、光を有効に使う施設を増やすこ とにつながることだろう。

|ツアーコース | Tour course

POINT | リーテム東京工場

東京都大田区。東京スーパーエコタウン内にある産業廃棄 物再資源化工場。破断機で1日に864tを処理できる。 [照明デザイン] 近田玲子デザイン事務所 [現地解説] 高永 祥

東京都千代田区。大規模な保存・復原工事によって2012 年に完成した東京駅の駅舎。

[照明デザイン] ライティング プランナーズ アソシエーツ [現地解説] 窪田麻里+永津 努

東京ゲートブリッジ

東京都江東区。空域制限の条件下で採用された連続トラ ス・ボックス複合構造という特徴的な構造を持つ橋。 [照明デザイン] 石井幹子デザイン事務所 [現地解説] 山田晃嗣

Caption

#1~3 リーテム東京工場

#4 東京ゲートブリッジ

#5 ツアーのガイドをつとめたメンバー

#6~8 東京スカイツリー

#9,10 東京駅丸の内駅舎



POINT 東京駅丸の内駅舎

POINT 東京スカイツリー 東京都墨田区。観光・商業施設やオフィスを併設された地 上デジタル放送の送信を主な役割とする電波塔。 [照明デザイン] シリウスライティングオフィス

「現地解説] 戸恒浩人+渡部哲夫[パナソニック]

Trip to enjoy the Traditional Japanese Culture & Lights in KYOTO

京都の伝統的な建築やデザイン、技術を光の視点から見つめ直す視察旅行「京都エクスカーション」が、 2013年3月9~10日に開催された。IALD本部役員のマーシャ・ターナー氏、チャールズ・ストーン氏、グスターボ・アヴィレス氏、 ロン・ハオレ氏など海外から訪れた8名を含めた25名の照明デザイナーや建築家、照明メーカーなどからの参加者が、 茶室や町家、照明器具の工房などを視察した。専門家ならではの発見や、日本の光に対する再認識につながった。

ガイド | 長町志穂 解説 | 河合 健 [京都造形大学准教授] 吉田理恵子 [ミリエーム]

京都は1200年前の平安時代から世界に誇る優れた文化を生み出し、後世に引き継いできた。数多くの国宝、重要文化財が残されており、「古都京都の文化財」として17の社寺・城が世界文化遺産として登録されている。京都では、生活、街並み、行事、風習などまで、その伝統は深く根付いている。

今回の京都エクスカーション(小旅行)は、3 つのテーマの元に企画された。

- 1.日本の真髄を知る旅。京文化の象徴である茶の湯で、自然光の光を体験。
- 2. 祇園散策と町家宿泊で京都の夜を堪能する。
- 3. 指物、和紙の光など、現在も息づく伝統工芸に触れる。

大徳寺の「黄梅院」と「孤篷庵」を、京都造形大学の河合健准教授の解説と翻訳、裏千家の文化を広める活動を行うミリエームの吉田理恵子氏の案内で訪れた。各々の視点で、採光の計画と光によって示された場のあり方を読み解いた。

なかでも、小堀遠州作の茶室「忘筌」は議論の場となった。西日の採光について綿密に計画されており、西側壁面の一部は、上半分が障子、下半分が開口になっている。座ると視



界に入らない高さの広縁の段差部分に外光が当たり、その光が天井で反射して部屋の奥を照らす。そのため、遠州自身が座ったといわれる亭主の席がもっとも明るくなる。壁や天井は白色を基調としており、光の反射率が高い。「木の配置や高さは、日差しを遮らないように調整されているのか」「茶室の前庭に敷かれた黒い石は西日の反射を抑えるためのものか」などと、参加者の話は尽きなかった。

「京都生活工芸館 無名舎 吉田家住宅」は、京商家の典型ともいうべき表屋造り。中庭と奥ノ庭から入る自然光によって、室内に移り変わる景色をつくり出している。建物を保存し使い続ける住まい手が施す、光や自然の風、気候を受け入れるための工夫に多くの感心が寄せられた。住まい手は、敷物の色で部屋を明るく感じさせたり、夏は涼しく感じるように40 Wの電球を、冬は暖かく感じるよう100 Wの電球を使い分けたりしている。

京指物・家具を製作する「興石」は数寄屋 建築で名高い中村外二工務店の姉妹店で ある。ここでは、細く繊細でありながら、建築 と同様に数百年使われることを前提した照明 器具をつくり出す。職人たちは、刳り物・挽物 (ろくろ)・たが物(桶・樽)・曲げ物・指物の 5つの技術を使い分ける。受け継がれた伝 統的な職人の技術に質問が絶えなかった。 建築の中で使われる和紙のデザインから製 作までを手がける堀木エリ子氏。伝統を現代 に受け継ぎ、さらに発展させること、新しい和 紙の可能性や魅力を文化として拡げていく 活動を行っている。堀木氏のショールームで は、光によって模様や色、凹凸などの表情を 変える和紙が、新旧の技術により生み出され ることに参加者の関心が寄せられた。

|行程 | Road map DAY.01

大徳寺 黄梅院 見学

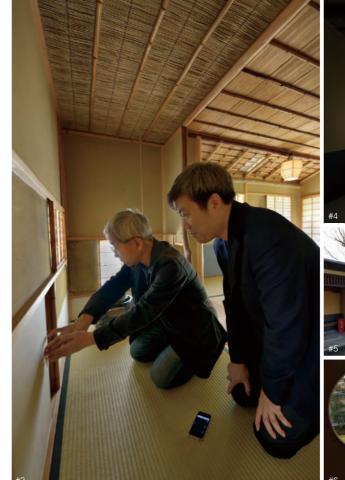
大徳寺の頭塔で、伽藍の南方に位置している。天正 16年(1588) 当時にできた本堂(客殿)と庫裏と、承 応元年(1652) 頃に整備された書院や表門、鐘楼は 現在も残っている。大書院の庭園「直中庭」は、千利 休が66歳のときに作庭したと伝えられている。

大徳寺 孤篷庵 見学

大徳寺の伽藍の西方に位置する頭塔。小堀遠州が 檀越となって竜光院内に造立した寮舎を、寛永20年 (1643)に現在の地へ移し、客殿、書院、庫裏など を新築したもの。寛永5年(1793)に大半が焼失した が、本堂(客殿)、茶室忘筌、書院が再建された。

茶道資料館 見学

裏千家十五代家元の鵬雲斎千玄室が館長。茶道具の 名品や美術工芸品、歴史的な文書などを展示しており、 茶室「又隠」のうつしの内部を見ることもできる。入館者 には呈茶を行い、自分で抹茶を点てる茶道体験コーナー を設けるなど日本文化を体験できる場となっている。













Caption #1~#7 大徳寺黄梅院 #8,9 茶道資料館

宮廷料理 西陣魚新 食事

安政2年創業の西陣の老舗料亭。御所の大礼にお 祝い料理を御用達した由緒ある料亭で、有職(ゆうそ く)司としての伝統を今日まで伝えてきたという京料理 を楽しむ事ができる。

京都生活工藝館 無名舎 吉田家住宅 見学

1909(明治42)年建設。京呉服の問屋街「室町」の 一画にあり、現在も吉田家の主人が住む住宅。建物 は白生地問屋を商った京商家の典型の建物は、平成 11年に歴史的意匠建造物、平成18年に景観重要 建造物に、京都市から指定を受けている。

お茶屋ダイニング 食事 祇園のまちあかり 見学

祇園を愛した歌人・吉井勇氏が宿として過ごした茶屋を改装した京料理店「祇園かにかくに」で夕食。白川に面する窓からは、四季の風景が楽しめる。「切通」など格子の連なる「祇園のまちあかり」を移動時に見学。



Excursion

Caption #10~#12 京都生活工藝館·無名舎 #13 宮廷料理 西陣魚新 #14,15 天龍寺 篩月

|行程 | Road map DAY.02

お宿吉水 宿泊

円山公園内の高台にある100年の歴史を持つ数寄屋造 りの宿。テレビ、冷蔵庫、金庫、室内電話を廃した客室や 無農薬・有機野菜などを使用したシンプルな朝食などで、 京都の自宅にいるような感覚が味わえる静かな宿。

筋屋町・町家宿泊

町家を改装した宿泊施設。京都のまちから減りゆく築 百三十年を経てなお頼もしい柱梁や機能美すら感じさせ るつくり。黒漆喰の土間、内玄関から客間越しに見える 庭、高い吹き抜け。丹波の豆問屋の家族のくらしと家業 を支えた建物で、「町家暮らし」の文化を体験できる。

三浦照明 見学

琵琶湖疎水工事以降、水力発電により京都の町に電 気が通りはじめた頃、電気工事に関わった初代三浦大 二郎が創業。照明器具の製造と販売も手がけた。現 在は和風照明器具に特化、手づくりと自然素材にこだ わった自社オリジナル品を製造、販売している。



Caption #17~19 堀木エリ子&アソシエイツ ショールーム #20~22 興石 #23 お宿吉水

京都屈指の観光地嵯峨嵐山に建つ臨済宗天龍寺派 大本山の寺院「天龍寺」は、「古都京都の文化財」とし て世界遺産に登録されている。その敷地内にある『篩 月』は、鎌倉時代・禅宗の教えとともに中国から伝えら れた精進料理を振る舞う天龍寺直営の精進料理店。

堀木エリ子&アソシエイツ ショールーム 見学

リジナル和紙を制作する堀木エリ子&アソシエイツの ショールーム。新しい和紙の可能性や魅力を根底に、 人から人へ、場所から場所へ、時代から時代へ、文化

興石 見学

数奇屋建築の中村外二工務店の設計および建築施工 会社。1988年に指物部と家具部を開設。木の温もりをこ よなく愛し、木の特性を知り尽くし、木工技術をアートの域 にまで昇華することに秀でたふたつの国、日本とデンマーク の多彩な造形と深い味わいのある家具も扱っている。



「建築空間に生きる和紙造形の創造」をテーマに、オ 的なネットワークを拡げていくことを目的としている。

フェアウェルパーティ Light is Wonderful!!

Farewell Party "Light is Wonderful!!"

日本科学未来館 1階にある「シンボルゾーン ジオ・コスモス」では、ENLIGHTEN ASIA IN JAPANを締めくくるIALD JAPANによる 最後のイベント、「Farewell Party – Light is Wonderful!!」が開かれた。IALD会員 である日本国内の照明デザイナーを中心に、 同協会のケヴィン・セオバルド会長やセミナー に登壇した海外の照明デザイナー、同協会 の活動を支援する団体や照明メーカーなど が顔を揃え、数多くの参加者がイベントの成 功を祝うパーティーを楽しんだ。

ケヴィン・セオバルド会長は、大きなイベントが 開催されたことへの喜びと感謝を語り、さらに 「はじめて日本に来た。3日間を通して興味 深く感じたことは、日本と西洋では、照明に対 する考え方に若干の違いがあったことだ。日

本のライティングデザインに非常に可能性を感 じた」と語り、日本支部の活動と照明デザイナ ーの活躍に期待を寄せた。

パーティーでは、日本文化や照明効果へのこ だわりが感じられる演出が続けられる。まず、 世界の舞台で活躍する金沢の女流太鼓チー ム「炎太鼓」による力強い和太鼓の演奏から はじまった。面出薫氏が新内流しと共に会場 を練り歩き、自ら新内節を披露するという一幕 もあった。1980年代のはじめにIALDの会 員となった石井幹子氏は、着物姿の11名の 女性照明デザイナーと共に登場し、乾杯の発 声を行った。それぞれのデザイナーの華やか さと明るい表情からは、女性照明デザイナー の活躍の場の広がり感じさせた。後半は、同 会員の長町志穂氏と松本浩作氏が参加する

バンド「光もんドリアン」が、30分間に渡る演 奏で会場を盛り上げた。終盤に差しかかり、 富田泰行氏のかけ声で三三七拍子を行うと、 会場が一体感に包まれ、IALD会員の表情 には充実感が満ちていた。

Caption

- 日本科学未来館が照明デザイナーの手によって、 1日限りのパーティ会場となった。
- 面出氏による新内流しの披露の後に、IALD 会長ケヴィン・セオバルド氏による挨拶。そして 石井幹子氏と女性照明デザイナーによる乾杯。
- #9~11 富田泰行氏による中締め。長町志穂氏と松本 浩作氏が率いるバンド「光もんドリアン」ライブ。 ナカサアンドパートナーズ中道淳氏による記念 撮影の様子。
- #12~14 パーティ会場の様子。日本科学未来館のシンボ ル、ジオ・コスモスはこの日、特別な演出を上映。





IALD JAPAN + LIGHTING FAIR

どんな照明デザイナーになる?

What Kind of Lighting Designer Do You Want to Be?

パネリスト|中島龍興、松本浩作、澤田隆一、大岡直美

スクリーンに映し出された1960年からの光源 の経緯、照明に関するエポック、社会情勢が 盛り込まれたダイアグラム。そこにパネラー各 人が照明デザインの仕事に就いた時期がプ ロットされている。中嶋龍興氏が高度成長期 の60年代後半、松本浩作氏がバブル景気に 湧く80年代前半、澤田隆一氏はバブル崩壊 後の80年代後半、大岡直美氏は2000年。

なぜ照明デザイナーに?

まずは、照明の世界へ進むきっかけについて、 中島氏から語った。「大学3年で参加した、 船で東南アジアを一周するツアーで、荒くれた 外洋から香港に入港したとき、超高層ビルか ら頭上に降り注ぐ光に感動しました。次に、 赤道辺りで巡り合った満月と満天の星。これ らの経験で照明に関わる仕事をしようと決め ましたし。

デザインに興味をもって大光電機に入社した 松本氏。「特注照明器具をデザイン・製作す るTACTに在籍していました。ある現場で組 み上げた照明に点灯した瞬間、職人さんたち から拍手喝采を浴びて……。それから照明 に目覚め、はまっていきました」。

澤田氏は、美大の学生だった頃に、趣味の写 真撮影から光に惹かれていった。「自然の光 はつくれないから、照明器具をつくろうとヤマ ギワのTL研究所に就職しました。ある日、自 分が描いた天井伏図が実際に空間となった ときに、光だけがふわーっと降ってくるシーンに 感激。いまでも続けているわけです」

舞台美術や舞台照明を学びたいと大学に入 り、4年間、空間と光に向き合った大岡氏。「す でに照明デザイナーの職種は広く認知されて いました。ところが就職難で、4年生の2月に ようやくトミタ・ライティング・デザイン・オフィス に入れたんです」。

夜はもとより、昼の照明も考える

次に、照明の歴史におけるエポックが示され た。「第一次オイルショックでは、照明=電気・ 石油の無駄遣いとされ、道路照明の間引き点 灯やライトアップの自粛などが行われた」(中 島氏)。バブル期になると「高効率の照明を 使えば省エネ、という感覚でした」(松本氏)。 好景気で価値観が変化し、過去の負の経験 をリセットしてしまったようだ。

「90年代から照明デザイナーの考える光が 台頭しはじめた。それがメーカーの技術ア ップに拍車をかけ、現在はLEDが全盛。新 技術をいかに空間に生かすか、メーカーに フィードバックしつつ、10年後、50年後も デザイナーとメーカーの関係は継続するだ ろう」と中島氏は語る。「人間の身体に与え るLEDの影響も科学的に解明されつつあ る。芸術と科学のバランスでデザインしてい くべきしとも。

「これまでは夜の外観や外構をどう照らすか、 という軸で光はデザインされてきたけれど、日 中に屋内にいても人工光は必要。建物全体 を視野に、昼の光のあり方についてもっと掘り

下げて、昼の照明デザインにも力を入れなけ ればしと大岡氏が話をまとめた。

Panelists

中島龍興

中島龍興照明デザイン研究所/東京都生まれ。東海大学 工学部光工学科卒業 ヤマギワ株式会社入社、LDヤマギワ 研究所、TLヤマギワ研究所所長、ハロデザインを経て 1998 年中島龍興照明デザイン研究所設立、代表取締役。

松本浩作

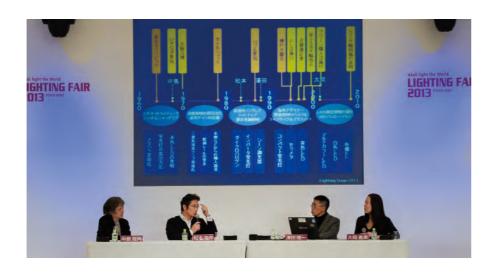
有限会社スタイルマテック・松本設計室/1961年香川県高 松市生まれ、九州産業大学 芸術学部デザイン学科卒業。 大 光電機TACTデザイン室、木谷デザイン事務所取締役ディレ クターを経て、1998年 スタイルマテック設立。

澤田隆一

有限会社サワダライティングデザイン&アナリシス/1964 年福岡県生まれ。武蔵野美術大学造形学部空間演出デザ イン学科卒業後、2004年有限会社サワダライティングデザ イン&アナリシス設立。住宅照明から建築照明、都市・環境 照明の分野まで幅広い照明デザインを手がける。

大岡直美

株式会社 トミタ・ライティングデザイン・オフィス/武蔵野美 術大学造形学部空間演出デサイン学科卒業。トミタ・ライティ ングデザイン・オフィスのチーフデザイナーとして、照明計画、 照明デザイン、照明コンサルテイションに携わる。主な担当 プロジェクトは女神大橋、五稜郭タワー、GRANTOKYO、 三井住友銀行本店ビル、AKASAKA K-TOWER、大手 町フィナンシャルシティなど。



Lighting Design Session

暮らしの未来

Future Living

パネリスト | 松岡恭子、松下美紀



建築をめぐるブリッジング

「私は建築家です。人が生活する場を設計 するのが仕事です。しかし建築家のポテンシ ャルはそれだけではありません |とはじめる松 岡氏。氏は建築家に必要な3つのブリッジン グを提示した。1. 人と建築をつなぐブリッジン グ。2. 人とデザインのプロをつなぐブリッジン グ。3. プロとプロをつなぐブリッジング。

「建築家の話は難しい。一般の人に理解でき る言葉を使っていないんです。また海外では 小さい頃から建築について勉強しますが、日本 ではそういう土壌がない。だから、日本ではま だ使える名建築がどんどん壊されていく。建 築が理解されていない。プロが分かっている だけでは駄目なんです」と語る。人びとが建築 を好きにならないと同じことの繰り返しとなる。

氏は2009年から3年かけてイベントを開い た。九州の建築を一般公開し、実際に見ても らう。建築を好きになってもらうきっかけ、人と 建築をつなごうというイベントだ。そのために NPOを立ち上げた。その中で、人とデザイン のプロをつなぐブリッジングとして、スマートフォ ンで建築のデータが手軽に手に入るようにす る。もちろん建築だけでなく照明のデータなど も引き出せるようにしたい。デザイナーからの 押しつけではなく、建築に興味をもってもらうた めのものだ。

プロとプロをつなぐブリッジング。過去に手が けたバスのデザインを例に挙げる。都市の景 観としてバスをデザインしようというものだ。「さ まざまな分野のデザイナーが6人が集まりまし た。これをきっかけとして別の町のバスやバ ス停のデザインにもつながったんです。バス 停は子供たちのコミュニティーの場でもあるん です。場をつくることこそ建築家の仕事だと 考えます」。北九州空港道路橋では土木とコ ラボレートした。完成までに13年かかったそ うだ。建築家は他分野とコラボレートすること でよりよいものをつくることができると言う。

照明をめぐるブリッジング

松岡氏と同じ〈福岡を拠点とする松下氏。「福 岡は3,500kmくらいだったら隣の町に行くよ うな感覚です。私は20年ほど前からアジア の仕事をしています |と語る。

歴史とつながる。重要文化財をライトアップす れば、それを見に来る人がいる。それが別の 人へとつながっていく。「歴史とつながれば、 人と人もつながるんですし。

学校とつながる。「学校建築での仕事では、 教育という面だけではなく、照明デザインを 通して学校の個性を引き出そうと考えてい ますし。

市政とつながる。「たとえば街灯照明の計画 をするとします。いかに安全を確保するかと 同時に、10年後に町がどうなっているかを見 据えなくてはなりません」。

自然とつながる。「安全を確保するには、ま ず明るくすること。ところが自然にとってはと ても厳しい環境になる。どういうガイドライン をつくって自然とつながっていくかが重要な んですし

時間とつながる。「人間は移動する動物で す。ですから光のサインで案内してあげる。 時間と時間をつなげるんです。

浄土とつながる。「人間は必ず亡くなります。 そうすると社寺のお世話になるわけです。社 寺のライトアップは『浄土』とのつながりを意識 してもらうことができますし。

照明デザインはたくさんの「つながり」をつくる 仕事である。「窓あかりのことを考えてくださ い。それは室内を照らす光というだけではな く、街を照らす光でもある。小さなあかりが街 とつながっているんです。



Panelists

松岡恭子

株式会社スピングラス・アーキテクツ/ 1987年九州大学卒 業。1990年東京都立大学大学院、1991年コロンビア大 学大学院修了。敷地の個性を引き出しつつ既存の枠組み にとらわれない魅力的な空間を、国内外の数多くの集合住宅 を通して提案、実現してきた。その活動は建築だけにとどまら ず、ミリメートル単位からキロメートル単位を横断し、生活に身 近な家具から大規模な土木構造物まで、普段建築家が関わ らない分野も手がける。人びとの暮らしを支える環境の多方 面でのデザインを繋ぎつつ、優れた都市景観を形成していく 試みを積み重ねており、大学での教鞭はもとよりさまざまな場 所でその概念と手法について講演している。

松下美紀

株式会社松下美紀照明設計事務所/ 1989年 松下美紀 照明設計事務所を設立。日本全国のプロジェクトへ参画し、 重要文化財の照明デザイン、国立公園やまちの照明ガイドラ イン制作、教育施設、文化施設、医療施設、交通機関から商 業施設まで幅広い分野の光環境を創出している。1993年 より、タイ、韓国、中国、台湾など福岡を中心に約3500km圏 内のアジア諸国における照明デザインも数多く手がける。ま た、照明デザインに関するアドバイザー、審議会委員、大学の 講師を務める。

Lighting Design Session

IALD JAPAN + LIGHTING FAIR

日本古来のひかり

Lights from the Ancient Times in Japan

パネリスト|新木直人、近田玲子、野澤寿江

この世とあの世の境に宿る美意識

日本人は日の光に対して、「無意識のうちに 感謝しながら、底知れぬ大きな神秘の力に畏 怖の念を抱いていた。日と日蔭を常に感じ、 陰影の濃淡から美意識が生まれることを私た ちの祖先は知っていたんです」と新木氏。

森羅万象に神々の御霊が宿るという。物理 的なモノにかぎらず、事象であっても同じこと。 夜にも夜の御霊が宿る。それは言葉の表現 にも表れており、たとえば「逢魔(おうま)」は、 日が落ちて薄暗くなり、人の顔や目の前のモノ が見えづらい時刻のことを指す。このときに 外で誰かに行き会ったときには挨拶もしくは声 をかけ、怪しい者ではないと表明することが 大事なのだそうだ。夜明け時は「かわたれ」 (彼は誰)と問い、夕闇がせまる時は「たそが れ」(誰ぞ彼)と問う。それがそのまま時を表 す言葉となる。明と暗の境界にある時間にま でふくよかな日本語をあててきた。

色にも同様に奥深さがある。「はねず」は生 命が発祥する瞬間を予兆することを示し、生 まれたばかりの命の色をいう。そして、太陽 が地平線上に現れる際の、紅梅色に近い朱 の色も「はねず(朱華)色」*1。闇から光が生 まれる。聞く、感じる世界から、見る世界へ移 行するときに感じる瞬間の光の色である。

最後に新木氏は、天岩戸の神話を引き合い に出した。光の国へと現れたアマテラススメ

オオミカミがふたたび闇の国に戻れなくするた めに、フトタマノミコトがシメ(占める、標とする) クリ(括る、結ぶ、閉じる)ナワ(縄)、いわゆる 注連縄を天岩戸に張った。このエピソードが 物語るのは、日本人の極(きわ)への関心の高 さ、光と陰の結界に対する機微なのだ。

心にしみいる奥深さと繊細さ

続いて、近田玲子氏が、これまでに心を打た れた光にまつわる体験を、写真とともに紹介。 ①はねず色、②影富士/富士山を「陰」とし て従える「日の出」、③熊野古道/「気」が漂 う深山の曇天の空、④イランのバザールの明 かり取り/太陽光によるスポットライト*2、⑤ロン シャンの礼拝堂の神秘性/分厚い壁に空け られた窓から差し込むわずかな光のグラデー ション#3、⑥月光/平安~東山文化における 月光への憧憬/日本人の白色指向、⑦⑧自 らが照明デザインを手がけた首里城/白い 光を使って精神性を表現#4。

まるで極小の光の粒が散りばめられたような 密度の高い光、暗がりでこそ感得できる太陽 光の恵み、冴え冴えとしながらも抑制の効い た光など、近田氏がセレクトした写真には日本 人らしさがこよなく含まれていた。

その後のディスカッションで近田氏は、香淳皇 后(昭和天皇の皇后)の通夜で、真っ暗な部 屋で無言で過ごした体験を通し、光は「見る」

よりも「体感」するものだと語った。「光と闇は グラデーションでつながっている。目に明るく 映る光も、視覚だけでなく、闇の延長線におい て身体で感じていると確信した」。

光があってこその陰であり、陰があってこその 光。その境界にある微妙な差異をつかみ取 り、愛でてきた日本人の感性。煌々と表層を 照らす光でなく、闇が背景にあることを感じさ せるような、奥行きのある光は現代でも体感で きるだろうか。

Panelists

新木直人

賀茂御祖神社(下鴨神社)宮司/1937年京都市にて生ま れる。2002年より現職。京都市伝統行事伝承者。京都 市伝統芸能功労者。全国一の宮会会長、京都ユネスコ協 会理事他を務める。主な著書に「神(かん)游(あそひ)の庭 (ゆにわ)|(経済界)「葵祭の始原の祭り-御生(みあれ) 神事・御蔭(みかげ)祭を探る」(ナカニシヤ出版)など。

近田玲子

株式会社近田玲子デザイン事務所/東京藝術大学卒業。 近田玲子デザイン事務所代表。東京藝術大学非常勤講師。 九州国立博物館、早稲田大学大隈記念講堂改修、2000年 の九州・沖縄サミット首里城の景観照明などを手がける。国 際照明デザイナー協会賞、北米照明学会優秀賞など受賞。

野澤壽江

株式会社近田玲子デザイン事務所/日本女子大学住居学 科卒業。TLヤマギワ研究所を経て近田玲子デザイン事務 所取締役。川崎市都市景観審議会委員。東京芸術劇場、 スカイホール豊田、埼玉県立武道館、ミューザ川崎などを手 がけ、北米照明学会優秀賞など受賞。









Lighting Design Session

開していく。

まず遊ぶ

インテリアでランドスケープで照明デザインは何をする?

How Does Lighting Design Work with Interiors and Landscapes?

パネリスト|志村美治、団塚栄喜、東海林弘靖

サンダーバードのテーマにあわせてパネリスト

の3氏が登場。志村美治氏も団塚栄喜氏も、

東海林弘靖氏とのコラボレーションが多い。5

つのキーワードで「コラボレーションの術」を展

「つまり、楽しみながらやる。楽しんで試行錯

誤していると『これだ』というものが見つかる

と東海林氏。「打合せも楽しみながら。団塚

さんとの打合せは決まって夜。打合せ後は

すぐ飲んじゃう。志村さんは朝型。だから朝

シャンを取り入れたらどうかと」。朝からシャン

パンを飲みながら打合せするという冗談。そ

れくらいの遊び心を持とうということ。



東海林氏は午前2時頃、照明をローエンド(こ れ以上暗くできないぎりぎりの明るさ)にして酒 を飲みつつ思いつきをメモすると言う。一方、 メモをとらない団塚氏。「外出している時にア イデアが出る。すぐにスタッフに電話してメモ を頼んでしまう」。同様に記録はスタッフに任 せる志村氏。「帰り道にスタッフと話をする時 にアイデアが出たりする。それを記憶しておく のがスタッフの役目 |。いずれも仕事モードか ら切り替わった時にアイデアが出てくるようだ。

Hentaiのススメ 「プロのこだわりは、新しいものを築く礎。その こだわりこそ『Hentai』」と東海林氏。団塚 氏も「こだわり過ぎて、つい徹夜。スタッフも同 じ。そういう『Hentai』的な作業から新しい ものが見えてくる」と答える。志村氏は「現場 へは裸で。皮膚感が大事だから。素材と皮 膚、光と皮膚。優しい空間は皮膚からも安心 できる」と言う。「Hentai」をちゃんと仕事に

フィリップ・スタルクは百姓だ

スタルク氏の講演に行った東海林氏。すると 隣から「なんだ、百姓だ」との呟き。「さぞや 洗練された人が出てくると思ったんでしょう。 失礼だがスタルク氏は洗練されているとはい えない外見。それを『百姓』と一言で表した」。 デザインはひとりよがりになりがちで難解になっ ていく。「『百姓』って何なのか分かりやすい。 デザインも『百姓』であるべき。分かりやすい デザイン、分かりやすい言葉」と東海林氏。

向けているのかが大事と志村氏は語った。

団塚氏は「無人島に家をつくりたい。この3 人でいっしょにデザインして」と語る。東海林 氏は「ローエンドの光のバーをつくりたい。そ こでクリエイターがメモを前にして酒を飲んで いるようなバー」。志村氏は「コラボレートから 『夢』は生まれる。複数の人間が感性を共 有することから夢が生まれる」と言う。

デザイナーとサンダーバード

「設計やデザインというのは『難題』なんです。 『難題』に立ち向かうのは『サンダーバード』。 サンダーバードの隊員、つまりデザイナーたちが 力を合わせて難題を解決する」と東海林氏。そ こへアラーム音。「お。難題の発生だ!」。ふ たたびサンダーバードのテーマで3氏が退場。

Panelists

志村美治

フィールドフォー・デザインオフィス/1954年神奈川県鎌倉 生まれ。 武蔵野美術大学 大学院 造形研究科修了。清水 建設株式会社 建築設計本部勤務、チャダ、シィエンビエナア ソシエイツ勤務を経て、1989年よりフィールドフォー・デザイ ンオフィス常務取締役デザインディレクターを務める。主なプ ロジェクトに博報堂健康保険組合河口湖保養所、日本HP 本社、デンタルプラザ福岡など。SDA賞、JCD賞、JID賞、 DDA賞、インテリアプランニングアワード他多数受賞。

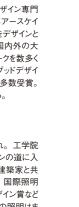
団塚栄喜

アースケイプ/ 1963年大分県生まれ。桑沢デザイン専門 学校卒業後、環境美術研究所を経て、1999年アースケイ プ設立。人と自然との関係性を創りだす仕掛けをデザインと 捉え、体験の媒体となるデザインワークを行う。国内外の大 型施設、レジデンス等のランドスケープ、アートワークを数多く 手がけ、都市景観大賞、SDA 賞、BCS 賞、グッドデザイ ン賞及びグリーン・グッドデザインアワード(米)など多数受賞。 デザインを通した環境活動MHCPも主宰している。

東海林弘靖

有限会社ライトデザイン / 1958年福島県生まれ。工学院 大学大学院修了。建築デザインから照明デザインの道に入 る。光は建築をつくる重要な素材であると信じ、建築家と共 に新しい空間の価値を生み出そうと考えている。国際照明 デザイナー協会・デザイン賞、北米照明学会デザイン賞など 多数受賞。また『デリシャスライティング』 『日本の照明はま ぶしすぎる」などの出版、雑誌への寄稿またテレビ、ラジオへ の出演など照明デザインの啓蒙と普及活動も行っている。





Lighting Design Session

IALD JAPAN + LIGHTING FAIR

照明デザイン界 ふしぎ発見! ~クイズで知る照明最前線

World wonders in Lighting Design

コーディネーター | 長町志穂 バネリスト | 内原智史、田中謙太郎、村角千亜希、武田有左

照明デザインのプロが贈る照明デザインに関 するクイズ。かしこまった講演ではなく、くだけ たTV番組調。ここでは出された問題から2 問だけお出しします。さて、分かりますか?

Q1 イルミネーションを楽しもう

長町志穂(LEM空間工房)

1.9kmにわたって展開される冬の名物になっ ている大阪・御堂筋イルミネーションからの出 題です。さて、この御堂筋イルミネーションに は全部で何球のLEDを使っているのでしょう か。ちなみに街路樹のイチョウは460本です。

Q2 デザイナーの遊び心

富田泰行(トミタ・ライティングデザイン・オフィス) 照明デザイナーは景観照明にメッセージをし のばせることがあります。長崎港に架かる女 神大橋では、橋をつなぐLEDの点滅プログラ ムが12パターンあります。その中に新年を祝 うスペシャルパターンがあります。その特別な 点滅パターンとはどんなものでしょうか。

1. 三三七拍子で点滅 2. モールス信号で 点滅 3. 『長崎は今日も雨だった』のサビの メロディーで点滅

A1 88万球。御堂筋イルミネーションは毎 年12月中旬から1月20日まで行われている。

A2 2. モールス信号。「ニューイヤー」とゆ っくり点滅させている。しかし誰も気づきませ ん(笑)。

ご協力いただきました株式会社コマデンは、 紅白歌合戦などのセットを一手に引き受ける TV効果機材とオペレーションの会社です。 今回はクイズということで「世界ふしぎ発見」と 同じような機材を一式お貸しいただけました。 たいへんありがとうございました。





Panelists

長町志穂

株式会社LEM空間工房/京都工芸繊維大学卒業。京都 造形芸術大学客員教授、京都工芸繊維大学非常勤講師。 「御堂筋イルミネーションコンペ最優秀」「堂島大橋ライトアッ プ。事業プロポーザル最優秀」「照明普及賞」グッドデザイン 賞104点など受賞多数。

内原智史

有限会社内原智史デザイン事務所/1958年京都出身。 1982年多摩美術大学デザイン学科卒業後、株式会社石 井幹子デザイン事務所入所。1995年有限会社内原智史 デザイン事務所設立。光による空間プロデュースを始め、照 明器具から都市景観照明のデザインを手がける。多摩美術 大学非常勤講師。

田中謙太郎

株式会社ライティング プランナーズ アソシエーツ/東京生ま れ。武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン科卒業。 1995年入社。北米照明学会賞、日本照明学会照明普及 賞など受賞。主な担当プロジェクトは、モエレ沼公園ガラスピ ラミッド、KL国際空港、セントレジス大阪、W-ホテル・ソウ ルなど。国際照明デザイナー協会(IALD)会員。

村角千亜希

スパンコール/1972年東京生まれ。1993年女子美術短 期大学造形科・生活デザイン 卒業。1993年株式会社近 田玲子デザイン事務所 勤務。2000年有限会社ライトデ ザイン 勤務。2002年スパンコール設立。 ホテル、サロン、 SPA、レストランなどの商業施設から、個人住宅、集合住宅パ ブリックスペース・ファサード・外構、クリスマスイルミネーショ ン、Exhibition、ランドスケープ街並景観など、幅広い分野で の「光の設計」を手がけている。

武田有左

建築家 +ANET.lab/東京藝術大学大学院 修了。株 式会社三菱地所設計勤務ののち2005年より+ANET lab. 主宰。工学院大学非常勤講師。日本建築学会、日本 建築家協会、都市環境デザイン会議 会員。主な受賞歴 に第4回 屋上・壁面・特殊緑化技術コンクール 壁面・特殊 緑化大賞 国土交通大臣賞 。日本建築家協会優秀建築 選「ADK松竹スクエア(2005) | 「二番町ガーデン(2005) | 「二番町心法寺客殿/庫裡(2007)」「石神井公園ふるさ と文化館(2011)」など。



ROUNC Table ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN を通して伝えたかったこと

What We Wanted to Convey Through ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN

中島龍興、近田玲子、東海林弘靖、松下美紀、岡安泉

Tatsuoki Nakajima, Reiko Chikada, Hiroyasu Shoji, Miki Matsushita, Izumi Okayasu



ENLIGHTEN ASIA IN JAPANの全てのイベントが終了後、あらためて参加したメンバーによる座談会が開催された。 日本の照明デザイナーが集まって開催されたはじめてのイベントはどのようなものだったのか? 異なる立場で関わったメンバーからは、「アジア感覚の光」に対する課題から照明デザイナーの定義まで、さまざまな議論が交わされた。

本日はENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013 (以下ENLIGHTEN ASIA) に関わって いただいた皆様にお集まりいただきました。異 なった立場で関わられたと思うのですが、それ ぞれの視点でENLIGHTEN ASIAを振り返 ってみていただけますか。

東海林――一言で言えば、「疲れた」(笑)。 会期の4日間はあっという間に過ぎてしまった んだけれど、準備が大変だった。期間も長か ったし、やるべきことも多かったから。無事に 終了して、よかったなという安堵の意味を込め ての「疲れた」です。言うことはいっぱいある けれど、まずは。

近田――それだけ?何も言ってないじゃないの。 **東海林**――いや、話しはじめると長くなるし、 キツいことも出てくるかもしれないから。

近田— ずるいのね(笑)。私は一番最初の

準備会から参加していました。「よし、これで やろう」というところにいくまでが、けっこう長か ったんです。やると決まってからは、手分けも 早く、どんどんと進んでいきました。手分けし た仕事が、担当者にぴったりはまっていたとい うのもあります。「やる」と決まるまでに、みん なが自分の意見を好きなだけ言ったのがよか ったんだと思います。だいたい、多数決では 「やらない」ほうに票が集まっていたんです。 もし今年このENLIGHTEN ASIAをやらな かったならば、個々のデザイナーが自分たち を磨くことはできても、照明デザイン界全体を 磨くことはできなかった。IALD JAPANとして みんなでやったことは個にもちゃんと戻ったよう な気がします。

中島――準備段階にはほとんど携わってい なかったので、なぜ私がこの座談会に呼ば れたのか、よく分からないのです(笑)。そ

のため第三者的な意見になってしまいます が、今回のこのイベントは予算も時間も限ら れた中で、よくここまでやったと感心しており ます。セミナーやパネルディスカッションなど の中で私はひとつしか参加しませんでしたが、 パネルディスカッションを聴きに来てくれたある 方が、このENLIGHTEN ASIAのパンフレッ トに載っている照明デザイナーたちを見て、こ んなに照明デザイナーがいて仕事があるの ですか、と聞いてくるんです。良くやっている 人と何とかやっている人もいると思いますよと 答えました。私なんかぎりぎりやっているほうだ けれど(笑)。来場してくれた方たちも、これだ けの照明デザイナーの仕事を見て、その成果 に納得してくれたと思いますよ。

岡安――準備に関わっていないという点で は、中島さんと同じです(笑)。セミナーにひと つ参加させていただいたんですが、実際に

今でも照明デザイナーは器具をデザインするのだと思っている人は多い。 職能としての呼び方もはっきりしていない。照明コンサルタントとか、 ライティング・コンセプターなどと言ったりもして、違いがよく分からない。

Keyword



会場に来てみて、これは準備を手伝わなくて 損したな、と痛感しました。同じ照明デザイナ ー同志でひとつのテーマについて語り合うと いうのは、酒の席ではあるにしても、素面でし かも聴衆はいるし、なかなか緊張感のあるも のでした。

アジア感覚の光は見えましたか?

── ENLIGHTEN ASIAでは、「アジア感覚の光」がテーマとして挙げられています。参加された皆さんは、その光がどのように見えましたか。

東海林 ないですね。たぶん、みんなないと思う。「アジア感覚の光」を提示するイベントではなく、そこへ向かう第一歩のイベントなんだよね。まず、日本に近いアジアからの参加者がなかった。たとえば中国から、もっとバリバリの若手デザイナーが参加すべきだった。もちろん、日中関係を念頭におかなくてはいけないのですが。だから、今回は第一歩、やっとスタートラインについたと言うべきでしょう。「Asia」としたのは、IALDのグローバルな観点から見た時に「Japan」では狭すぎるのではないかと思ったからです。

岡安 東海林さんの言われるとおりですね。照明の世界は、デバイスが劇的に変わっていく中にあります。新しい技術を使って表現していくものと、今まで培ってきた表現と、両方合わせて日本の光、アジアの光になっていくんだと思います。そういう意味でも今後のための第一歩だった。

中島――「アジアの照明デザインショーケース」というシンポジウムがありました。面出薫さんがモデレーターで、5人の外国人デザイナーがアジアでの作品を紹介してくれて、とても興味深かったです。しかし「これがアジアの光」というものではなく、やはりインターナショナ

ルなデザインになっていたように思いました。 また、日本も含めてアジアなのに、特に欧米の 人たちはどこか中国的な光を「アジアの光」と 受けとめているのではないでしょうか。理解し てもらうには、やはり時間をかけていかなくて はならない。

近田 出てくるものにそう差があるとは思っていませんでした。むしろ、何に興味を持っているのか、何を考えているのかが重要だと思いました。今回のイベントではいろいろなことが分かりました。ルイ・クレアさんが中国のプロジェクトを手がけた際、彼は彼の考える中国の光を表現しようとしました。しかし、それは中国の人に受けいれられなかった。照明の観点からいえば、中国はまだまだかもしれません。しかし、中国の人たちだってちゃんと自分たちの求めている光を持っている。そういうところに形だけ持ち込んでも駄目なんだということも分かって、面白かったです。

松下――私は20年前から東アジアの仕事を しており、そういう視点から、最後まで「アジア 感覚の光」というテーマに抵抗があったんで す。アジアと一言でくくるのには無理がある。 サッカーのワールドカップ・アジア予選に出てく る国の中には、日本がアジアだと思っていない 国がいっぱいあるでしょう。私たちのイメージ するアジアは東アジアではないかと。西アジア や東アジアなど多様な国の集まりがアジアの 総称です。だから「アジア感覚の光」と総括 的にまとめてしまうのはどうなのかな、と思って いました。だから、私はイベントとしてのEN-LIGHTENは ASIAではなくENLIGHTEN JAPANで、IALDが IALD ASIAはどうか と提案したくらいでした。しかし4日間の会期 を終えた今、それらすべての問題を飛び越え て「アジア感覚の光」でよかったと思っていま

す。どのセミナーも内容が濃く、はじまる直前 までの悩みが拭い去られたようです。

一アジア、特に東アジアは経済分野だけでなくデザインの面でもスピードが速い。 ENLIGH TENJAPANといって日本だけで小さくまとまってしまうと、そのスピードについていけず、おいていかれてしまう。だから、ENLIGHTEN ASIAと広い視点にしたんですね。

照明デザイン界

── 照明デザイン界、デザイナーの側だけではなくメーカーまでも含んで、これからどうしていけばいいと思われますか。

東海林――まず、照明デザイナーの定義をし ておきたいと思うんです。今回、セミナーに出 てくれたザン・シンさんが言っていたんだけれ ど、一説によると中国には20,000人の照明 デザイナーがいるんだと(笑)。正確に言うと、 それは「照明に関わる人」の数なんですね。 日本では、IALDの会員になっているのは70 人です。IALD全体で約700人ですから、1 割が日本です。ただ、その70人しか照明デ ザイナーではないのかというと、それは違いま す。照明デザインに携わっていても、IALDの 会員ではない人の方が多い。そうすると、照 明デザイナーは70人の何倍にもなる。IALD では照明メーカーで働く人はIALDのメンバ ーにはなれないんです。照明器具の製造・ 販売に携わるものは会員にはなれないと謳わ れています。IALDの定義を線引きにすると、 日本では70名が該当するわけです。資格を 満たしていても会員にならない人もいるでしょ うけれど。メーカーの内部にだって、インハウ

スのデザイナーとしてちゃんとやっている人は 大勢います。コンセプトだって同じようなものを 打ち出してくる。では、なぜなんでしょう。ここ にもうひとつ照明器具をつけるかどうかという 選択を迫られた場合、メーカーのデザイナー はほぼ間違いなく付けるほうを選ぶというんで す。所属する会社にメリットがあるから。そう いうスピリチュアルな部分まで考慮して、照明 デザイナーを定義しなくてはいけない。

中島 照明器具のデザイナーは会員になれないのですか?

東海林 照明器具のデザイナーについて のことには触れていませんでしたけれど、そこ から製造・販売へとつながる部分でどうなっ ているのか審査があるんでしょうね。

中島 今でも照明デザイナーは器具をデザインするのだと思っている人は多いですよね。 職能としての呼び方もはっきりしてほしい。照明コンサルタントとか、ライティング・コンセプターなどと言ったりもして、違いがよく分からないです。

東海林――私にも分からない(笑)。建設とい

う枠の中で考えると、照明に関する責任者=コンサルタント。やっている仕事はデザインなんだけれども、そのデザインがちゃんと形になるように指示をして責任を取るからコンサルタントなんでしょう。IALDの非会員では、照明デザインに関する報酬をデザイン・フィーではなく、照明器具のバックマージンという形をとっている人も多くいます。IALDでは、ちゃんとした設計料にしようとしています。

松下 照明は学問でもあります。皆さんも学校で教えたりされたりしていますよね。私もいくつかの大学で教えているんですが、照明学なのか照明デザイン学なのか、照明計画学なのか。大学によってみんな違うのです。やはりIALDのような組織でちゃんと定義をしていかないと、学問として文科省が認めてくれません。照明デザイナーになりたい人はたくさんいます。でもビジネスモデルとしてどう広げていけばいいのかが分からない。学問として成立する分野にならないといけないんですよ。

中島――たとえばインテリアデザインの分野も



ble What We Wanted to Convey Through ENLIGHTEN ASIA

<u>Keyword</u>

まず、日本の照明デザイナー70人、あるいはその何倍か。 その数字がもっと増えていってほしいと思うんです。 照明デザイナーの数が増えるということはどういうことか。 単純に言えば、経済の中で照明の占める割合が増えるわけです。

そうですよね。建築士と違って国家資格がない。分野内が体系づけられていないように思います。照明デザイナーとは何か、というのはおそらくインテリアデザイナーとは何かというのと同じようなことなのでしょう。

岡安――私の場合、事務所名に照明設計

事務所とつけていますが、少々ジャンルの違

うデザイナーとしてくくられることが多いようで (笑)、ユーザーが幸せな気持ちになれば、 趣味的なものに走ることもありますし、お金を 取りはぐれることもあるし。松下さんの言われ るビジネスモデルとはもっともかけ離れたとこ ろにいるデザイナーかもしれません。学問とし て体系づけることには大賛成なんです。重要 なことだと思います。ただ、そこで照明のこと を学んだ、ビジネスモデルのことを学んだ、そ れで誰もが照明デザイナーとして成功できる わけではない。デザイナーとしては、その先に 何かもうひとつステップが必要じゃないでしょう か。先ほどインテリアデザインの体系化ができ ていないという話がありました。誰がインテリア デザインをやったっていいような状況です。照 明デザインの体系化をはっきりとさせておかな いと、誰もが照明に手を出して何が何だか分 からないようなことになってしまう状況になって しまうのかもしれない。それを避けるのがいい のか、ボーダレスの状況のほうがいいのか。 体系化することでボーダレス化が避けられる のかどうかも分からない。

近田 現在は二極化している状況だと思うんです。ひとつは照明デザイナーが自分のジャンルをどんどん外に広げていくというケース。もうひとつは、大きな組織が、光のコントロール、照明デザインをちゃんとやっていくという方向。ことに巨大プロジェクトの場合、照明デザインは巨大なものになると、他のジャンルと連

携してちゃんとやっていかなくてはならず、それを統括する能力が必要になります。ボーダレスではとてもできない規模です。私たちのような小さい事務所では個性でやっているわけですから、むしろボーダレスの領域に侵食して個を発揮していかなくてはならない。

建築も同じような状況になっています。巨大プロジェクトはゼネコンか大手事務所。個人名が出るものはほんの一握りです。個人でやっている建築家は、住宅か小さな商業施設、インテリアをやっているという状況ですね。一方、インテリアデザインの場合、昔は職人技が光っていた世界でしたが、質が落ちるけれど安い中国製や東南アジア製をとりいれるようになってしまった。経済のことを考えるとしょうがないというかもしれませんが、インテリアの世界が希薄なものになってしまった。

東海林――まず、日本の照明デザイナー70 人、あるいはその何倍か。その数字がもっと増えていってほしいと思うんです。照明デザイナーの数が増えるということはどういうことか。単純に言えば、経済の中で照明の占める割合が増えるわけです。それと同時に幅を広げていく。アーティスティックな方向に向かうデザイナーもいるだろうし、エンジニアリングの方向に向かうデザイナーもいるというように。何がいいか悪いかという前に、社会の中での照明デザインの価値を認めてもらうことが必要なのではないか。数を増やしてフルイにかけるのではなく、数を増やしてまずフルイにのせるという段階なんです。

近田 私は今、IALDでプロフェッショナル メンバーシップ・コミッティの委員をやっていま す。より優れた仕事をしている会員をプロフ エッショナル会員として認定しようというものです。世界中の会員から応募があります。作品のボートフォリオを見ると、見映えがするのは、なんといっても巨大プロジェクトです。どういう人たちがやっているかというと、たいてい大きな照明コンサルタント会社のシニア・デザイナーやディレクター。一方で、小さな事務所、ひとりでやっているような人のものは残念ながら規模も小さく見映えがしない。ただし、チャンスがないわけじゃない。最近はリノベーションのプロジェクトがずいぶんと増えています。そこでは、大規模プロジェクトではできない、個性を出した光の演出ができるように思います。

光を伝える言葉

東海林 照明デザイナーが事業主から直接依頼を受けるケースは増えてきています。 照明デザイナー、インテリアデザイナー、ランドスケープ・アーキテクト。この3者への直接指名はぐんと増えています。もちろん今まで通り、建築家から声をかけていただくケースが一番多いのですが。

松下 私の場合は、直接クライアントからの 指名頂くプロジェクトが多いです。光に対して 興味を持ち、建築家やコーディネーター任せ にしないで照明デザイナーを選んだというだ けで、そのクライアントはレベルが高いと思い ます。プレゼンテーションにしても話をよく聞い てくださり、理解してくださいます。

中島 プレゼンテーション以前のコンセプトづくりの問題なのですが、中国のデザイナーから聞いた話ですが、はじめにCGで見栄えのする絵をつくってしまう。すると多くの場合、見た目その絵に近い照明がメーカーなどの協力ででき上がってしまう。日本も同じよう

な状況になりつつあるのでは、と心配しています。一般の人は照明の心理や生理的などプロフェッショナルな部分まで見ませんから、ある意味、CGは分かりやすいのかもしれませんが。

一インテリアデザインも同じようなケースがありますね。 CGパースを描いてそれを工務店に渡せば、あとは何とかしてくれるというような。 日本の工務店は優秀ですから、できちゃうんですよね。

岡安 建築家とか建築の名前がまずあって、照明は付属品扱いというのを苦々しく思っているんです(笑)。いい建築にいい照明デザインが施されるというのが一番いいわけです。でも必ずしもそうとは限らない。どうしようもない建築やインテリアだってあるわけです。そこにバッグンの照明デザインが入って、驚くほどすごい建築空間に生まれ変わるということはあるわけですよね。そういったものをアーカイブにできないだろうか。つまり建築に寄り

添わない、純粋に照明についてのアーカイブ。 評価軸があって、この照明の評価は各軸で こうなっているからカッコいい、みたいな。モノ をつくっている側も、評価の低いところが分か ればそれをどうカバーすればよいかというのは 負担が少ないんじゃないでしょうか。

東海林 照明の価値とか世界観を言葉に置き換えるための体系をちゃんとつくる必要があるのではないか。たとえばワインのことを考えてみると、もともとは地元でつくったワインを地元やその周辺で消費するというのが当たり前だった。ワインがこれだけ日本中で飲まれるようになったのは、実は1980年頃からなんです。ワインが広まるためには、ソムリエの存在があります。そのワインの価値を言葉に置き換えて伝えてくれる。「このワインの色はレモンがかった麦色」とか「ほんのりブラウンがかったオレンジ色」なんて表現をします。これも意味があって「ほんのりブラウンがかったオレンジ色」と表現されたワインがカベルネ・ソーヴィニョンなら酸味が強いことがわかる。味

や香りも同じように、言葉によって個性や価値を表現できる。照明はどうでしょう。明るい暗いということではなく、どのように明るいのか暗いのかを伝えなくてはいけない。心地よい明るさなのか、イライラするような明るさなのか。一般の人は「明るいのはいいけれど暗いのはだめ」という判断基準しかない。「心がほぐれるような暗さ」というのは暗いことをプラスに評価している言葉でしょう。色温度を説明するにも、何ケルビンというのではなく、電球の色ですよという。

松下 言葉で照明デザインを表現すること はとても大事なことなんですよね。

東海林 伝えるということは本当に難しい。 石井幹子さんから「セミナーをちゃんとやるのは当然。最後に照明デザイナーらしいパーティーを開きなさい」と仰せつかったんです。シンポジウムやセミナーとはひと味違ったものを考えました。照明デザインや照明デザイナーとは何か、伝えるためのイベントとなったと思います。



IALD JAPAN MEMBER LIST

瀬川佐知子

田中圭吾

IALD JAPAN メンバーリスト[五十音順]

※2013年10月31日現在

Fellow	石井幹子	石井幹子デザイン事務所	http://www.motoko-ishii.co.jp
Duefaccional	石田聖次	LIGHTSCENE	http://www.lightscene.jp
Professional	日田宝八 岩井達弥		
		岩井達弥光景デザイン	http://www.lumimedia.jp
	小野田行雄 	イリス・アソシエーツ ワークテクト	http://iris-a.com
			http://www.worktecht.com
	川端章彦	dpa lighting consultants Japan LLP	http://www.dpalighting.com
	小西武志	建築照明計画	http://alg.jp
	澤田隆一	サワダライティングデザイン&アナリシス	http://slda.co.jp
	東海林弘靖	LIGHTDESIGN INC.	http://www.lightdesign.jp
	武石正宣	ICE都市環境照明研究所	http://www.ice-pick.jp/
	近田玲子	近田玲子デザイン事務所	http://www.chikada-design.com
	内木宏志	ナイキデザイン事務所	http://naikidesign.com
	Nick Hoggett	dpa lighting consultants Japan LLP	http://www.dpalighting.com
	松下美紀	松下美紀照明設計事務所	http://www.mikilight.com
	面出 薫	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
	森 秀人	Lighting M	http://www.lighting-m.co.jp
Associate	Andy Leung	ワークテクト	http://www.worktecht.com
	飯塚千恵里	飯塚千恵里照明設計事務所	-
	池田俊一	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
	板倉 厚	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
	伊藤達男	伊藤達男照明デザイン研究所	http://itoolight.on.coocan.jp
	稲葉 裕	フォーライツ	-
	内野春佳	-	-
	内原智史	内原智史デザイン事務所	http://www.ucld.co.jp
	大好真人	LIGHTDESIGN INC.	http://www.lightdesign.jp
	岡本 賢	Ripple design	http://ripple-design.jp
	岡安 泉	岡安泉照明設計事務所	http://www.ismidesign.com
	小川基世	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
	角舘政英	ほんぽり光環境計画	http://www.bonbori.com
	カタリーネ リエクスティニャ	ワークテクト	http://www.worktecht.com
	上村 悠	RAYDESIGN INC.	http://www.raydesign.jp
	久保隆文	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
	窪田麻里	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
	黒瀬俊英	ワークテクト	http://www.worktecht.com
	黒田 茜	LIGHTDESIGN INC.	http://www.lightdesign.jp
	小西美穂	建築照明計画	http://alg.jp
	小山憲太郎	コヤマケンタロウデザイン事務所	http://koyamadesign.jp
	菅原千稲	フィラメント	http://filament.main.jp
	瀬川井加フ	ニノニハル プニンユーブ マンフィーツ	hater the second

ライティング プランナーズ アソシエーツ

ライトモーメント

http://www.lighting.co.jp

http://www.lightmoment.jp

SSOCIATE	

田中謙太郎	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
田中康一	LIGHLINKS INTERNATIONAL LIMITED	http://www.lightlinksltd.com
田中裕美子	-	-
垂水茂喜	RAYDESIGN INC.	http://www.raydesign.jp
東宮洋美	ライトスケープ デザイン オフィス	http://www.ldo.co.jp
戸恒浩人	シリウスライティングオフィス	http://www.sirius-lighting.jp
富田泰行	トミタ・ライティングデザイン・オフィス	http://www.tldo.jp
永島和弘	チップス	http://www.chipsss.com
中島龍興	中島龍興照明デザイン研究所	http://www.h2.dion.ne.jp/~nakajima
永田恵美子	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
中谷太郎	*CYPHER	http://www.cypher-d.com
永津 努	フェノメノン ライティングデザイン オフィス	http://www.phenon.jp
長町志穂	LEM空間工房	http://www.lem-design.com
野澤寿江	近田玲子デザイン事務所	http://www.chikada-design.com
早川亜紀	灯デザイン	www.toh-design.com
原田武敏	焔光景デザイン	http://www.homura-lsd.com
福多佳子	中島龍興照明デザイン研究所	http://www.h2.dion.ne.jp/~nakajima
藤井美沙	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
真壁智香	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
松本浩作	スタイルマテック	http://www.style-matec.co.jp
馬渡秀公	アカリファクトリー	http://www.akarifactory.com
村岡治彦	村岡治彦デザイン事務所	-
村岡桃子	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
村角 リーダー 千亜希	スパンコール	http://www.spangle.jp
日黒朋美	内原智史デザイン事務所	http://www.ucld.co.jp
八木弘樹	内原智史デザイン事務所	http://www.ucld.co.jp
山下裕子	ワイ・ツー・ライティングデザイン	-
山本幹根	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp
吉野弘恵	アカリ・アンド・デザイン	http://www.akari-d.com
綿貫真由美	内原智史デザイン事務所	http://www.ucld.co.jp
河原武儀	ライティング・コンサルタンツ・オフィス	_
水馬弘策	遠藤照明	http://www.endo-lighting.co.jp
東 悟子	ライティング プランナーズ アソシエーツ	http://www.lighting.co.jp

Affiliate

Questionnaire

IALD JAPAN メンバーアンケート

IALD JAPAN Member Questionnaire

照明デザイナーが集まって行われた大規模なイベント、ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN終了後、

IALD JAPANメンバーである照明デザイナー達に現在の心境を聞いた。

Question

Q1. 「Enlighten Asia in Japan 2013」を終えてご自身として思われたこと。

Q2.「アジア感覚の光」についてどう考えるか。

飯塚千恵里 | 飯塚千恵里照明設計事務所

Q1 バスツアーには一般の方々の参加が多く、照明への関心の高さに驚かされた。事 前に集めた資料からは照明デザイナーの高い使命感と責任感、真摯な姿勢が伝わり 感動した。業界内のイベントにとどまらず、もっと社会に発信する内容になれば良いの

Q2 激しくも繊細でかつ多様(diversity)であること。

石井幹子 | 石井幹子デザイン事務所

Q1、Q2 日本の照明デザイナーが結集して、このイベントに臨んだことは、新しい歴史 の1頁をつくったといえましょう。1人1人の無償の努力が実を結び、美事な成果をもたら したと感動しました。携わったすべての照明デザイナーの方々に拍手を送ります。ここ から新しいアジアの光も生まれてくることでしょう。

石田聖次 | LIGHTSCENE

Q1、Q2 照明デザイナーの存在が明確化され、再認識してもらえる良いイベントであっ たと思う。明るくする事に対しての目的が解りやすく提示され、道標となるような企画が 沢山あり、今後の展開が楽しみになってきた。「光」は、衣食住よりも前段にあり、それを 扱う事の大切さを継続的に発進できたら良いと考える。

池田俊一 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1、Q2 今回のEnlighten Asiaを通じ、照明デザイナーの職能について多くの人び とに認知いただけた良い機会になったのではないかと思います。今後は日本をはじめ アジア諸国の教育機関に「照明デザイン」分野として介入し、プロフェッショナルな照明 デザイナーの育成、また照明文化の啓蒙に広く貢献することが望まれるのではないか

伊藤達男|伊藤達男照明デザイン研究所

Q1 私事、あまり積極的に協力できなかったので申し訳なく思っています。企画から準 備、運営、に携わった皆様、それぞれにたいへんな努力をされたのではないでしょうか。 ご苦労様でした。会場の限られた目時と場所での印象ですが、一生懸命さが伝わって くるようでした。

Q2 もっと本気で考える機会になってほしかったです。

稲葉 裕|フォーライツ

Q1、Q2 欧米に追い付けと邁進してきた日本の照明デザイン。個のレベルでは世界に認 められる照明デザインは発信できていますが、今回のイベントは日本の照明デザイナー が職能団体として現在まで邁進してきた結果を楽しく、ハイレベルで世界に発信できたこ とは、照明デザインの歴史に残る記念すべき出来事であったと思いました。

岩井達弥 | 岩井達弥光景デザイン

Q1、Q2 照明デザイナーが総力を決したと言って過言でないイベントになりましたね。 セミナーだけでなく、準備作業の中で互いの仕事ぶりを垣間見ることができたのも大変 勉強になりました。今回は無事開催できたことに大きな意義があり、今後はセミナーの 内容をさらに充実させ、楽しく学べるイベントにしていきましょう。

Q1、Q2 事前の打ち合わせも出張等の都合で伺う事ができなく、また当日も顔を出す 程度でした。会場では一際センス良く光るブースを拝見し、来年は積極的に参加させ て頂きたいと思いました。

内原智史 内原智史デザイン事務所

Q1、Q2 日本の照明デザインの歴史が半世紀とすれば、今回のIALD JAPANの果 敢な試みは50年の節目となる取り組みと言えるだろう。欧米より学んできた過去と、多く の経験を経てオピニオンやアイデンティティーを表現できるリーダーシップを発揮すべき 未来への大転換である。世界やアジアにおける日本の役割は大きく、さらに深い交流を 期待したい。

大好真人 | LIGHTDESIGN INC.

Q1、Q2 シンポジウム、セミナー、ラジオを聴いたメモを見返しますと、LEDを切り口とし た話題が多い。今それだけ多くの世界の照明デザイナーに関心があり、批判課題以 上に、大きな期待が込められたものだと思いました。ハイテク化する光との上手な付き 合い方に、ますます豊かで楽しい照明デザインのチャンスがあると感じます。

岡本 賢│ Ripple design

Q1 イベントを通じ世代を超えた照明デザイナーの方々とお話する機会を得て大きな 刺激になりました。企画の発想力、それを実現する行動力、手際の良い運営等日本の 照明デザイナーの器用さに改めて驚きました。

Q2 繊細な光と雑多な光が混在しながら、あらゆる光を受け入れ、楽しむ實大さと好 奇心を感じます。

岡安 泉 | 岡安泉照明設計事務所

Q1 大変画期的な動きだったと思います。今回はあまり深く関わることが出来ず、残念 な思いです。今後、参集範囲の拡大が図れ、おのずと継続を望まれるような企画へと

Q2 アジアもしくは日本の光はこれから我々がデザインを重ねることで新しくつくっていく ものだと考えています。今回のような機会を利用し、情報共有とムーブメントを起こすこ とが出来ればそれは可能だと考えています。

小川基世 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1 照明の専門家がこれほどに集まる機会は数少ないので、よい刺激となった。自分 の考えを深めるよいきっかけとしたい。

Q2 アジアと一口に言っても、それぞれの国・地域によってさまざまな光がある。各国の 光の個性を捉え合いそこに根付く感覚の違いを意識することも、アジア感覚を磨く上 で大切なポイントなのではないか。

小野田行雄 | イリス・アソシエーツ

Q1 IALD Japanの存在を世間に広報する事ができた点で、今回は結果として成功 に終われたと思っているが各担当者が準備期間も含めて大きな負担の上に成り立っ た事は今後の反省点としておくべきかと思う。

Q2 グローバルな時代であるがゆえに、われわれはアジア人として、理屈ではなく本能 的に選択する光がイコールであると思っている。

角舘政英 | ほんぽり光環境計画

Q1、Q2 日本の景観評価上、明らかに整備が遅れた地域はそこの文化的歴史財産が残 っている例が多々ある。アジアという地域ではあまりにも新しさの追求のために失われている 地域の価値があり、アジアの持っている地球全体の中での共通の文化を再認識する必要 がある時に来ている。ライティングはそんな価値を早く可視化する唯一のアイテムでもある。

全用筐十 ワークテクト

Q1 準備委員会議が2011年9月7日からはじまるさまざまな局面がありましたが、最後 には日本を代表するデザイナーがよく結束し日本の照明デザイン史に残る記念すべき イベントになりました。

Q2 アジア独自の照明デザインは、個々の考え方と国の文化により高い水準で現在文 化が生まれている事を感じました。

上村 悠 | RAYDESIGN INC.

Q1、Q2 心地よい光を求めて照明デザイナーを目指したことを思い出しました。震災以 降、特に求められる節電・省エネの方向と、技術革新によってアジア諸国においても急 速に進む新光源の開発、いろいろなリクエストにも応じた社会性のある光を提案するこ とが今は必要なのだと思います。感じる幅を広げ心地よい光を届けたいです!

川端章彦 | dpa lighting consultants Japan LLP

Q1 一番大きな成果は、関係者のお力を借りながらも、IALD Japanが中心となり、この イベントを成し遂げたことだと思います。有明あかりスタジオの「愛しの一品」展示は不

Q2 アジア以外の人びとが期待するアジア感覚の光と、アジア人が感じるアジア感覚 の光の違いを理解しながら、われわれアジア人は、この感覚を養い、普及させる必要が あると感じます。

久保隆文 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1、Q2 日本、アジアの照明デザインが世界に注目されることを期待しています。アジア 感覚の光といっても日本、韓国、中国…… 国によってまったく違うものと感じています。 静かな光、派手な光、躍動感のある光、下品に見えてしまう派手な光も見かたによって は楽しくワクワクします。どれもアジアに欠かせない光と感じています。

窪田麻里 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1 新しいかたちで照明デザイナーの存在とバイタリティーを示すことができ、何よりデ ザイナー間の繋がりがより深まったイベントだった。

Q2 アジアをひとつのイメージに括ることは難しく、陰翳礼讃もエネルギッシュな光も、ど ちらもあるのこそがアジア感覚の光なのだろうかと感じた。日本の光を意識する機会に もなった。

黒瀬俊英 | ワークテクト

Q1、Q2 今、Enlighten Asiaを終えて改めて「アジア感覚の光」について思うことは、 つながりだと感じました。欧米などで先行した照明技術やデザイン論は個々のデザイン 力が強いですが、アジアのデザインは光の役割を灯影するだけでなく、光から生まれる 次のつながりを発信しているように感じました。このつながりをアジアからグローバルに 発信していくのがわれわれの役目かもしれません。

黒田 茜 | LIGHTDESIGN INC.

Q1、Q2 アジアの中でも、大陸的感覚を持つ中国のダイナミズムに圧倒されることがあ るように、それぞれに特徴があり、個々には個性があるのだと感じています。哲学的思 考から照明デザインを導く考えには強く惹かれました。照明デザイナーも多様性の中 で、刺激を受けたり与えたりという交流が拡大していくことを楽しみにしています。

小西武志 | 建築照明計画

Q1 素晴らしい企画だったと思います。単なる物産展ではなく今回のFairは照明の奥 深さを知らしめる事ができたのではないかと評価いたします。

Q2 光のあり方は文化背景に影響されているのですが他のアジアの国と比べて日本 は独特です。その強みをもっと照明計画に反映すればと思います。

小西美穂 | 建築照明計画

Q1 アジアの照明デザイナーが集うこの会で、それぞれの 光の捉え方を知る事ができ る有意義な会だった。

Q2 アジアの光は、西欧とは異なるユニークさを持ち、繊細かと思えば大胆な光の表現 を持つ。各国における光のあり方もさまざま。だからこそ、共通する光の感覚を大切に し、異なる光のあり方を尊重し、アジアらしい光を生み出したい。

小山憲太郎 | コヤマケンタロウデザイン事務所

Q1 国内の多くの照明デザイナーたちが、企画段階から参加し、準備から実施の運営 に至るまでを、それぞれの協働によって行えたことは、とても面白くまたスゴイことだった

Q2 強い"個性"としてあるこの光のイメージを再認識して、照明デザインに生かしてい くことの重要性は、さらに増していくのだろう。

澤田隆一 | サワダライティングデザイン&アナリシス

Q1 長期に渡る準備を進める中で揉めることもなく着実に物事が進むさまを見て、「照 明デザイナーの人たちって何て素晴らしいんだろう!」と、他人事みたいにみなさんの 協調性と行動力に驚嘆いたしました。

Q2 多くの生命を宿し、豊かな変化を見せる気候風土に培われた光の感覚。これが 「アジア感覚の光」だと考えます。

東海林弘靖 | LIGHTDESIGN INC.

Q1、Q2 このイベントは、日本ではじめて開催された照明デザイナーが結束しデザイン 力を世の中に示すものであったが、同時に照明業界がデザインのジャンルにも目を向け てくれた点で大きな意味があったと考える。今後もこの良い関係を発展しつつ、照明デ ザイナーが照明産業を大胆に牽引する役目を担うように舵をとっていきたい。

菅原千稲 | フィラメント

Q1 もったいなかった点としては、今回のイベントがIALD JAPANという日本の照明デ ザイナー団体の初のイベントとして認識されていなかったこと。

Q2 最近、東京の光を見直しています。蛍光灯の白い光が中心の東京の風景は欧米 にはないおもしろさがあるように思います。

瀬川佐知子 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1、Q2 照明デザイナーの団結力にびっくりしました。ただ、準備や当日の運営などで かなりの負担になった方もあるかと思います。今後、続けていくのならば、これらの負 担をどう減らしていくことができるかが鍵になってくるかと思います。クオリティーを下げ ず、項目を整理することもひとつの方法だと思います。

武石正宣 ICE都市環境照明研究所

Q1 やっとこういう時期に来たんだなと感じたのが第一の印象。照明デザイナーが50 名超集まって、ひとつの方向に対し総力戦で動いた事は、これからの日本の照明デザ インのエポックになったのではないかと感じている。

Q2 普段何気なく感じている光や、無意識に好んでいる光が、実はアジア的な物だと、 海外で感じる事がある。どことなく混沌。どことなくシームレス。

田中圭吾|ライトモーメント

Q1、Q2 はじめてのアジアでのEnlighten、来場されている方々や会場の雰囲気を見 て、今後の光に対する期待や勢いが終止感じられた会であったと実感しています。こ れから増えるであろうアジアでの様々な「光」の中において、国境を越えて一際感慨深 い、心に訴えかけるHIKARIを創造していきたい。

田中謙太郎 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1 日本の主要な照明デザイナーが同じ意識でひとつの事を成し遂げた事自体に成果 があったと感じる。今後は照明メーカーからも雑務などの協力を仰げると良いと思う。

Q2 アジアの光の印象は中国などに見られる派手なものと日本などの影の世界の両極端 が混在している。日本からは影の美意識を武器に世界に発信できる良いと感じている。

田中康一 | LIGHLINKS INTERNATIONAL LIMITED

Q1、Q2 香港、上海、シンガポールなどの国際都市で活躍する照明デザイナー達は、 常にインターナショナルな環境で仕事を進めている。アジアの光というテーマでイベント を行えたことの意味は大きいと思う。質の高い日本の照明デザインスキルを、アジアでど れだけ存在をアピールできるか。今後も継続していくことが重要だと感じた。

田中裕美子

Q1、Q2 照明デザインという切り口での初のイベント開催は有意義だった。具体的な 個々の準備作業をもっと早く開始できればよかったと思う。全体的にセミナー、トーク形 式のイベントが多かったので多様な内容にしたほうがイベントとしては面白いのでは。ア ジア感覚の光は商業的な光という印象があるが個人的にはあまり掴めていない。

垂水茂喜 | RAYDESIGN INC.

Q1、Q2 「Enlighten Asia in Japan 2013」を終えて、日本における照明デザイン の進化を強く感じました。多くのイベントが意義のある素晴らしいものでした。混沌とし たアジア感覚のなかで、繊細な日本の感覚を活かし、諸先輩方の活動を礎に、これか らもアジアに、そして世界に向けて照明デザイン活動を続けていきたいと思います。

近田玲子 | 近田玲子デザイン事務所

Q1 アジアの照明デザイナーがどんなことを考えているのか知り、得る物が多かった。 準備は大変だったが、祭りは神輿をかつぐのが一番愉しい。

Q2 LEDとPCを武器に照明の世界が映像化して来ている。LEDを使わざるを得ない 今、もう1度、本来の人に寄り添う明かりを見つめ直す時である。

東宮洋美 | ライトスケープ デザインオフィス

Q1、Q2 ライティング・フェア レセプションが「迎え」。セミナーシンポジウム、あかりスタジ オ、バスツアーの「巡り」で最大のスペクタクル。日本科学未来館の美しい地球の下、炎 太鼓の「送り」を合図にフェアウェルパーティとエクスカーションは「直会」。多彩なプログ ラムとデザイナーが並走した祭は、教養と遊びにあふれるサロンでありました。

戸恒浩人 シリウスライティングオフィス

Q1、Q2 なにより多くの世代を超えた照明デザイナーが一体感を持ってつくり上げること ができたことが素晴らしい事だったし、アジア感覚そのものでした。パネラーのエネルギー や情熱が会場から溢れ出し、聴講者だけでなくメンバー自身が大いに刺激を受けるもの でした。今後もアジアの光が個性豊かに発信されていくこと期待しています。

富田泰行|トミタ・ライティングデザイン・オフィス

Q1、Q2 アジアではじめての開催ということも価値があったが、私たち照明デザイナー が企画から運営まですべてをつくり上げ、国内外に向けてメッセージを発信することが できたことは評価に値する。また、アジアの多様性や固有性も垣間みることができ、日本 の照明の立ち位置が見えてきたことも成果であった。

内木宏志 ナイキデザイン事務所

Q1、Q2 今回の会議・企画・展示共に、照明デザイナーらしい良いパフォーマンスとし て、来訪者の脳裏に記憶されたと思います。日本の照明デザイン界の「人材と感性」が 日本のみならず、アジアや世界で評価される様、発信し続ける必要性を改めて感じまし た。自分の中でも大切な経験となり、新たな思考のスタートとなりそうです。

永島和弘 チップス

Q1、Q2 僕は準備にあまり参加できませんでしたので率直な感想として、お祭りが楽し く過ぎ去った感じがあります(お手伝いできずごめんなさい)。しかし今後、日本発信の 照明デザインが世界に認知されるための下地ができたように思います。アジアの照明 デザイン文化は世界で愛される繊細さがあると思います。

中島龍興 | 中島龍興照明デザイン研究所

Q1、Q2 日本の照明デザイナーが一丸となって実践したこのイベントはフェアを訪れた 国内外のお客様にきっと好印象を与えたと思う。また、アジア感覚の光については一見 雑多に思われるが、その土地や風土に合っていれば、それはそれで面白く、問題のあ るところはこれから時間をかけて洗練されていくに違いない。

★田恵美子 │ ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1、Q2 本格的な始動を目前に産休に入ったため、イベント当日に一参加者として体験 しました。経歴や所属事務所などの枠を越えた体制にとても新鮮な勢いと活力を感じま した。「アジア感覚の光」には光単体だけでなく、素材や建築様式を介した光と共に暮ら し身に付いたものがある。そんな奥深い感性が世界に届いたら素晴らしいですね。

中谷太郎 *CYPHER

Q1、Q2 近いようで普段ほとんど交流のなかった中韓の照明デザイナーとも交流を持 てて良かった。プレゼン手法から照明哲学までいろいろと気づかされる所も多かった。 そして照明デザイナー同士で照明を語り合うと国や言語を感じる事がなく、「照明デザ イン」という共通言語があることを嬉しく感じる。

永津 努 | フェノメノン ライティングデザイン オフィス

Q1 全体を通して、照明デザイナーの職務や考えを発信でき、とても良いきっかけとなっ たと思います。今後、IALD団体として日本の照明の考えかたや、基準などをつくる新 たな基盤としての役目があると感じてます。

Q2 常に新たな光環境を臨み、チャレンジを試むことができる環境で進展してきている 光だと、感じてます。

長町志穂 | LEM空間工房

Q1, Q2 私にとってもっとも大きな収穫は、日本の多くの照明デザイナーと同じ目的のこ とについて意見を交わし、お互いに理解をし、以前とはまったく違うとてもインティメイト な関係をつくれたことである。メンバーの素晴らしい仕事とその想いを肌で感じたり、企 画の実行力の鮮やかさに感服したりしたことは本当に貴重な機会であった。

野澤寿江 | 近田玲子デザイン事務所

Q1 IALD Japanメンバーの照明デザインに対する熱い情熱が結実した4日間。その渦 中に身を置き、今後の照明デザインの発展の大きな可能性を感じることができました。 Q2 アジアも世界も一様化しつつある照明デザイン。斬新な個性ばかりを追い求めて

いる限り「アジア感覚の光」は見つからないのではないでしょうか。

早川亜紀 | 灯デザイン

Q1、Q2 準備など力になれず心苦しかったのですが、諸先輩方の段取り、気配り、企 画力など、大変勉強になりました。今回のように大きな流れの上で、広い繋がりの中で、 照明デザイナーとしての職能を再認識し、この世界のベクトルを肌で感じることができ たのは、非常に有意義だったと思います。皆さま、大変ご苦労さまでした。

原田武敏 焔光景デザイン

Q1、Q2 今回のイベントは日本の照明デザインにとって、非常に意義の大きいものとな ったと思う。私にとっても、これまでなかなか接点のなかった方々とイベントを通して協働 することで、いろいろとお話する機会を得ることができた。私はまだまだ海外の照明事 情には疎いので、IALDでの活動を通して世界の照明に触れていきたいと思う。

福多佳子 中島龍興照明デザイン研究所

Q1、Q2 従来のライティングフェアよりも照明デザインよりの企画が多く、一般の来場者 にも照明デザインの面白さをお伝えできたと思います。一方でメーカーの展示を十分に 見る時間があまり取れませんでした。アジア感覚の光に関しては、照明に対する考え方 も技術の発達に応じて変わっていくので、今後も継続的に考える機会があると良いか と思います。

藤井美沙 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1、Q2 シンポジウムを通し、カラフルで活気あるアジアの光というのは、宗教や土着的 概念をベースとしながら経済発展の中で成長してきたと感じた。その中で、アジアの照 明デザイナーが都市照明をデザインする際に、その独特な感性を活かしながらもコン テクストを読み取り、親しまれるデザインとして発展させている様子が伺えた。

松下美紀 | 松下美紀照明設計事務所

Q1、Q2 資金調達や収支等資金部門を担当しました。協賛いただいた企業様、長い準備 期間を協働した照明デザイナー仲間という財産に深く感謝します。アジアの光の変遷は一 言で語れませんが、仕事をする心構えは常に相手国に真摯な態度で真剣につきあうこと。 これこそが、私が長年培ってきたアジアの未来を照らす光であると考えています。

松本浩作 スタイルマテック

Q1、Q2 とても素晴らしい会でした。われわれの立場を再認識すると同時に、アジアの 中で、世界の中で私達の進んで来た道、行く道に誤りがないことを確信しました。多く の仲間との会話を通じ、同じような価値観を持つ同胞が居る事をとても心強く思い、今 の職をまっとうして行く自信と勇気が改めてできました。この湿度の高い気候でアジアで も独特の光文化をリーディングする日本のデザイナーのますますの活躍を期待します。

馬渡秀公 アカリファクトリー

Q1 日本初のEnlightenへの参加は、代え難い経験です。これほど多くの照明デザイ ナーが日々奮闘している事を知り、目標と勇気をいただきました。

Q2 アジアには多くの環境と文化があります。お互いに尊重、刺激しあって高めていけ たらいいと思います。決してフラットにはなりたくないですね。

村岡治彦|村岡治彦デザイン事務所

Q1 企画から運営にいたるまで良かったと思います。たくさんの照明デザイナーが、協 力して行ったイベントと言うことで大変意義があると感じました。

私自身が大阪を拠点に活動しており、今回のイベントでは、他の会員の方々にご負担 をお掛けしたことをお詫びするとともに、感謝してます。

Q2 日本人が持っている「繊細な光感覚」を大事にしたいと思います。

村岡桃子 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1 このようなイベントがあることで、照明デザインに携わる人の中での交流やそれぞ れの個性の拡張にとてもいい影響を及ぼすと思うし、職能をより活性化することにもつ

Q2 欧米感覚の光に対してより多彩で寛容な光。ただ構築物よりも自然にある光の中 に、よりアジアらしい光というのは存在するように思う。

村角リーダー千亜希 スパンコール

Q1、Q2 はじめて日本の照明デザイナーが集まって「Enlighten Asia in Japan 2013」を開催する事ができて、大変有意義だったと感じています。国内外の照明デザ イナーのセミナーを聞く機会も貴重でした。また、京都ツアーでは、茶室のあかりを観て みんなで検証でき、またとない充実した時間を過ごせました。今後も日本から「照明デ ザイン」を発信していけたら素晴しいと感じました。

目黒朋美 | 内原智史デザイン事務所

Q1 Enlighten Asiaを終えた時の皆さんの笑顔が輝かしかった事が全てを語って いたと思います。照明の技術の進歩が展示されるLighting Fairと照明の文化を創っ て行く私たち照明デザイナーのEnlighten Asiaが同じ場所で行われた事もIALDを 広く知っていただく上で意義がありました。

Q2 伝統や文化をそれぞれ大切にした結果がそれぞれのアジア感覚の光。

面出 薫 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1 アジア初のプロの照明デザイナーによる企画イベントだったので、多くの課題を露 呈しました。しかし第一歩としては大成功。最大の収穫は私達 IALD Japanの仲間 意識です。

Q2 明らかに欧米にない「アジア感覚の光」の台頭を実感するが、「アジア」という共通 概念を持つこと自体、一筋縄でないことに気づきました。

森 秀人 | Lighting M

Q1、Q2 アジアを語るより、やはり私は日本を語りたいですね。アジアよりジャパン。 素晴らしい日本独特の美意識による光の世界…… これが私の作品づくりのフィロソ フィーであり、世界に向けて発信したい。そのためには、照明以外の業界とも接点を持 ち、新しい枠組みを構築しコラボレーションしていきたいと思います。

八木弘樹 内原智史デザイン事務所

Q1 日本の照明デザイナーが一堂に会し、ひとつのイベントに係わることは大変素晴ら しいことだったと思います。ただし、全体的に欲張りすぎた印象で、イベントの境が一般 の方は複雑だったのではないでしょうか。できるだけコンパクトに分かりやすくする必要 があると思います。

Q2 日本のあかり感覚を大切にしていく必要があります。

山下裕子 | ワイ・ツー・ライティングデザイン

Q1、Q2 日本でEnlightenイベントを「決行」した事は面白かった。しかし、ライティング フェアの企画と合わせて、盛り沢山な内容だったが、強引に走りきった感がある。余裕 ない自分に反省。「アジア感覚の光」についてはさまざまな企画に参加して、アジアの 中でも日本の灯りの感じ方、見方、組み立て方は特徴的だと再認識した。

山本幹根 | ライティング プランナーズ アソシエーツ

Q1 IALD JAPANとして初めての企画として、日本の照明デザイナーが一堂に会し協 力し成功させれたことやデザイナー同士の横の繋がりができたことにとても意味がある と感じました。

Q2 剥き出しの蛍光灯や自熱灯を多用した光がアジア感覚の光だと考えます。統一感 もなく個々の照明があり、それが街全体を形成していると思います。

吉野弘恵 | アカリ・アンド・デザイン

Q1、Q2 あかりスタジオだけの参加でしたが、貴重な体験をさせていただきました。あり がとうございました。また、アジアの光について、次回は、欧米人の照明デザイナーに目 本、中国、韓国の光の違いを聞いてみたいと感じました。もしかしたら、アジア人には気 づかない光の共通点が見つかるかな?と…。

綿貫真由美 | 内原智史デザイン事務所

Q1 このイベントを通じて、IALD会員の皆様とご一緒できたことが、私としては大変刺 激になりました。これを機これからもメンバーが増え、もっと意見交換や情報交換し、日 本からアジア、世界へ発信していく活動家の一員として、これからも参加していきたい と思いました。

Q2 いろいろな光の要素や景観が交わる中でバランスを整えること。

Event Information

ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013

メイン会場

東京国際展示場「東京ビッグサイト」 東京都江東区有明3-11-1



IALD JAPAN主催イベント

主催 | IALD JAPAN 後援 | 日本経済新聞社 開催日時 | 2013年3月6日[水]~7日[木] 会場 | 東京ビッグサイト 会議棟7階 701号、703号



IALD JAPAN企画協力イベント

主催 | 一般社団法人日本照明器具工業会、日本経済新聞社 開催日時 | 2013年3月5日[火]~8日[金]

会場 | 東京ビッグサイト 会議棟1階レセプションホール、 西ホールアトリウムライティングステージ、西2ホール

ENLIGHTENASIA IN JAPAN 2013

[協賛]

ダイヤモンド

株式会社モデュレックス 株式会社 遠藤照明 パナソニック株式会社

プラチナ

大光電機株式会社 ルーチ株式会社

ゴールド

岩崎電気株式会社 カラーキネティクス・ジャパン株式会社 コイズミ照明株式会社 ルートロンアスカ株式会社

シルバー

ウシオライティング株式会社 エルコライティング 株式会社 トキ・コーポレーション株式会社 三菱電機照明株式会社 株式会社YAMAGIWA

ブロンズ

SD.Hess Lighting株式会社 スタンレー電気株式会社 タルジェッティポールセンジャパン株式会社 DNライティング株式会社 株式会社電産企画 東芝ライテック株式会社 日本フロス株式会社 マーチンプロフェッショナル ジャパン 株式会社 マックスレイ株式会社 株式会社 モデュラージャパン 山田照明株式会社 2013年12月13日

[企画·監修·発行] IALD JAPAN http://www.ialdjapan.jp

[編集]

『ENLIGHTEN ASIA IN JAPAN 2013』編集委員会 面出 薫/内原智史/窪田麻里/岡村 賢

[編集協力·執筆] 静賀正樹

[執筆]

阪口公子/三橋倫子

[英訳]

エァクレーレン

[写真]

金子俊男/鈴木文人[フォワートストローク]

[デザイン]

四ノ宮篤史 [LaFRANCE]

[印刷·製本]

三晃印刷株式会社

表3(印刷無し)